戦国無双
キャラクターズ真書

コーエー　出版部　編

SAMURAI
WARRIORS
CHARACTERS
PROFILE

智将、豪傑、勢揃い。

戦国無双のキャラクターの
すべてがわかる

川中島、長篠、桶狭間などの
主な戦場の解説

戦国無双
SENGOKU MUSOU

KOEI

thanks! 25th
コーエー創立25周年

性奔放にして奇行癖あり。
武辺と傾奇に生きた戦国の自由人。

前田慶次

戦国無双
キャラクターズ真書

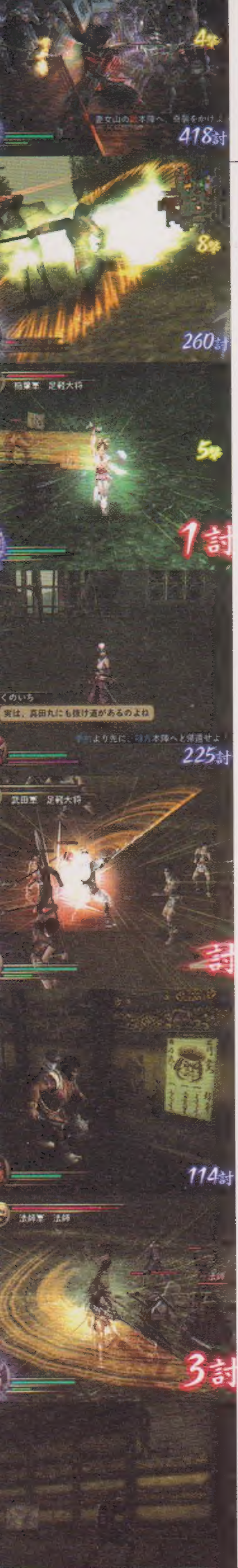
コーエー　出版部　編

SAMURAI
WARRIORS
CHARACTERS
PROFILE

戦国無双
SENGOKU MUSOU

koei

戦国無双
SENGOKU MUSOU
キャラクターズ真書



戦国無双キャラクターズ真書
SAMURAI WARRIORS CHARACTERS PROFILE

Contents

英雄の章 Main Characters

プレイヤーが選択できる15名の人物を解説します

真田幸村・P.004／前田慶次・P.006／織田信長・P.008／明智光秀・P.010／石川五右衛門・P.012
上杉謙信・P.014／お市・P.016／阿国・P.018／雑賀孫市・P.020／武田信玄・P.022／伊達政宗・P.024
濃姫・P.026／服部半蔵・P.028／森蘭丸・P.030／くのいち・P.032

群像の章 Sub-Characters

各ステージに登場する162名の戦国武将を解説します

あ行・P.034／か行・P.052／さ行・P.062／た行・P.072／な行・P.082／は行・P.086／ま～わ行・P.098
◆コラム　P.051／P.061／P.071／P.081

合戦の章 Battlefields

各ステージの中から、戦国史上有名な合戦を解説します

川中島の戦い・P.106／三方ヶ原の戦い・P.110／長篠の戦い・P.114／桶狭間の戦い・P.118
姉川の戦い・P.122／本能寺の変・P.126／山崎の戦い・P.128／上田城攻防戦・P.132／大坂夏の陣・P.134
◆コラム　P.131

本書の目的

『戦国無双』では戦国時代に活躍した武将たちが登場し、実際にあった合戦をもとにさまざまなストーリーが展開します。彼らが実際はどんな生涯をおくったのか、合戦ではどんな戦い方をしていたのか、それを解説するのが本書『戦国無双キャラクターズ真書』の目的です。戦国史を彩る数々のエピソードを読んで、武将たちの人柄や活躍を知れば、『戦国無双』がよりいっそう楽しくなることでしょう。

「群像の章」の武将データの見方

あかお　きよつな
赤尾清綱
浅井家　生没年　?～1573年
STAGE　安土城、姉川、本能寺

①所属家名／家名はゲームにそったもので、史実とは異なる場合があります。

②生没年／年代がはっきりしないものは、「?」がつけられています。

③登場ステージ／ステージ名は略称で掲載しています。実際のステージ名との対照は以下の表のようになります。

ステージ名対照表

ステージ名	略称
安土城攻略戦	安土城
安土城防衛戦	
安土城奪還戦	
安土城潜入	
安土城の舞	
姉川の戦い	姉川
伊勢長島殲滅戦	伊勢長島
伊勢長島の舞	
伊勢長島乱入	
稲葉山城攻略戦	稲葉山城
稲葉山城防衛戦	
上田城攻略戦	上田城
上田城防衛戦	
上田城潜入	
越前防衛戦	越前

ステージ名	略称
大坂城潜入	大坂城
大坂城無断侵入	
大坂夏の陣	大坂
大坂の舞	
桶狭間の戦い	桶狭間
桶狭間乱入	
小田原城潜入	小田原城
小田原城乱入	
川中島の戦い	川中島
川中島宿命戦	
川中島の舞	
川中島乱入	
川中島腕試し	
岐阜城攻略戦	岐阜城
岐阜城防衛戦	

ステージ名	略称
岐阜城潜入	岐阜城
岐阜城無断侵入	
京洛抵抗戦	京洛
京洛の舞	
五右衛門大暴れ	五右衛門
神君伊賀越え	伊賀越え
長篠の戦い	長篠
長篠乱入	
本能寺の変	本能寺
本能寺の戦い	
本能寺乱入	
三方ヶ原の戦い	三方ヶ原
山崎の戦い	山崎
山崎銃撃戦	

英雄の章
Main Characters

真田幸村

SANADA YUKIMURA

家康を脅(おびや)かした赤備(あかぞな)えの突撃

STAGE

川中島の戦い → 三方ヶ原の戦い → 長篠の戦い → 上田城防衛戦 → 大坂夏の陣

三方ヶ原の戦い → 長篠の戦い → 安土城攻略戦 → 山崎の戦い

登場条件 最初から選択可能

PROFILE

生没年：1567～1615
本 名：信繁
父：真田昌幸
子：真田大助

勇 上田城で徳川秀忠軍を阻む

大坂夏の陣での勇猛果敢な戦いぶりに「日本一の兵」と徳川方から称された真田幸村。だが、幸村はこの最後の戦いに至るまで、長く苦しい時を過ごしている。

真田家は信濃の豪族で、幸村の祖父・幸隆のときに武田信玄に仕えた。武田家滅亡後、真田家のわずかな領地は上杉・北条・徳川ら大勢力に包囲されたため、父・昌幸は生き残りをかけて、次男の幸村を上杉家、ついで豊臣家へ人質に出したのである。

やがて秀吉が没して関ヶ原の戦いが始まると、幸村は父とともに西軍に属した。そして本拠・上田城を守り、関ヶ原へ進軍中だった徳川秀忠の大軍勢を足止めする。

だが、関ヶ原で西軍が敗れたため、昌幸・幸村は罪人として紀伊の九度山村に流されてしまう。昌幸・幸村父子は罪の許しを待ちつつ、苦しい生活を送っていた。だが、1611年には昌幸が死去し、幸村は失意の日々を過ごすようになる。

勇 万感の思いで大坂城へ

そんな幸村の運命が変わったのは父の死から3年後の1614年のこと。幸村のもとに豊臣家から使者が訪れ、豊臣方として徳川軍と戦うよう要請されたのである。

もはや天下は徳川幕府のものであり、豊臣方が勝つ見こみは低い。だが、幸村には

武田家臣・真田昌幸の次男。大坂の陣に豊臣方として参戦し、徳川方をおびやかした。

戦場で力の限り戦い、長年の無念を晴らしたいという思いがあった。

やがて始まった大坂冬の陣において、幸村は大坂城の南側に「真田丸」という出城を築いて堅く守り、押し寄せる徳川方の軍を撃退する。幸村の実力を知った家康は幸村を寝返らせようと画策するが、金や所領よりも武将としての名誉を求めていた幸村にはムダなことだった。

翌年の大坂夏の陣になると、幸村は鎧・兜などすべてを赤で統一した「赤備え」の兵を率い、道明寺の戦いで伊達政宗自慢の鉄砲騎馬隊相手に激闘して大損害を与えている。そして翌日の決戦では徳川家康の本陣へ向けて三度にわたって果敢に突撃し、家康を恐れおののかせた。

この一戦で散った幸村だったが、その雄姿は庶民の心をとらえ、武勇談が長く語り継がれた。そして江戸が終わって明治の世になると、真田十勇士を率いたヒーローとして読み物の中に登場するのである。

前田慶次

MAEDA KEIJI

人生に美意識を求めた傾奇者(かぶきもの)

STAGE

伊勢長島殲滅戦 ― 長篠の戦い ― 京洛の舞 ― 小田原城潜入 ― 川中島腕試し

登場条件	上杉謙信をクリアする

PROFILE

生没年：不詳
本名：利大、利益
父：滝川益氏あるいは一益
愛馬：松風

利家をやりこめて前田家を出る

武芸にかけては並ぶ者なく、茶の湯や文学など風流も好む。だが、いたずらやケンカが大好きで、あちこちで騒動を起こす。そんな異色の戦国武将が前田慶次だ。

慶次のようにハデに振る舞い、人を驚かすことが好きな者は「傾奇者」と呼ばれていた。それは単なる奇行ではなく、自分の美意識にこだわり、それを貫きとおそうとする生き方だったのである。

前田利家の兄の養子だった慶次は、利家の家臣となったが、彼は利家の出世や家名にこだわる生き方が気に入らなかった。

あるとき慶次は利家を宴席に呼び、その際に風呂に入るように勧めた。ところが風呂に入った利家は、思わず「ぐわっ！」と叫び声をあげてしまう。風呂に入っていたのは熱い湯ではなく、冷水だったのだ。激怒した利家は慶次を捜すが、すでに慶次は前田家から去ったあとだった。

出世を望まぬ自由な生涯

その後、慶次は京で傾奇者たちとのケンカに明けくれる一方、多くの文化人と交流している。猛将・前田慶次を家臣に迎えようとする大名は数知れなかったが、慶次が心に決めていたのは上杉家だった。つねに正義を求めて戦場に立っていた上杉謙信は、慶次にとって理想の武将だったのだ。

この当時上杉家の主君は景勝だったが、

織田家臣・前田利家の兄の養子。利家を嫌って前田家を出たのち、上杉家で活躍した。

彼は謙信ゆずりの威風を持っていた。また景勝の腹心・直江兼続は、風流好みで正義感が強く、慶次と気心が通じていた。

慶次の上杉家での活躍は、関ヶ原の戦いと同時に行われた出羽の長谷堂城の戦いで発揮された。上杉家の総大将をつとめた直江兼続は奮闘したものの、最上・伊達家が守る長谷堂城を落とせず、撤退を決断する。このとき兼続は死を覚悟したが、慶次が伊達・最上の将兵を次々に撃退して追撃を足止めし、兼続を救ったのである。

関ヶ原の戦いののち、上杉家は徳川家によって所領を大きく削られ、経済的に苦しくなる。このときも多くの大名が高い禄（給料）を出すからと慶次を家臣になるように誘ったが、彼は一切応じなかった。

出世や名声に興味を持たず、傾奇者としての自由な生き方を選んだ慶次。晩年は隠居して「穀蔵院忽々斎」と珍妙な名を名乗り、悠々自適の生活を楽しんだという。

織田信長

ODA NOBUNAGA

新しい世を創造する破壊の魔王

進むか、退(ひ)くか、それとも、死ぬ、か？

STAGE

安土城

登場条件	濃姫・お市・雑賀孫市のすべてをクリアする

PROFILE

生没年：1534～1582
官職：右大臣
父：織田信秀
子：織田信忠、信雄、信孝

尾張の大名。桶狭間の戦いで今川義元を破り、近畿中央部を制して天下統一をめざした。

新しい世の創造をめざす

桶狭間で今川義元を討ち、妻・濃姫の実家でもある斎藤家を滅ぼして尾張・美濃2国を制すると、信長は「天下布武」の印を用いはじめた。これは「武力で天下を制する」、つまり天下統一を意識しはじめたことを意味している。

しかし、信長は単に日本全土を我がものにしようとしたのではなく、意味のない制度や習慣を壊して新しい世を創造しようとしていた。

足利幕府を滅ぼし、浅井・朝倉家に味方した比叡山延暦寺を焼き討ちし、伊勢・長島一向一揆を根絶やしにするなど破壊の限りを尽くした信長。信長と徹底的に戦った本願寺は信長を「仏敵」と呼んだが、信長は不敵にも自ら「魔王」と名乗った。実際に本願寺からすれば、信長は天から降りてきた恐怖の大王にも見えたことだろう。

だが、その一方では、領内の関所を廃止して、楽市楽座で自由な商業活動を奨励するなど、将来を見すえた数々の「創造」も行っている。そのシンボルともいえるのが、日本一の商業都市をめざして造られた安土城とその城下町だ。

信長の創造的な一面は、戦術にも現れている。まだ戦場では脇役だった鉄砲で、武田家の騎馬軍団を撃ち破った長篠の戦いはその代表的なものだし、水戦でも、船体に鉄板を貼って大砲を装備した「鉄甲船」を建造し、毛利家の水軍を撃退している。

また、好奇心の強い信長は、西洋文化に魅力を感じていた。地の果てのヨーロッパからやってきた南蛮の宣教師を心から歓迎し、領内のキリスト教の布教を許可している。そしてワインを飲みながら、宣教師が語る西洋の話に耳を傾け、地球儀を回して世界の大きさを痛感していたのだ。

光秀に与えた謀叛のチャンス

破壊の魔王か、創造主か？　この二面性を見て、信長を信じられなくなったのが明智光秀だ。信長はそれを察していても、光秀には謀叛を起こす度胸などないと見くびっていた。信長が本能寺に滞在したのは、光秀にとって「討てるものなら討ってみよ」という挑発に思えただろう。

結局信長は、謀叛を起こす絶好のチャンスをお膳立てし、光秀の内にある「魔」を呼び起こしてしまったのだ。

明智光秀

AKECHI MITSUHIDE

正義のために悩み、信長を討つ

STAGE

[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
			安土城防衛戦	山崎の戦い

登場条件	最初から選択可能

PROFILE

生没年：1528？～1582
通 称：十兵衛
官 職：日向守
娘　：明智ガラシャ（細川忠興の妻）

織田家臣。本能寺の変を起こして主君・信長を倒すが、その数日後に羽柴秀吉に敗れた。

信長への期待と絶望

明智家は美濃の名門だったが、あいつぐ動乱によって没落し、光秀は美濃を出て各地を放浪していた。光秀は自分の家を滅ぼした戦国乱世を憂い、戦乱を終わらせる実力を持った主君を求めていたのだ。

越前を訪れた光秀は、朝倉家に身を寄せる足利義昭と出会った。義昭から信頼を得た光秀は、義昭を足利幕府の将軍にするために織田信長のもとへ行き、上洛（京へ上ること）を要請した。このとき光秀は、信長こそが自分の求める主君だと確信する。

信長は光秀の願いどおり、義昭を連れて上洛し、義昭は足利将軍となった。光秀は信長からその才能を認められ、いつしか織田重臣として活躍するようになっていた。

しかし、天下統一のために手段を選ばない信長に、光秀は疑念を抱いた。光秀は信長に、焼き討ちや虐殺など非道な行為を慎むよう進言するが、かえって信長の怒りを買い、打ちすえられることもあった。

光秀は信長に失望し、謀叛を決意する。山陽方面に出陣する予定だった光秀は、深夜ひそかに京へ兵を進めた。めざすは信長の宿泊する本能寺である。

苦悩のすえに迎えた最期

こうして信長を倒した光秀だったが、事態は予想もしない方向に向かった。備中で毛利軍と戦っていた羽柴秀吉が、驚くべき速さで京へ進軍してきたのである。

明智・羽柴両軍は山崎で激突するが、4万の秀吉の兵に対し、光秀の兵は1万6千しかいなかった。敗れた光秀は逃亡したものの、落ち武者狩りの農民に襲われて討たれてしまう。

光秀は信長を討ったが、自分が信長に代わって天下を取るという意識は薄かった。天下への野心を燃やす秀吉とは、合戦にかける意気ごみが違っていただろう。

親密だった細川藤孝・忠興父子や筒井順慶らが明智軍に加わらず、秀吉に対抗しうる兵士が集まらなかったのも、光秀を落胆させたはずだ。

「これがおのれの宿命か……」

光秀は、自分の正義に従って信長を討ったはずだが、結局は主君殺しの罪の意識に悩み、押しつぶされたのかもしれない。そんな光秀の心の内面にある弱さが命取りとなったのだろう。

石川五右衛門

ISIKAWA GOEMON

秀吉をあざ笑った天下の大泥棒

STAGE

岐阜城無断侵入 → 京洛の舞 → 伊賀越え → 無断侵入 → 大暴れ

京洛の舞 → 大坂の舞 → の舞 → 舞

登場条件 阿国をクリアする

PROFILE

生没年：？～1594？
出 身：伊賀？
職 業：盗賊

戦国時代末期に活躍した大泥棒。豊臣秀吉に捕らえられて釜ゆでの刑になった。

忍者をやめて泥棒の道へ

若き日の五右衛門は伊賀忍者の頭領・百地三太夫の弟子として、厳しい修業の日々を送っていた。五右衛門は忍者としての腕前は確かだったが、いつか世間を驚かせるような大きなことがしたかった。

やがて五右衛門は忍者から足を洗い、伊賀から出て行った。本来なら五右衛門は忍者の掟により、「抜け忍」として伊賀の里から命を狙われるはずだった。だが、五右衛門が去ったあと、伊賀の里は信長の討伐を受けて壊滅してしまう。このために五右衛門は命びろいしたのである。

腕っぷしと度胸に自信があった五右衛門は、京の南禅寺をねぐらとして盗賊団を結成し、大名屋敷を襲うようになる。天下の大泥棒・石川五右衛門の誕生である。

鳴いた香炉にびっくり仰天

五右衛門が危険な大名屋敷をあえて狙うのは、スリルを求める忍者の血もあったが、それと同時に、武士を憎む心もあっただろう。五右衛門は故郷・伊賀を焼きつくした信長や武将たちを許せなかったのだ。

その五右衛門がもっとも憎んだのは信長の後継者である秀吉だった。五右衛門は大坂城に忍びこんで秀吉の寝所に入り、天下の名品「千鳥の香炉」を奪おうとする。一説では秀吉の命をも狙っていたという。

だが、五右衛門が香炉に近づくと、香炉にあしらっていた千鳥が突然鳴きだした。実際は香炉の足の部分が不安定だったため、ちょっとした振動でカタカタ揺れだしたらしい。この音で秀吉が目を覚まし、五右衛門は捕らえられてしまう。

秀吉は五右衛門の悪事を責めるが、五右衛門は「おまえこそ天下を盗った大泥棒よ」とうそぶいた。秀吉は大いに怒り、三条河原で五右衛門を釜ゆでの刑にする。

このとき、五右衛門は辞世の句として次のような歌を残している。

「石川や　浜の真砂は尽きるとも　世に盗人の種は尽きまじ」（砂浜から砂がなくなったとしても、世の中から泥棒がいなくなることはない）

民衆を無視して悪政を行えば、また自分みたいな盗人が現れるという、世を治める者たちへの忠告でもあった。このようにして五右衛門は世を去るが、権力ぎらいの庶民は天下の義賊として称えたのである。

上杉謙信

UESUGI KENSHIN

正義を信じて戦った無敵の軍神

STAGE

姉川の戦い

登場条件	最初から選択可能

PROFILE

生没年：1530～1578
本 名：景虎、政虎、輝虎
官 職：弾正少弼
父 ：長尾為景

戦神の生まれ変わり

謙信は自らを、戦いの神である毘沙門天の生まれ変わりと信じていた。その信仰の深さは、城内に修行堂を建て、日々祈りつづけたほどだ。また、戦場で掲げる旗印にも「毘」の一文字を使用している。

そんな謙信がひとたび戦いに向かえば、神がかり的な強さを発揮する。先頭に立って敵陣に突入し、敵兵をなぎ払う姿はまさしく毘沙門天の姿そのもので、敵は謙信を「越後の龍」と呼んで恐れていた。

織田信長も謙信の軍神のような戦いぶりを聞くと「神とは争えぬわ」と言い、配下の武将に、謙信自身が出陣したときは正面から対決しないように命じている。

謙信はまた、並外れて正義感が強かった。武田信玄や相模の北条氏康との戦いも、彼らに攻められた弱小の大名や豪族が謙信を頼ったことから始まっている。

いくら正義のためとはいえ、なんの得にもならない戦いを強いられる家臣たちはたまったものではない。たび重なる出兵に不満を持ち、謀叛を起こす者もいた。しかし謙信は、一度裏切った武将でも、降伏すればほとんど許したのである。

宿敵との激しい戦い

謙信の最大の敵が、甲斐の武田信玄だ。信玄もまた合戦の天才だったが、謙信と違って謀略を得意とし、謙信の家臣にしばしば寝返りや謀叛を起こさせている。

越後の大名。もとは長尾姓だが、関東管領・上杉家を継ぎ、武田信玄らと戦った。

このために謙信は信玄に対して激しい敵対心を持ち、信濃の川中島で何度も戦った。とくに激戦となった4回目の戦いでは、謙信自身が馬に乗って一人で信玄の本陣に迫り、信玄に一太刀斬りつけている。

しかし、やがて二人には互いを認める心情がめばえた。のちに信玄が今川・北条家と対立し、甲斐への塩の輸送が止められたとき、謙信は越後の塩を送った。これが「敵に塩を送る」の語源だ。

信玄は跡継ぎの武田勝頼に「自分が死んだら謙信を頼れ」と遺言している。謙信も信玄の死を知ると涙を流したという。

生涯の宿敵を失った謙信も、その数年後には世を去った。謙信は無類の酒好きで、酒量の多さが寿命を縮めたといえる。

正義を信じ、豪快に生きた上杉謙信。今日でも多くの人々がその生き方に共感し、戦国一の武将と称えているのである。

OICHI

お市

悲運に見舞われた天下無双の美女

あたし、負けないよ！

STAGE

- 桶狭間の戦い → 稲葉山城攻略戦 → 姉川の戦い → 安土城潜入 → 本能寺の変
- 姉川の戦い → 安土城攻略戦 → 本能寺の戦い

登場条件 最初から選択可能

PROFILE

生没年	1547?～1583
別 名	小谷の方
父	織田信秀
夫	浅井長政、柴田勝家

織田家臣憧れのお姫様

織田信長の妹。織田家は美男美女の家系で、信長もそうとうな美男子だったそうだが、兄弟のなかでも、もっとも容貌に秀でたのは、このお市だろう。

娘の茶々（淀殿）が、母の供養のために描かせた画像は、色白で、目元が涼やかで品の良さげな唇をしている。『太閤記』にも「東国一の美人にして……」とはっきり書き残されている。

織田家臣でも、ナンバー1の柴田勝家と駆け出しの羽柴秀吉が彼女に執心だったという。とはいえ、お市は殿様の妹、つまり深窓の令嬢で、彼女を一目でも見られれば幸運であり、しょせんは高嶺の花だった。

この家臣の憧れのマドンナは、北近江の青年大名・浅井長政に輿入れをした。いわば政略結婚であったが、夫婦仲はむつまじく、短い間に一男三女をもうけている。

二度の落城の果てに選んだ死

お市輿入れによる浅井家と織田家の蜜月関係は、信長の朝倉攻めにより終わる。もともと浅井家は、朝倉家の後援で戦国大名として独立した。その朝倉家を、織田軍は浅井家を無視して攻撃したのである。長政は朝倉方につくことを決意して織田軍の背後で挙兵し、逃げ道を封じてしまった。

夫と実家の板ばさみになったお市は、兄の危地を知らせるために、信長へ陣中見舞いを届けた。袋に小豆を入れ、その両端を縄でしばったものだった。「袋のネズミ」という意味である。信長は長政の挙兵を察知し、からくも脱出に成功する。

つづく姉川の戦いで、浅井・朝倉連合軍は織田・徳川の大軍に敗れる。その後、浅井家はしばらくは持ちこたえたが、やがて織田軍の包囲にさらされた。お市は夫とともに死のうとしたが、お市を慕う秀吉の活躍で、娘とともに織田の陣中に戻された。翌日、小谷は落城し、長政は自害する。

それから9年後に本能寺の変で信長が死ぬと、お市は柴田勝家に嫁いだ。だが翌年、秀吉に勝家の北ノ庄城を攻められ、娘のみを秀吉の陣に送って、今度は勝家と死をともにしたのである。

なお、忘れ形見の長女・お茶々は豊臣秀吉の側室（淀殿）、次女・お初は京極高次の妻（常高院）、三女・お江は徳川二代将軍の秀忠の妻（崇源院）となった。

織田信長の妹。浅井長政に嫁ぎ、滅亡後は織田家に戻る。のち柴田勝家の妻となった。

阿国 OKUNI

都の人々を魅了した艶やかな舞

STAGE

京洛の舞 – 大坂の舞 – 伊勢長島の舞 – 川中島の舞 – 安土城の舞

登場条件 前田慶次をクリアする

PROFILE

生没年：1573?〜1607?
職 業：踊り手
父　：中村三右衛門?
愛 人：名古屋山三郎

歌舞伎の創始者

関ヶ原の戦いの3年後の1603年は、徳川家康が江戸で幕府を開いた年である。その年、京の四条河原では、一人の男装の麗人の踊りが人気を得ていた。その踊り手を阿国という。

そのいでたちは、金襴の羽織に紫の帯、腰には白鮫鞘の二本の刀を差したもので、茶屋の女と戯れるようすを見せる姿が異風の傾奇者に映ったことから、「かぶき踊り」、「阿国かぶき」と評判がたった。このファッショナブルでセクシーな寸劇は、またたくまにマネをする者が増え、大いに広まったが、一番人気は創始者の阿国だった。

この阿国は当時16歳というけれど、実際の生没年は不詳である。1582年に11歳で奈良の春日大社で踊ったという記録もある。1600年には貴族の近衛邸で「ややこ踊り」を披露したといわれる。

中村三右衛門という出雲の鍛冶職人の娘で、出雲大社の巫女を自称し、勧進（寄付集め）の旅に諸国を訪れて舞をまったとするが、おそらくは歩き巫女といわれる全国流浪の旅芸人の出だろう。

愛人、名古屋山三郎

念仏踊りややややこ踊りを踊っていた一芸人に過ぎなかった阿国に「かぶき風」を吹きこんだのは、愛人・名古屋山三郎だったといわれる。この山三郎は織田信長の姪の子で蒲生氏郷の家臣、で、天下一の傾奇者であった。また、「槍士（槍の使い手）、槍士は多けれど、名古屋山三は一の槍」と囃し歌が残るほどの武芸者でもあった。山三郎は、ちょうど阿国がかぶき踊りを始めた年に、ケンカがもとで命を落としている。

出雲出身の踊り子。奇抜な踊りが京で大人気となり、今日の歌舞伎の原型となった。

さて、「かぶき踊り」で好評を博した勢いで、阿国は京北野に自分の舞台を持った。これは小規模な一座だったので、やがてより扇情的な遊女かぶきや、芸達者な女能に押されて、京を去る。

1607年に、江戸城本丸と二の丸の間で踊りを披露、大成功をおさめた。その後に死去したという説もあるが、1612年に再び北野に戻る。

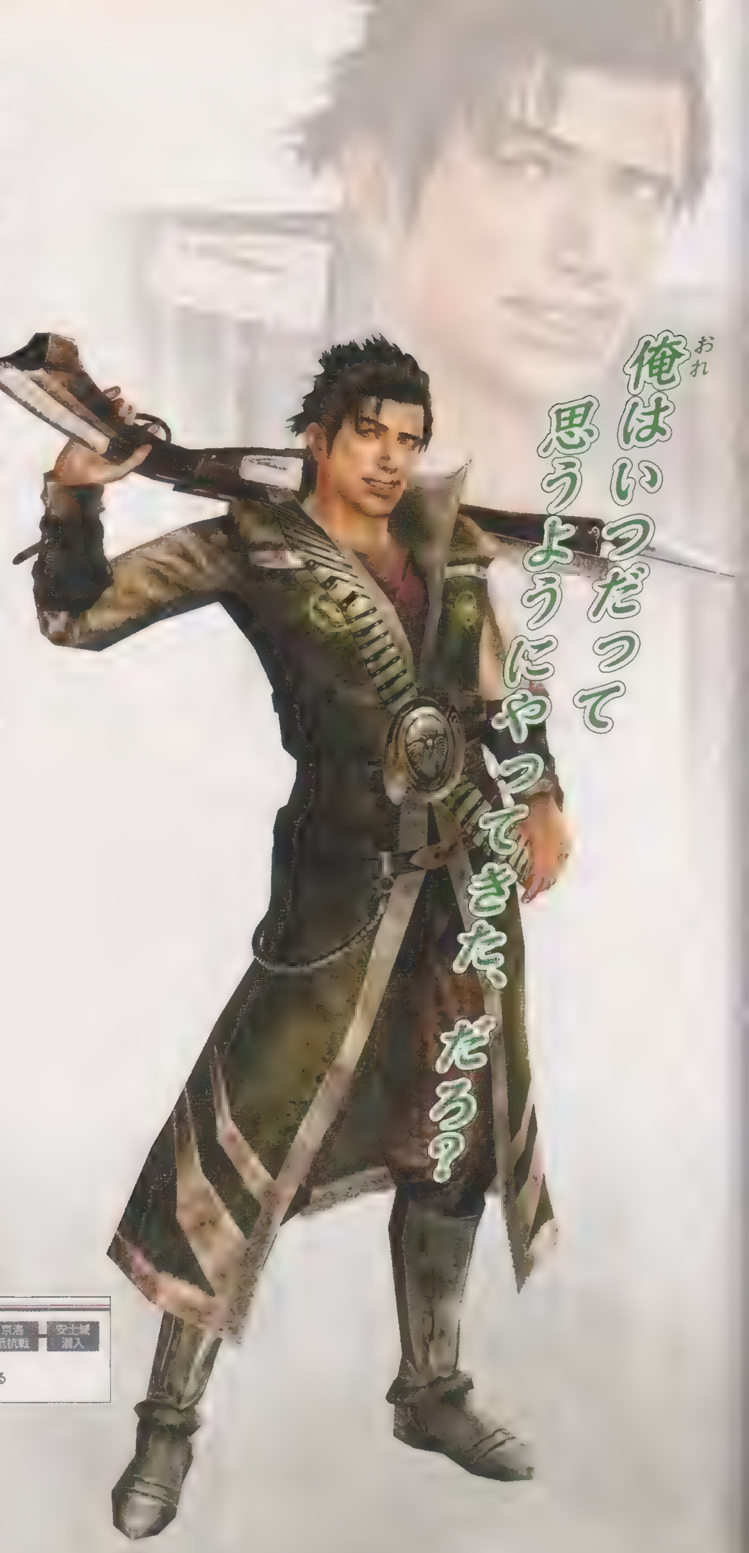
ここでの演目はかつての愛人、山三郎の亡霊を念仏踊りで登場させるというものだった。これを最後に阿国は消息を絶った。

だが、出雲へ戻り、そこで尼になって87歳で没したという伝承も残っている。

雑賀孫市

SAIKA MAGOICHI

自由を求めた鉄砲の名手



STAGE

伊勢長島殲滅戦 — 山崎銃撃戦 — 越前防衛戦 — 京洛抵抗戦 — 安土城潜入

登場条件 人物１名をクリアする

PROFILE

生没年：不詳
本 名：鈴木重秀
所 属：雑賀衆
父 ：鈴木佐大夫

父の指示で本願寺へ向かう

紀伊の雑賀衆は、どこの大名にも属さない、金で雇われる傭兵集団だった。孫市は雑賀衆の頭領・鈴木佐大夫の子で、雑賀衆のなかでもとくに自由を好む男だった。

そんな孫市にとって、本願寺の出陣要請は気乗りのしないものだった。孫市からすれば、本願寺の権力も自分の自由を奪うもののように思えたからだ。

しかし、父・佐大夫をはじめ雑賀衆には熱心な一向宗（本願寺の宗派）の宗徒が多かった。孫市は父に尻をたたかれるようにして、大坂の本願寺へ向かったのである。

大坂の戦況は孫市を驚かせた。本願寺に集まった宗徒は、みな念仏を唱えながらひたすら織田軍に突撃していく。対する織田軍は、彼らを容赦なく殺害した。まるで地獄絵図である。

孫市は信長の非情な戦いぶりに怒りを覚え、本気で織田軍と戦う決意をする。雑賀衆は鉄砲を使った集団戦闘が得意で、孫市が指揮をとる鉄砲隊は、織田の将兵を次々と倒していった。

織田軍を恐れさせた鉄砲の腕

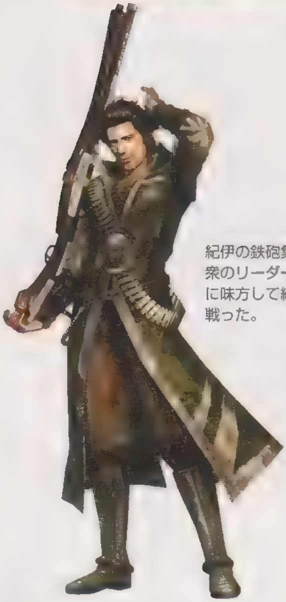
織田の陣中は恐怖に震えていた。宗徒の自滅覚悟の突撃に、鉄砲に撃たれる恐怖が加わったのだ。とくに部隊の大将は重点的に狙われ、崩壊する部隊が続出した。

一方本願寺の指導者たちも、たび重なる戦いにしだいに弱気になっていった。このため、信長と本願寺の間に休戦協定が結ばれたのである。必死で戦っていた孫市は、勝手に休戦されたのが不満だったが、しょせんはただの傭兵であり、文句を言える立場ではなかった。

しかし、信長は単に休戦したわけではなかった。雑賀孫市の名は織田の陣中に知れわたり、信長も雑賀衆の強さを痛感している。そこで雑賀衆を元から絶つことを考え、この間に紀伊へ兵を送ったのだ。

信長に攻められた孫市は、あっさり降伏する。一時は真剣に戦ったとはいえ、やはり孫市は雇われ者である。本願寺の行くすえは彼にとって他人事だったのだ。

だが、この降伏により、孫市は一向宗徒の多い雑賀にいるのが気まずくなった。結局孫市は雑賀を去り、その行方は知れなくなる。旅先で病死したとも、信長の死後、豊臣秀吉に仕えたともいわれている。



紀伊の鉄砲集団・雑賀衆のリーダー。本願寺に味方して織田信長と戦った。

武田信玄

TAKEDA SHINGEN

宿敵との抗争に明けくれて天下を逃す

戦国最強の軍団を率いる

「疾きこと風の如し／徐かなること林の如し／侵掠すること火の如し／動かざること山の如し」

これが武田信玄の旗印として有名な「風林火山」の句だ。中国古代の兵法書『孫子』から引用されたものである。要するに攻めるときは迅速に、徹底して攻め、守るときはヘタに動かず、じっくり守るという戦場での心得を表している。

こんな旗印を掲げて戦えば、それだけでも強そうだが、実際に信玄率いる武田騎馬軍団は、戦国最強といわれている。

STAGE

川中島の戦い ― 小田原城潜入 ― 長篠の… ― 安土城… ― 山崎の…

（安土城…から分岐）― 川中島宿命戦

登場条件	真田幸村をクリアする

戦は手段にすぎんよ
それを戦でしか証明できんのが
悲しいがね

PROFILE

生没年：1521～1573
本 名：晴信
官 職：信濃守
父：武田信虎

あの織田信長でさえ、日ごろから信玄に贈り物をして友好を保とうとしていたし、信玄の娘を息子・信忠の嫁に迎えようとしていた。結局信長が信玄と直接戦うことはなかったが、おそらく信玄死亡の報を聞いたときは胸をなでおろしただろう。

甲斐の大名。父・信虎を追放して武田家を継ぎ、信濃・上野・駿河に勢力を広げた。

宿敵・謙信が天下取りを阻む

そんな信玄がなぜ天下統一できなかったのか？　それはもう一人の戦国最強・上杉謙信が隣りの越後にいたからである。

信玄の領土である甲斐は、南に今川義元、東に北条氏康、北に上杉謙信と強豪に囲まれており、うかつに動けない状況にあった。信玄は今川・北条と三国同盟を結び、信濃攻略を開始する。そこで信濃の豪族・村上義清らが謙信に助けを求めたため、信玄と謙信の抗争が始まったわけだ。

信玄と謙信が戦った川中島の戦いは全部で５回にわたる。この十数年におよぶ対立が、武田家の勢力拡大をさまたげたのである。また、のちには弱体化した今川家を攻めて三国同盟が決裂し、もう一方の北条家とも敵対するようになった。こうして信玄らが東方で争っているあいだに、中央では信長が着実に実力をつけていたのである。

信長を目前にして命運尽きる

その後、信長が京に上って天下統一の野望をあらわにすると、信玄は北条家や謙信と和解して、将軍・足利義昭が組織した信長包囲網に加わる。そして1572年、打倒信長をめざして遠征を開始したのである。

その途中で徳川家康との三方ヶ原の戦いが起こるが、武田軍は家康を陽動作戦で城から出し、大勝利をあげている。信玄にしてみれば「おことの尻はまだまだ青いなあ」といったところだろう。

ところが翌1573年、信玄は三河の野田城を攻め落としたのちに病状が悪化し、甲斐へ戻る途中で病死してしまう。野田城攻めのときに鉄砲で撃たれ、それがもとで死亡したという伝説もある。

跡継ぎの勝頼はのちに長篠の戦いで織田・徳川軍に大敗するが、信玄だったら勝頼のように鉄砲隊に向かって無茶な突撃は命じなかったはずだ。もし信玄が病死せず、信長と戦って破ったとしたら、天下の行方はどうなっていただろうか？

伊達政宗
DATE MASAMUNE

天下を狙う飽くなき野心

遅すぎた戦国デビュー

奥州屈指の戦国大名である伊達政宗は、隠居した父・輝宗の跡を18歳で継いだ。これは1584年のことで、織田信長はすでに倒れ、羽柴（豊臣）秀吉がその勢力を受け継いで天下統一にもっとも近い位置にいた。この遅い戦国デビューが政宗にとっては不運だったといえる。

政宗は、伊達家を継いで早々に大きな試練を迎えた。二本松義継にさらわれた父・輝宗を、輝宗の「わしに構わず撃て！」との言葉に従って義継ともども撃ち果たしてしまったのだ。だが、その後は智謀の片倉

STAGE

小田原城 乱入

登場条件 人物2名をクリアする

PROFILE

生没年：1567～1636
異名：独眼竜
官職：陸奥守
父：伊達輝宗

奥州の大名。蘆名家を滅ぼして奥州に大勢力を築くが、豊臣秀吉に降伏した。

小十郎、武勇の伊達成実をはじめとする家臣の働きもあって、周囲の敵対勢力を次々と攻め滅ぼしていく。

母に毒を盛られ、小田原に遅参す

こうして奥州中央を制覇した政宗だったが、その前に立ちはだかったのが秀吉だ。四国・九州を制覇した秀吉は、全国の大名に号令して北条家が守る小田原城攻略を開始する。この命令は政宗ら奥州の大名に対しては、「従わなければ北条に続いて征伐するぞ」という脅迫でもあった。

政宗はやむなく秀吉の命令に従う決意を固めるが、小田原へ出発する前の晩に母・義姫から毒をもられてしまう。政宗が幼いころに病気で片目を失って以来、義姫は政宗の容貌や内向的な性格を毛嫌いしていた。この機に政宗を殺害し、弟の小次郎に伊達家を継がせようとしたのだ。

政宗は一命をとりとめ、小次郎を討ってようやく小田原に向かうが、すでに秀吉が定めた期日は過ぎていた。だが、政宗はあきらめず、切腹するときの白装束を着て秀吉に会見し、かろうじて許しを得ている。

天下を狙う武門の意地

見かけは秀吉に屈服したが、政宗は決して心から従ったわけではない。秀吉につぶされた奥州大名家の家臣たちが反乱を起こすと、陰から支援したのだ。だが、それがバレてしまい、政宗は危機におちいる。

政宗は言い逃れを図り、白装束に加えて「ワシを処刑するならこれを使え！」と、金箔を張った豪華な十字架を背負って京に現れ、結局またもや許しを得た。その図々しさが逆に秀吉を感心させたのだ。

秀吉没後は、娘の五郎八姫を家康の六男・松平忠輝に嫁がせて、豊臣家から徳川家に乗り換えたが、その後はひそかに忠輝を将軍にしようと画策している。一方では支倉常長をヨーロッパへ派遣し、イスパニア（今のスペイン）の軍事力を利用して徳川幕府を倒そうとしていたらしい。

豊臣・徳川が天下を統一し、表面上は彼らに頭を下げても、政宗は内心「バカめ、次の天下人はオレだ」とせせら笑っていたのかもしれない。政宗の謀略はことごとく失敗したが、これが遅れてこの世に出た政宗の武門の意地だったのだろう。

濃姫
NOUHIME

美濃のマムシから生まれた美しき蝶

愛している……殺したいほど

STAGE

桶狭間の戦い → 稲葉山城攻略戦 → 姉川の戦い → 本能寺の変 → 岐阜城潜入
姉川の戦い → 本能寺の変 → 安土城潜入

登場条件	森蘭丸をクリアする

PROFILE

生没年：1535？～1612？
別 名：帰（奇）蝶
父　：斎藤道三
夫　：織田信長

織田信長の妻。美濃の斎藤道三の娘で、信長とは政略結婚させられた。

マムシの娘は蝶

美濃の大名・斎藤道三の愛娘で、織田信長の夫人。道三は「美濃のマムシ」と恐れられた戦国大名で、謀略の限りをつくして美濃一国を乗っ取ったという、当時の人にとっては悪逆非道の見本のような男だ。

その道三の美濃を狙って、隣りの尾張から織田信長の父・信秀が何度も侵攻したが、ことごとく撃退された。おかげで信秀は尾張の支配もままならなくなり、弱った信秀はいっそ道三と和を結ぼうとする。

戦さで負けているくせに、信秀はウツケ（愚か者）の悪名高い信長と道三の愛娘との政略結婚を申し出たのである。意外なことに、この虫のいい縁組みに道三は応じた。「かの信長が評判通りのウツケなら、そのまま尾張を乗っ取ってしまえばいい」と考えたようでもある。

嫁入り前に、ひそかに父から「信長が評判通りのたわけであったら、この懐刀で刺せ」とささやかれた濃姫は、「信長がたわけ者でなかったら、この刃先が、美濃に向くかもしれませんよ」と返答したという。

この愛娘、奇（帰）蝶が本名であるが、尾張の織田家からすれば、マムシの娘が蝶でもあるまい。美濃から来た姫君なので「濃姫」と呼ばれた。

織田家から消え去った濃姫

さて、尾張では信秀が急死すると、跡継ぎの信長に背く家臣が続出する。ところが不思議にも信長はつぶれなかった。運がいいのか実は大物なのか、婿の正体を見てみようと思った道三は会見を申し入れる。

マムシの舅（妻の父）とウツケの婿は国境の正徳寺で会見した。正装で現れ、振る舞いに乱れもない姿に大器をみた道三は、その後、信長を惜しみなく支援する。また、道三は子の義龍に攻められて戦死したが、信長は律儀にも救援に駆けつけている。

道三の死後、信長は美濃と手を切り、濃姫は子もできなかったので無用となった。以降、濃姫はほとんど歴史の表舞台には出てこない。とはいえ、本能寺の変後も生き長らえ、大坂の陣の前に死去している。

そんな濃姫だが、道三と信長の関係を描くには絶好の脇役なので、講談や小説でしばしば取り上げられた。若き日の明智光秀とは両想いの間柄だったともいわれているが、これまたお話の中のことである。

HATTORI HANZO

服部半蔵

徳川家に忠誠を尽くした忍者[illegible]

STAGE

桶狭間の戦い — 三方ヶ原の戦い — 神君伊賀越え — 上田城潜入 — 大坂夏の陣
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└ 大坂城潜入

登場条件	最初から選択可能

闇（やみ）に滅（めっ）せ……

PROFILE

生没年：1542～1596
本 名：正成
官 職：石見守
父 ：服部保長

伊賀忍者の名門・服部家

「闇に生まれ、闇に消える」というのが忍者の宿命だが、実際どんな忍者がいて、どんな活躍をしたかというのはあまりわかっていない。たとえ忍者が敵武将を暗殺したり、城を落としても、陰の存在である忍者はほめられたり、出世したりすることはないのだ。そんななか、実在した忍者でもっとも有名なのが服部半蔵だ。

服部家は「伊賀三上忍」と呼ばれる名門の一つだ。ところが半蔵の父・保長は、伊賀を出て徳川家康の祖父・松平清康に仕えた。忍者の日陰者の生活がイヤになり、武将として活躍したかったのかもしれない。

半蔵も父とともに松平家に仕え、16歳にして初陣を踏んで敵城へ夜襲をかけ、伊賀忍者を率いて城内に潜入したという。城内のあちこちに火をかけるなどして敵を混乱させ、味方を勝利に導いたのだろう。

武将と忍者の両面を持つ男

半蔵は武将としての表の顔、忍者としての裏の顔を持っていた。表の顔は、槍をふるって姉川の戦いや三方ヶ原の戦いなどで活躍し、「鬼半蔵」と呼ばれた猛将だ。

また、半蔵は徳川家への忠誠心も厚かった。家康の長男・信康が、武田家に内通した疑いをかけられて自害するとき、半蔵は信康を介錯する役目を命じられる。だが、半蔵は信康の首をどうしても斬れず、ただ涙を流すばかりだったという。

徳川家康の家臣。戦場で奮闘する一方、忍者を操って徳川家に貢献した。

普通の忍者は大名から金で雇われており、半蔵のような忠誠心はない。ここが徳川家の武将としての顔を持つ半蔵と普通の忍者との違いだ。

一方、半蔵の裏の顔が活かされたのが「神君伊賀越え」だ。本能寺の変で明智光秀が織田信長を倒すと、その追撃の手は堺にいた家康にもおよんだ。無防備だった家康は、伊賀を通って逃れようとする。

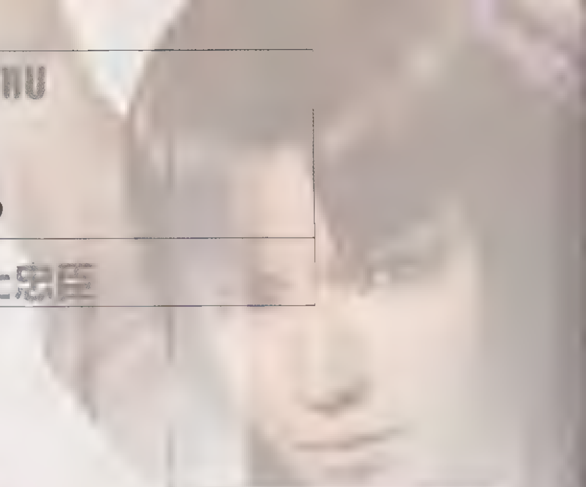
このとき半蔵は伊賀を道案内し、さらに伊賀の者に家康の護衛をさせ、無事に三河まで送り届けた。この功として、家康は護衛をつとめた伊賀忍者200人を召し抱え、半蔵を頭領に命じる。さらに半蔵は8千石を得て、江戸城西門前に屋敷をかまえた。この西門がのちの「半蔵門」である。

忍者が出世をとげて、城門にまで名を残すというのは異例なことだ。とはいえ、半蔵は忍者ではなく、徳川家の武将として認められたかったのかもしれない。

森蘭丸

MORI RANMARU

若くして信長に殉(じゅん)じた忠臣



STAGE

稲葉山城防衛戦 → 伊勢長島殲滅戦 → 本能寺の変 → 姉川の戦い → 岐阜城潜入 / 安土城防衛戦

登場条件 明智光秀をクリアする

PROFILE

生没年：1565～1582
本 名：長定
役 目：織田信長の小姓
父 ：森可成

織田信長の家臣。信長の秘書的な役割を果たし、本能寺で信長とともに散った。

信長の最期を守る

その夜の異変にまっ先に気づいたのは、信長の寝所を護衛していた蘭丸だった。人のざわめきや甲冑の音、そして馬のいななき……。配下の兵に外の様子をうかがわせると、本能寺の周囲を明智光秀の軍勢が囲んでいるという。蘭丸はすべてを悟った。

ほどなくして明智軍の将兵が、境内に突入してきた。蘭丸は信長の寝所に急を知らせに走る。信長もすでに異変に気づき、弓矢をたずさえて応戦の準備をしていた。

幼いころ、父・森可成を戦場で失った蘭丸にとって、父の故郷・美濃の出身である光秀は、父とも兄とも慕ってきた人物である。だが、ここ数年信長は光秀を嫌い、非道な扱いをしていた。信長は蘭丸に命じて、ほかの家臣たちの面前でわざと光秀を打ちすえさせたこともある。また光秀の領地を没収し、蘭丸に与えようともした。

光秀の無念に蘭丸も心を痛めていた。光秀が反意を抱き、信長を討つかもしれないとも感じていた。しかし、蘭丸にとって信長は、才能を認め、父同様に引き立ててくれた大恩ある主君である。蘭丸は光秀の謀叛を許すつもりはなかった。

本能寺は炎上し、信長の命ももはや助からないだろう。蘭丸は信長の最期が明智の将兵に辱められないよう、本堂の前で最後まで奮戦し続けたのだった。

COLUMN

悲運続きの蘭丸の兄弟

蘭丸の6人兄弟はみな優秀だが、ほとんどが蘭丸同様、若くして戦死している。

蘭丸の父、森可成は近江坂本での朝倉軍との戦いで戦死するが、長男・可隆はそれより前に初陣の姉川で戦死している。

可成の跡を継ぎ、「鬼武蔵」と呼ばれた次男・長可は信濃北部の統治を任されるほど有能だった。本能寺の変後は羽柴秀吉に属すが、小牧・長久手の戦いで戦死する。

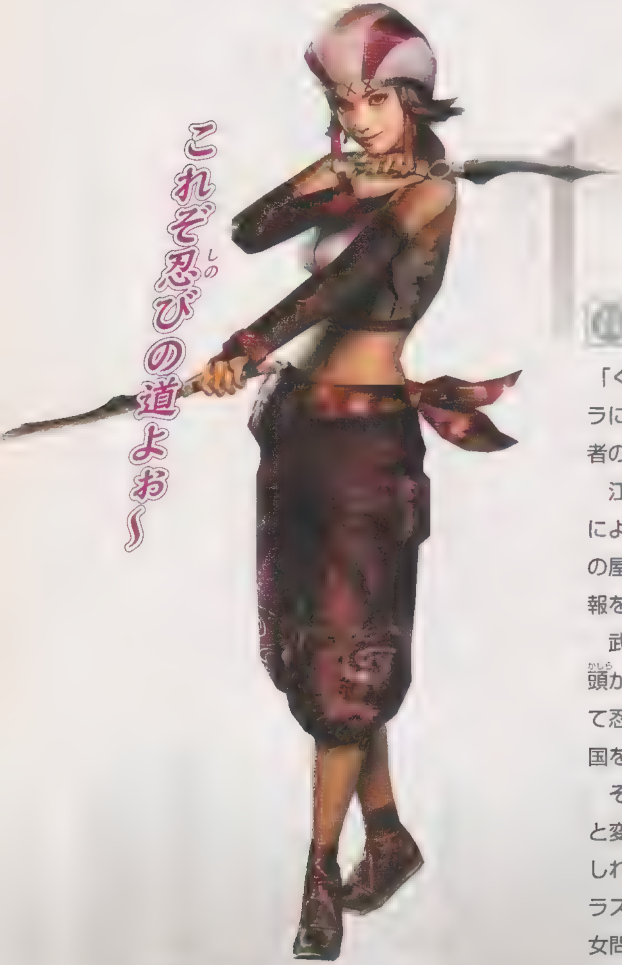
そして三男・蘭丸、四男・坊丸、五男・力丸とともに信長の小姓をつとめ、3名とも本能寺の変で戦死している。

結局は六男・忠政が森家を継ぎ、関ヶ原の戦い以降も家名を残したのである。

KUNOICHI

くのいち

乱世をクールに見つめる女忍者



これぞ忍びの道よお～

仮の姿で情報を集めた女たち

「くのいち」とは、「女」の漢字をバラバラにして「くノ一」と読んだもので、女忍者のことをいう。

江戸時代に書かれた忍術書『万川集海（ばんせんしゅうかい）』によると、くのいちは女中として重要人物の屋敷に入りこみ、相手の動向や秘密の情報をつかんで報告する役目だった。

武田家には望月千代女（もちづきちよじょ）というくのいちの頭（かしら）がいた。彼女は身寄りのない女児を集めて忍者として育て、表面上は巫女（みこ）として諸国を巡らせて、情報を集めたという。

そんなスパイ活動だけでなく、男の忍者と変わらぬ活躍をしたくのいちもいたかもしれない。ただ、服部半蔵のような頭領クラスはともかく、最前線で働く忍者は、男女問わず名前を残していないのだ。

そんなところが逆に後世の作家たちの想像力を刺激し、忍者ものには必ずといっていいほどくのいちが登場して、男まさりの大活躍をするのだろう。

STAGE

川中島の戦い → 三方ヶ原の戦い → 岐阜城潜入 → 上田城救出戦 → 大坂夏の陣

上田城救出戦 → 小田原城潜入

登場条件 武田信玄をクリアする

群像の章
Sub-Characters

あ行

INDEX

あ
赤尾清綱（あかお　きよつな） P.034
明石全登（あかし　てるずみ） P.034
明智茂朝（あけち　しげとも） P.035
明智秀満（あけち　ひでみつ） P.035
浅井長政（あざい　ながまさ） P.035
浅井政澄（あざい　まさすみ） P.036
朝倉景健（あさくら　かげたけ） P.036
朝倉景紀（あさくら　かげのり） P.037
朝倉義景（あさくら　よしかげ） P.037
朝比奈泰朝（あさひな　やすとも） P.038
阿閉貞征（あつじ　さだゆき） P.038
穴山信君（あなやま　のぶきみ） P.038
甘粕景継（あまかす　かげつぐ） P.039
荒木村重（あらき　むらしげ） P.039
安藤守就（あんどう　もりなり） P.039
い
井伊直孝（いい　なおたか） P.040
井伊直政（いい　なおまさ） P.040
井伊直盛（いい　なおもり） P.040
池田恒興（いけだ　つねおき） P.041
石川数正（いしかわ　かずまさ） P.041
石田三成（いしだ　みつなり） P.041
磯野員昌（いその　かずまさ） P.042
井戸良弘（いど　よしひろ） P.042
稲葉一鉄（いなば　いってつ） P.042
今川義元（いまがわ　よしもと） P.043
色部勝長（いろべ　かつなが） P.044
う
上杉景勝（うえすぎ　かげかつ） P.044
上杉景虎（うえすぎ　かげとら） P.045
上杉景信（うえすぎ　かげのぶ） P.045
宇佐美定満（うさみ　さだみつ） P.045
氏家卜全（うじいえ　ぼくぜん） P.046
鵜殿長照（うどの　ながてる） P.046
え
遠藤直経（えんどう　なおつね） P.046
お
大久保忠世（おおくぼ　ただよ） P.047
大野治長（おおの　はるなが） P.047
岡部元信（おかべ　もとのぶ） P.047
岡吉正（おか　よしまさ） P.048
奥平貞昌（おくだいら　さだまさ） P.048
織田信忠（おだ　のぶただ） P.048
鬼小島弥太郎（おにこじま　やたろう） P.049
鬼庭綱元（おににわ　つなもと） P.050
小山田信茂（おやまだ　のぶしげ） P.050

赤尾清綱（あかお　きよつな）

浅井家｜生没年　？～1573年

STAGE
安土城、姉川、本能寺

長政とともに散った忠臣

海北綱親（かいほうつなちか）らとならぶ浅井長政（あざいながまさ）の重臣。

長政の居城・小谷城（おだにじょう）の一部に「赤尾（あかお）曲輪（くるわ）」と呼ばれる出城（でじろ）を築き、ふだんからここにいて長政を守っていた。

信長の小谷城攻撃で本丸が落ちると、清綱は長政を赤尾曲輪に迎えて奮戦する。やがて曲輪も落とされて長政は自害し、清綱も織田軍に捕らえられてしまう。だが、最後まで信長に降伏（こうふく）することを拒否し、自ら処刑されることを選んだ。

明石全登（あかし　てるずみ）

豊臣家｜生没年　不詳

STAGE
大坂城、大坂

キリシタンを率いて戦う

備前（びぜん）の大名・宇喜多秀家（うきたひでいえ）の重臣で熱心なキリシタン。

関ヶ原（せきがはら）の敗戦で浪人となり、大坂の陣では豊臣方に属し、禁教によって浪人したキリシタンの武士を率いて奮戦した。

全登は大坂落城時に戦死したとも、逃亡して数年後に病死したともいわれているが、徳川幕府はその後何年もの間、彼

の行方を捜し続けていた。それだけ徳川幕府は、全登のキリシタンからの人望と軍才を恐れていたのだ。

あけち　しげとも
明智茂朝

明智家 | 生没年 | ？〜1582年

STAGE
安土城、姉川、伊賀、本能寺、山崎

明智の姓を許された側近

明智光秀の重臣。元は斎藤道三の家臣で、別名を溝尾庄兵衛という。

道三の死後浪人し、旧知の明智光秀に仕えた。のちに光秀の側近となり、明智姓を許されている。

山崎の戦いでは光秀の直属として戦うが、明智軍が秀吉に敗れると光秀をかばって落ちのびた。光秀が落ち武者狩りにあって重傷を負うと、自害の介錯（首を斬ること）をつとめ、光秀の首を坂本城へ届けたのちに茂朝自身も自害した。

あけち　ひでみつ
明智秀満

明智家 | 生没年 | ？〜1582年

STAGE
安土城、姉川、岐阜城、伊賀、本能寺、山崎

安土城を焼いた光秀の娘婿

明智光秀の一族で、光秀の長女を妻にして明智姓を名乗った。

光秀が丹波を攻略したときに活躍し、本能寺の変では主力をつとめ、その後は安土城を守って東国の警戒にあたった。

山崎で明智軍が敗れたことを知ると光秀の居城・近江坂本城に退却するが、その際安土城を焼失させている。坂本城で秀吉軍に包囲されると、光秀の遺言に従って光秀愛蔵の宝物を敵将に渡し、光秀の妻子を刺したのちに自害した。

あざい　ながまさ
浅井長政

浅井家 | 生没年 | 1545〜1573年

STAGE
安土城、姉川、本能寺

お市が愛した若き戦国大名

長政はお市との結婚以前に六角家の娘を離縁しており、実はバツイチなのだ。

長政は父・久政の隠居によって若くして浅井家の当主となった。当時浅井家は六角家に従っていたが、長政に期待した家臣たちが久政に隠居を迫り、長政を当主に立てたのだ。

長政は家臣の期待どおり、六角家と縁を切って独立を宣言する。しかし六角家の当主・義賢は、この独立を阻止するため、兵2万5千を率いて出陣した。これに対して長政の軍は半分以下の1万1千である。両軍は琵琶湖畔の野良田で激突したが、浅井軍が奮戦して勝利した。

近江の新星・浅井長政の勝利の報は、尾張の信長の耳にも届いた。野良田で長

政が勝利したのは、信長が桶狭間で今川義元を破ったわずか3カ月後だった。長政の評判を聞いた信長は、妹・お市を長政に嫁がせることに決める。

長政・お市夫妻の仲は非常に良く、信長も有能な義弟を得て満足していた。浅井・織田両家は、それぞれ六角、今川という室町幕府の名門大名を破った新興の大名であり、ともに美濃の斎藤義龍に敵対しているなど、共通項も多い。信長は将来、天下統一を達成したら長政を重要な地位につかせるつもりだった。

しかし信長と長政は決別してしまう。浅井家は祖父・亮政の代から越前の朝倉家からたびたび支援を受けていた。長政が六角家から独立できたのも、朝倉義景と同盟していたことが大きかった。

その朝倉義景は、十五代足利将軍・義昭が信長と決裂したのを機に信長と対立するようになる。長政は義兄・信長をとるか、恩人・義景をとるか悩んだが、結局恩人への義理を選んだ。これは信長の横暴を嫌った父・久政や、重臣たちの意見が反映されたともいわれている。

この結果、浅井家と織田家は戦闘状態になる。そして長政は朝倉家とともに、姉川で織田・徳川連合軍と激突した。この戦いで浅井軍は士気が高く、当初は優勢だったが、盟友の朝倉家が徳川軍に対して劣勢となり、敗退してしまう。

敗戦後、長政は小谷城にこもるが、浅井家が劣勢になったことで、家臣たちはしだいに羽柴秀吉の誘いに応じて寝返るようになった。信長に小谷城を攻められたとき、長政はお市を信長に返すと、落城とともに自害したのである。

浅井・朝倉両家の滅亡後、信長は朝倉義景と浅井長政・久政父子の頭蓋骨に漆を塗り、酒杯にしたという。信長のふるまいは狂気とも思えるが、信長にすれば、期待していた義弟・長政への失望と、その原因となった久政、義景への憎しみがそれだけ強かったのだろう。

あざい　まさずみ
浅井政澄

浅井家 | 生没年 | ?〜1581年

STAGE
安土城、姉川

姉川で織田陣中へ突入する

浅井長政の一族といわれる。

姉川の戦いで第二陣の大将となった。浅井軍が織田軍に対して優勢になると、第一陣の磯野員昌に続いて織田軍の陣中に突入するなどの活躍を見せた。しかし戦線が伸びすぎたところを側面から攻められ、敗れて小谷城に撤退した。

のちに浅井家が滅亡すると信長に降伏して家臣となり、伊勢長島一向一揆との戦いで先陣をつとめている。

あさくら　かげたけ
朝倉景健

朝倉家 | 生没年 | ?〜1575年

STAGE
姉川

朝倉軍の総大将をつとめる

朝倉義景の一族。

主君・朝倉義景に代わって戦いの指揮を任されることが多く、姉川の戦いでも

朝倉軍の総大将をつとめた。姉川では敗北したが、のちの坂本での戦いでは織田軍の森可成を討ちとっている。

また、義景が近江で織田軍に敗れ、危機に陥ったときは、義景をかばって無事退却させた。朝倉家が滅亡したのちは、降伏して織田家の家臣になった。

あさくら　かげのり
朝倉景紀

朝倉家　生没年　？〜1573年

STAGE
姉川

朝倉家の権威向上に貢献

朝倉義景の一族で、朝倉家随一の名将といわれた朝倉宗滴の子。

加賀一向一揆の討伐や、足利将軍家のために三好長慶らと戦うなどして、朝倉家の権威を向上させた。

姉川の戦いでは朝倉軍の先陣をつとめた。開戦直後は景紀の活躍で朝倉軍が優位に立ったが、徳川軍に側面を突かれ、敗退してしまった。

あさくら　よしかげ
朝倉義景

朝倉家　生没年　1533〜1573年

STAGE
姉川

チャンスに弱い文人大名

朝倉家は平安時代末期から続く名門大名である。放浪中の足利義昭も身を寄せており、自ら将軍となって足利幕府を再建するため、義景に再三上洛（京へ上ること）を促している。

しかし義景の腰は重く、なかなか上洛を決断しなかった。しびれを切らした義昭は、明智光秀の仲介で信長のもとへ向かった。こうして信長は、義昭を保護して上洛を果たし、義昭は足利幕府十五代将軍となったのである。

ところが、信長がしだいに義昭を軽んじるようになり、義景は義昭から再び頼られるようになる。信長に先に上洛されて悔しがっていた義景は、義昭に味方して信長との対立を深めていった。

浅井長政が信長を裏切って味方についたこともあり、当初の義景の状況は信長に対して優位を保っていた。だが、義景は文化・教養を好む一方、合戦には消極的な性格だった。姉川の戦いにも義景自身は出陣せず、一族の朝倉景健に総大将を任せていたのだ。

主君がいない朝倉軍は当然士気が上がらない。ついには徳川軍の猛攻によって朝倉軍の戦線がくずれ、優勢だった浅井軍もその影響を受けて混乱し、朝倉・浅井軍は敗北してしまう。

その後も信長との戦いは続いたが、武田信玄や上杉謙信が信長打倒の兵を起こしたとき、義景は出兵を求められても応じようとしなかった。信玄などは義景に怒りの書状を送ったほどである。

こうして信長に対する各大名との協調もとれないまま、朝倉家は信長に追いつめられていった。そして1573年、信長に本拠・一乗谷城へ攻めこまれ、ついに滅亡してしまう。チャンスをものにできない義景の消極的な性格が、おのれの身を滅ぼしてしまったのだ。

あさひな　やすとも
朝比奈泰朝

今川家	生没年	不詳	

STAGE
桶狭間

最後まで今川家に従う

古くから今川家に仕えた家柄で、代々遠江の支配を任されていた。

桶狭間の戦いでは、先発隊となって尾張鷲津砦の攻略を行っている。

今川義元の死後、武田信玄が同盟を破棄して駿河に侵攻し、跡継ぎの氏真が追われると、泰朝は氏真を自らの居城・遠江掛川城にかくまった。さらに家康に遠江を奪われたのちは、氏真とともに逃げて北条家を頼るなど、最後まで今川家に忠節を尽くした。

あつじ　さだゆき
阿閉貞征

明智家	生没年	？～1582年	

STAGE
安土城、姉川、本能寺、山崎

光秀に加担した浅井の旧臣

元は浅井長政の家臣で、姉川の戦いでは浅井軍の第三陣の主将を任された。

浅井家が衰えると羽柴秀吉の誘いに応じて信長に降伏し、織田家臣となる。

のちに秀吉と不仲になり、明智光秀に接近していった。このため本能寺の変では光秀に加担し、山崎の戦いでは先陣をつとめている。明智軍の敗北後、脱出して居城の近江山本山城にこもったが、秀吉に攻められて滅ぼされてしまった。

あなやま　のぶきみ
穴山信君

武田家	生没年	？～1582年	

STAGE
姉川、川中島、伊賀、長篠、三方ヶ原、山崎

家康との別行動が仇となる

別名梅雪。母が武田信玄の姉で、信玄の娘を妻にしており、信玄とは深いつながりがあった。

それだけに信玄の信頼も厚く、武田家が駿河へ侵攻したのちは、駿河支配を任されている。また、三方ヶ原の戦いでは後陣を担当して徳川軍を撃退した。

だが、信玄没後、長篠の戦いで大敗して武田家の勢いが衰えると、信君の運命も大きく変わっていく。

1581年、遠江の重要拠点だった高天神城が徳川軍に占領されたため、信君のいる駿河は武田家の本国・甲斐との連絡が絶たれ、孤立してしまう。信君は最前線で苦戦を強いられ、やむを得ず家康の誘いに応じて降伏を決断する。

意外にも信長は信君の降伏を歓迎し、領地も以前のまま治めることを許された。信君は信長へ礼を述べるため、家康とともに京を訪れたが、このときに本能寺の変が発生してしまう。

当時信君は、家康とともに堺見物に来ていた。家康は、伊賀を越えて一緒に脱出するように信君を誘うが、信君は家康の策に疑問を抱き、家康一行とは別行動をとった。だが、その決断は裏目に出て、信君は宇治近辺で一揆を起こした地元民に襲われ、死亡したのである。

甘粕景継（あまかす かげつぐ）

上杉家 | 生没年 不詳

STAGE
川中島、岐阜城

見放されても忠節は失わず

勇猛な武将で、出羽攻略など多くの戦いで活躍し、上杉景勝の腹心となった。

関ヶ原の戦いのときは陸奥白石城の城代をつとめた。しかし、出陣しているあいだに伊達政宗に城を奪われてしまい、景勝を怒らせてしまう。以後、景継は冷遇されるが、景勝への忠誠は失わなかった。このため、景継の才能を惜しんだ徳川家康からの登用の誘いも断っている。

荒木村重（あらき むらしげ）

織田家 | 生没年 1535～1586年

STAGE
越前、京洛

光秀に反逆の種を植える

村重は軍事だけでなく、茶道などの教養にも優れており、織田信長が才能を高く買っていた家臣の一人だった。

もともと村重は摂津の豪族で、織田信長が京へ上ったときに家臣となった。それから雑賀衆との戦いなどで活躍し、羽柴秀吉の中国地方攻略にも加わった。こうして村重は新参者ながら出世し、秀吉や明智光秀に劣らぬほどの重臣となる。

ところが村重は、信長を裏切って反乱を起こしてしまう。敵の毛利家に寝返ったためともいわれるが、それよりも教養人の村重にとって、信長の強引なやり方が気に入らなかったのだろう。

結局反乱は収まり、村重自身は毛利家へ逃亡し、残された村重の家族や家臣たちは処刑されてしまった。村重が家族たちを見捨てて、なぜ一人で逃げたのかは現在でも謎のままである。

村重が信長を裏切ったことは、多くの織田家臣の心中に暗い影を落としていった。とくに信長の残酷な行為に眉をひそめていた光秀にとって、村重の反乱には少なからず共感するものがあった。村重の反乱は、光秀が信長に背く前ぶれともいえる事件だったのだ。

安藤守就（あんどう もりなり）

織田家 | 生没年 ？～1582年

STAGE
安土城、姉川、稲葉山城

追放された美濃の有力武将

斎藤道三の重臣で、竹中半兵衛の妻の父にあたる。稲葉一鉄・氏家卜全とともに「美濃三人衆」と呼ばれたが、斎藤家の滅亡直前にほかの家臣らとともに織田信長に降伏し、織田家臣となった。

姉川の戦いでは一鉄・卜全とともに織田軍の別働隊をつとめ、混戦になったときに浅井軍を側面から攻撃し、戦いを勝利に導いている。

のちに武田信玄にひそかに通じたとして追放されてしまう。その後、本能寺の変が起こって美濃が混乱すると、かつての自分の城を奪って反乱を起こす。しかし、稲葉一鉄に討たれてしまった。

い

いい　なおたか

井伊直孝

徳川家　生没年 1590〜1659 年

STAGE　大坂、小田原城

戦国の心を知る幕府の重臣

井伊直政の次男。二代将軍・徳川秀忠に仕えていた。井伊家を継いで近江彦根藩主となった兄が病弱だったため、大坂冬の陣では井伊家の総大将を代行する。その活躍が認められ、戦後は兄が隠居して、彦根藩主を継いでいる。

大坂夏の陣では最前線で戦い、木村重成を討つなどの活躍をした。のちは江戸幕府の大老として四代将軍・家綱の代まで仕えた。戦国武将の気風を残した人柄で、幕府の重臣から尊敬されていた。

いい　なおまさ

井伊直政

徳川家　生没年 1561〜1602 年

STAGE　安土城、姉川、長篠、本能寺、三方ヶ原

赤備えを率いた若き四天王

直政は本多忠勝・榊原康政・酒井忠次とならび「徳川四天王」の一人に数えられる。しかし直政の生年は桶狭間の戦いの翌年で、ほかの3名に比べて格段に若い。要するに直政は、若くして四天王と呼ばれるほどの実力者だったのだ。

直政は幼いころに父を亡くし、14歳で家康に仕えた。若いころの直政は美少年で、家康のお気に入りだった。

そんな直政も、成長すると勇猛な武将となる。小牧・長久手の戦いでは、榊原康政とともに羽柴秀吉軍の池田恒興をはさみ撃ちにして、戦死に追いこんだ。また、本能寺の変が起こったときは家康に同行しており、家康の「神君伊賀越え」に従って主君と苦難をともにしている。

これらの功績が認められ、家康が武田家滅亡後にその将兵を配下にしたとき、直政は彼らの部隊指揮を任された。この部隊は、かつて武田信玄の精鋭部隊で、将兵全員が赤色の兜や鎧で統一しており、「赤備え」と呼ばれていた。

直政はこの部隊を率いてその名に恥じない活躍をし、以後「赤備え」といえば井伊直政の部隊と、敵味方から認められるまでになったのである。

いい　なおもり

井伊直盛

今川家　生没年 1506〜1560 年

STAGE　桶狭間

桶狭間で戦死をとげる

遠江の有力豪族で、井伊直政の祖父。

今川家の遠江支配を嫌ってたびたび今川家と戦っていたが、のちに今川義元に降伏し、家臣となった。

桶狭間の戦いでは、朝比奈泰朝の軍に属し、先頭に立って戦っている。今川義元が討たれたときは前線で鷲津砦を攻略しており、主君の死を知って撤退しようとするが、追撃されて戦死した。

いけだ　つねおき
池田恒興

織田家 | 生没年 1536〜1584年

STAGE
安土城、姉川、越前、岐阜城、京洛、山崎

乳兄弟・信長の仇を討つ

母が信長の乳母をつとめており、信長が「ウツケ（愚か者）」と呼ばれていたころから仕えていた。

本能寺の変が起こったときは摂津を守っていたが、中国地方から引き返してきた羽柴秀吉の軍に加わり、山崎の戦いに参戦した。このときは先頭に立って戦い、明智軍の主力だった斎藤利三を討って勝利を決定づけた。これ以降、恒興は秀吉に従うようになる。

小牧・長久手の戦いでは、別働隊となって徳川家康領の三河へ攻めこもうとしたが、その動きを読まれ、徳川軍に前後から攻撃されて戦死してしまった。

いしかわ　かずまさ
石川数正

徳川家 | 生没年 ？〜1592年

STAGE
姉川、伊賀、三方ヶ原

秀吉に引きぬかれた徳川重臣

数正は、徳川家康が今川家から独立した当時の家臣のなかでは、数少ない教養人で、外交を得意としていた。家康が織田信長との同盟を結べたのも、数正の高い外交能力のおかげである。

家康が三河を統一すると、数正は西三河の筆頭家老になり、戦場においても活躍する。姉川の戦い、三方ヶ原の戦い、長篠の戦いなど家康の主要な戦いに参戦し、家康本陣付近など重要な位置を守って奮闘した。まさに数正は徳川家の軍事・外交の要だったのだ。

そんな数正が1585年に突然、徳川家を出て羽柴秀吉の家臣になってしまう。家康と秀吉が対立していたとき、数正は羽柴家との外交を担当したが、それで秀吉に気に入られて誘われたらしい。

当時の徳川家は武力に重点を置き、外交や策略などは軽視されていた。数正にとって羽柴家の優秀な政治組織には、徳川家にない魅力があったのだろう。

秀吉の策略で数正を引き抜かれたことから、家康もようやく策略の重要性に気がついた。こうして家康も策略をしばしば使うようになったのである。

いしだ　みつなり
石田三成

豊臣家 | 生没年 1560〜1600年

STAGE
大坂城、五右衛門

人望なき関ヶ原の指揮官

羽柴秀吉が近江長浜城主だったとき、城外へ出て、ある寺で休憩した。この寺にいた小坊主が、のちの石田三成だ。

のどが渇いていた秀吉に、三成はすぐに渇きが収まるようにと、茶碗にたっぷり入ったぬるい茶を出した。次に量を減らして少し熱めの茶を出し、最後にお茶をじっくり味わえるように、熱くて濃い茶を、わずかな量だけ出した。この細かい気くばりに感心した秀吉は、三成を自

分の小姓（身の回りの世話をする役目）としたのである。

それから三成は、秀吉が天下人になるのと同時に昇進していき、五奉行の一人という高い地位につく。

三成は戦場での実績はほとんどなく、有能な官僚として認められて出世した。そのために、加藤清正や福島正則ら、戦場で手柄をあげて出世した武将からは嫌われていた。

秀吉死後、三成は豊臣家の天下を乗っ取ろうとしていた家康に反発し、上杉・毛利・宇喜多などの有力大名を味方につけて、関ヶ原で徳川軍に決戦を挑む。しかし、三成を嫌っていた豊臣家の武将の多くは家康の東軍に入っていた。

それに加えて、三成は味方の西軍各大名に信頼されておらず、合戦が始まっても戦おうとしない者もいた。そして、そのなかの一人だった小早川秀秋が東軍に寝返り、西軍は敗れてしまうのである。

いその　かずまさ
磯野員昌

浅井家	生没年	不詳

STAGE
安土城、姉川、本能寺

姉川の戦いの最前線で奮闘

浅井長政の重臣。姉川の戦いで、員昌の部隊は先頭に立ち、織田軍の部隊を次々と破って快進撃を続けた。しかし、前進しすぎたために、側面から織田軍の別働隊に攻められ、敗退してしまう。

員昌はこののち居城・近江佐和山城にこもる。だが、兵糧が少なくなったため、城兵の命を助けることを条件に、織田軍の捕虜となった。員昌の戦いぶりは信長に評価され、浅井家の滅亡後、員昌は織田家に仕えることを許されている。

いど　よしひろ
井戸良弘

明智家	生没年	1534〜1612年

STAGE
安土城、本能寺、山崎

山崎の戦いで中立を守る

元は筒井順慶の家臣で、大和の奪回をめざして松永久秀と戦った。

久秀が滅亡したのちは織田信長に仕えて山城槇島城主となる。しかし、山崎の戦いでは明智光秀にも羽柴秀吉にも属さず、戦後になって家が取りつぶされた。

その後、関ヶ原の戦いのときは細川藤孝の下で西軍と戦っている。

いなば　いってつ
稲葉一鉄

織田家	生没年	1515〜1588年

STAGE
安土城、姉川、伊勢長島、稲葉山城、本能寺

乱世を巧みに生き残った老将

安藤守就・氏家卜全とともに「美濃三人衆」と呼ばれた武将。

元は美濃の守護大名・土岐家の家臣だった。濃姫の父・斎藤道三が土岐家を追い出すと斎藤家臣となり、さらに織田信長が美濃攻略を始めると、ほかの三人衆とともに織田家に寝返っている。べつに一鉄が裏切りやすいのではなく、乱世で生き残るためには当然のことだった。

一鉄が主君をかえても地位を保てたのは、戦場での活躍を期待されたからだ。姉川の戦いで、一鉄ら美濃三人衆は織田軍の別働隊となり、浅井軍を側面から攻撃して勝利に貢献した。さらに一鉄は朝倉家の攻略や、伊勢長島の一向一揆攻めでも活躍している。

本能寺の変では、明智光秀の家老・斎藤利三が一鉄の娘の婿だったため、一時は光秀の誘いに応じて、美濃を攻め取ることも考えていた。しかし、結局は羽柴秀吉に味方し、旧友・安藤守就が起こした反乱を防いでいる。この好判断のおかげで一鉄はまたも生き延び、74歳の長寿をまっとうしたのである。

いまがわ よしもと
今川義元

今川家 | 生没年 1519〜1560年

STAGE
桶狭間

信長に討たれた悲運の大名

貴族気取りで化粧をした義元。「まろは義元でおじゃる」とか言っていたかも。

今川家は足利将軍家の血筋をひく名門大名家で、駿河・遠江・三河の三国に勢力を広げていた。だが、義元は苦労もなく名門の跡を継いだわけではない。

義元は四男だったので、幼いころは仏門に入り、禅僧となるための修行をしていた。ところが義元の長兄で、今川家を継いだ今川氏輝と、次兄の彦五郎が相次いで急死してしまう。

そこで義元は還俗（僧をやめて普通の人に戻ること）して家を継ぐことになった。しかし、義元には同じく仏門にいた異母兄・恵探がおり、今川家当主の座をめぐって「花倉の乱」と呼ばれる内乱が発生する。義元はこの内乱を制し、自身の力で当主となったのである。

こうして戦国大名の一人となった義元は、武田信玄・北条氏康と三国による同盟を成立させて、背後を気にせずに領土拡大をめざせるようになった。義元は大軍を率い、西へ向けて進軍を開始する。義元の最終目標は、京に上って天下を取ることだったのだ。

しかし、それを阻止したのが隣国・尾張の織田信長だった。義元にとって、織田家は取るに足りない存在だった。しかも、その当主・信長は、「ウツケ（愚か者）」という評判である。

実際、今川軍の先発隊は、尾張東部の城や砦を次々に占領している。だが、この連戦連勝が義元を油断させてしまったのだろう。義元の本隊が桶狭間に入ったときに夕立がおこり、義元は休息をとっていた。それを知った信長に奇襲をかけられ、義元は戦死してしまう。

これ以降の信長が華々しい活躍をしたため、討たれた義元は無能呼ばわりされることが多い。しかし、義元は決して無

能ではなかった。一瞬の油断が悲運を招き、のちの歴史を塗りかえるほどのできごとになってしまったのである。

色部勝長（いろべ かつなが）

上杉家 | 生没年 ？～1568年

STAGE
小田原城、川中島、岐阜城

川中島の戦いで感状を受ける

北越後の豪族で、上杉謙信の父・長尾為景の代から仕えていた。

川中島の戦いでは、上杉軍の柿崎景家が武田軍の山県昌景に苦戦していたのを救援するなどの活躍をした。このため、戦後に謙信から感状（手柄をたたえる書状）を受けた。

また、下野佐野城が北条氏康に包囲されたときは、謙信とともに北条軍の包囲を突破して佐野城を救援し、戦後は佐野城の守備を任されている。

ウ

上杉景勝（うえすぎ かげかつ）

上杉家 | 生没年 1555～1623年

STAGE
安土城、姉川、大坂、川中島、岐阜城

謙信の威厳と誇りを受け継ぐ

上杉謙信は生涯結婚せず、子供がいなかった。このため、謙信は何人か養子を迎えたが、跡継ぎを決めないまま急死してしまう。こうして景勝と上杉景虎の2人の養子が争い、「御館の乱」という内乱が発生する。景勝は謙信の姉の子にあたり、多くの家臣が味方したため、最後は跡継ぎの座を勝ちとった。

景勝は姿や性格が謙信に似ており、口数が少なく、威厳にあふれていた。近くに仕える者はそんな景勝を恐れて、つねに緊張していたという。

景勝はまた、正義感も謙信から受け継いでいる。本能寺の変後に真田家が徳川家と争ったとき、真田家の当主・昌幸は息子・真田幸村を人質に差し出して同盟を求めてきた。上杉家と真田家はかつて争ったことがあり、良好な関係とはいえなかったが、景勝は追いつめられた昌幸の心情を理解し、同盟に応じている。

豊臣秀吉の死後は石田三成に味方し、天下を狙う徳川家康に対抗した。これも景勝の正義感の強さによるものだ。しかし、関ヶ原の戦いのときは領地の会津から動けず、徳川方についた隣国の最上家や伊達家と争っただけだった。

三成の西軍が敗れると、上杉家も断絶の危機にさらされたが、領地を大幅に減らされながらも存続している。

大坂冬の陣では、上杉家は徳川方として出陣し、景勝が無言のまま軍配を左右させるだけで、将兵は一糸乱れず行動した。家康は「謙信の威風は今も衰えておらぬ」としきりに感心し、二代将軍・秀忠は景勝配下の武将に感状を与えようとしている。

これに対して景勝配下の武将は「これは上杉家ではきわめて当たり前のこと。感状を受けとる理由はない」とはねつけ

たという。この言葉は、徳川幕府に屈した上杉家の悔しさと、謙信以来の家風を残している誇りを、無口な景勝に代わって徳川家にぶつけたものでもあった。

うえすぎ　かげとら
上杉景虎

上杉家 | 生没年 1552〜1579年

STAGE
姉川

景勝との跡目争いに敗れる

北条氏康の七男で、謙信が北条家と和解したとき、人質として越後に来た。謙信は景虎を養子にして、自身の若き日の名である「景虎」を与えた。

のちに上杉家と北条家の同盟が破れても、景虎は謙信のもとから離れず、謙信死後は、その跡継ぎの座をめぐって上杉景勝と争った。景虎は、実家である北条家の力を背景に戦ったが、最後は景勝に追いつめられて自害してしまった。

うえすぎ　かげのぶ
上杉景信

上杉家 | 生没年 ？〜1578年

STAGE
小田原城、川中島

一門筆頭として謙信を補佐

景信は謙信の一族である長尾家の出身で、謙信が関東の名門・上杉家を相続して長尾から上杉に姓を替えると、景信もそれにならって上杉姓に改めた。

謙信の親族の筆頭として活躍し、川中島では武田信玄と戦い、一方で北条家と戦うために上野にも出兵している。

上杉景勝の実父・長尾政景が生きていたときは、彼を敵視していた。このため、謙信死後の跡継ぎ争いでは、景勝に敵対して上杉景虎に味方する。だが、景勝方の武将と戦って戦死してしまった。

うさみ　さだみつ
宇佐美定満

上杉家 | 生没年 ？〜1564年

STAGE
姉川、上田城、小田原城、川中島、岐阜城

謙信の合戦指揮の師

定満はのちに「越後流」と呼ばれた軍学の始祖である。若き日の謙信に出会った定満は、謙信の武将としての器量に感銘を受け、謙信の軍師となって多くの軍略を教授している。また、謙信が策略を嫌ったため、定満は謙信に代わって策略を担当した。

謙信の兄・長尾晴景が当主だったころ、家臣の多くは、病弱な晴景に代わって謙信が跡を継ぐことを望んでいた。しかし、長尾家一門の長尾政景が謙信の相続に反対して反乱を起こした。このとき定満は反乱鎮圧に活躍し、政景を説得して謙信に従わせたのである。

のちに定満は政景を舟遊びに誘ったが、このとき舟が転覆し、定満は政景とともに水死してしまう。この事故は政景が反乱を起こそうとしたため、定満が暗殺したのだというううわさが家中に立った。この真相は謎だが、政景暗殺が定満の狙いだったとしたら、定満は謙信が自ら一門の政景を裁くのはよくないと考え、自らが身代わりとなったのだろう。

氏家卜全

織田家 | 生没年 ？〜1571年

STAGE
安土城、姉川、伊勢長島、稲葉山城

伊勢長島で一向一揆に敗れる

稲葉一鉄、安藤守就とならぶ美濃三人衆の一人。初めは美濃の守護・土岐家に仕え、斎藤家を経て織田信長に仕えた。

信長の伊勢進出に従い、伊勢の北畠家との戦いで活躍した。のちに柴田勝家の配下として伊勢長島の一向一揆討伐に参加したが、敗れて逃亡するとき、最後尾を守って戦死した。

鵜殿長照

今川家 | 生没年 ？〜1562年

STAGE
桶狭間

今川家への忠誠を貫く

三河の豪族で、母は今川義元の妹にあたる。今川家の代官として三河の統治を担当していた。

桶狭間の戦いでは、徳川家康ら三河の武将たちとともに先発隊をつとめ、織田方の丸根砦を攻略していた。

義元の戦死後、家康が独立して三河の豪族の多くが徳川家に属したが、長照は最後まで今川家に忠誠を誓っていた。

のち家康に、居城を攻められて、落城時に自害した。息子・氏長は捕虜となり、駿府で今川家の人質となっていた家康の妻子と交換された。

遠藤直経

浅井家 | 生没年 ？〜1570年

STAGE
本能寺

信長暗殺に執念を燃やす

直経は浅井家中では勇猛な武将として知られている。

織田信長の性格を嫌い、主君・浅井長政とお市との結婚にも反対だった。のちに信長が小谷城を訪問したとき、信長暗殺を長政に提案し、拒否されてもなお、自分の独断で暗殺しようとしていた。

姉川の戦いでは浅井軍の主力として奮戦した。浅井軍が劣勢になって敗走しても、直経は信長を討つことをあきらめられず、一人で織田本陣に潜入する。

そして、戦場で取った首を差し出すふりをして信長に近づくが、直経の顔を知っていた竹中半兵衛の弟に正体を見破られ、討ちとられてしまった。

お

おおくぼ ただよ
大久保忠世

徳川家 | 生没年 ?〜1570年

STAGE
上田城、大坂、小田原城、三方ヶ原

信長からもほめられた猛将

徳川家の多くの合戦で活躍した猛将。三方ヶ原の戦いで徳川軍が敗走したとき、忠世は一矢報いようと引き返し、追撃してきた武田軍に猛反撃する。これが功を奏して武田軍の勢いが弱まったため、家康は一命をとりとめている。

また長篠の戦いでは、徳川軍の鉄砲隊を指揮し、武田勝頼の騎馬隊を撃破した。戦後に信長から「忠世は一度敵に貼りついたら二度と離れない、膏薬（貼り薬）のようだ」と絶賛された。

その一方で、忠世は本多正信をはじめ、かつて三河一向一揆の際に家康から離反した家臣が、徳川家へ戻るのを助けるなど、心優しい一面もあった。

おおの はるなが
大野治長

豊臣家 | 生没年 ?〜1615年

STAGE
大坂

最後まで豊臣家を守った武将

治長の母はかつてお市に仕え、お市の娘・茶々の乳母をつとめていた。やがて茶々は豊臣秀吉の側室になって淀殿と呼ばれるが、そのころ治長も豊臣家の家臣になっている。

秀吉死後、治長は豊臣家を継いだ秀頼の側近になる。治長にとって淀殿は神聖な存在であり、その子・秀頼も生涯仕えるべき主君だった。

関ヶ原の戦いののちに徳川家は江戸幕府を開き、豊臣家は政権を奪われてしまう。治長は豊臣家の権威回復につとめ、やがて大坂の陣が起こると秀頼の代理として豊臣方の総指揮をとる。

ただし治長は、武将としての戦歴がほとんどなかった。そのために真田幸村、後藤又兵衛のような歴戦の武将たちからは、大坂城の守りにこだわる治長の指揮が、歯がゆく感じられたのである。

大坂夏の陣で大坂城が落城寸前になると、治長は秀頼の妻だった家康の孫娘・千姫を解放し、その見返りとして淀殿と秀頼の助命を願った。だが、家康はそれを許さず、治長は淀殿と秀頼母子の最期を見届けたのちに自害している。

おかべ もとのぶ
岡部元信

今川家 | 生没年 ?〜1581年

STAGE
桶狭間

義元の首を駿河に持ち帰る

元信は、義元が尾張へ進軍する前から尾張方面の攻略を担当しており、桶狭間の戦いのときは最前線の鳴海城を守っていた。義元死後も織田軍と戦ったが、義元の首を引きわたすことを条件に信長と和解して、駿河に帰国した。

のちに武田信玄が今川家との同盟を破って駿河を攻めると、初めは抵抗したものの、信玄の勧めを受けて降伏した。以後は武田家臣として駿河統治を助けた。

おか よしまさ
岡吉正

雑賀衆	生没年	不詳

STAGE
安土城、岐阜城、京洛

信長を苦しめた鉄砲の名手

紀伊雑賀の豪族。織田信長と戦っていた石山本願寺からの要請を受け、雑賀孫市とともに出陣した。

鉄砲を得意とし、その腕は孫市を上回るともいわれた。信長は本願寺を攻めたとき、雑賀衆の鉄砲で負傷している。このとき信長を撃ったといわれる人間は何人かいるが、吉正もその一人だ。

その後、豊臣秀吉が紀伊を攻撃したときに吉正は降伏し、その腕を買われて豊臣家の鉄砲隊を指揮した。

おくだいら さだまさ
奥平貞昌

徳川家	生没年	1555〜1615年

STAGE
長篠

長篠城を必死で守りぬく

三河の豪族で長篠城主。奥平家の領地は三河の奥地にあり、信濃との国境に接していた。徳川家康が今川家から独立したとき、奥平家は家康に従ったが、武田信玄が三方ヶ原の戦いに勝つと、信玄に降伏して、武田家に属した。

しかし信玄が死んで、かわって家康の勢いが増すと、若き当主・貞昌は再び徳川家に仕えることを望んだ。貞昌の裏切りに怒った武田勝頼は、騎馬軍団を率いて三河に進出し、長篠城を包囲する。

家康は武田軍に三方ヶ原の借りを返すチャンスと見て、織田信長に援軍を要請した。そして長篠城を守る貞昌には、織田の援軍が到着するまで長篠城を守りぬくように指示を出した。

武田軍に包囲されて長篠城は苦戦を強いられたが、貞昌は家康を信じて城を守りつづけた。この貞昌と奥平家の将兵の奮闘によって、信長の援軍が到着するまで長篠城は持ちこたえた。そして城の南方にある設楽原で、徳川・織田連合軍は武田騎馬隊を撃ち破ったのである。

家康は、落城寸前になっても武田軍に降伏しなかった貞昌をほめたたえた。そして家康は貞昌に長女・亀姫を嫁がせ、これ以降、貞昌は徳川家の一族同様の扱いを受けている。

おだ のぶただ
織田信忠

織田家	生没年	1557〜1582年

STAGE
安土城、姉川、伊勢長島、越前、桶狭間、岐阜城、京洛、長篠、本能寺、山崎

信長とともに散った長男

織田信長の長男。母の生駒氏は信長の側室だったが、正妻の濃姫に子が生まれなかったため、織田家の跡継ぎとして育てられた。

成長してからは父に従って各地を転戦し、長篠の戦いや、長年武田家に支配さ

れていた美濃岩村城の攻略に活躍している。また、武田家の攻略戦では先陣をつとめ、武田家を滅亡に追いこんだ。

その後、信忠は羽柴秀吉の軍を支援するため、山陽方面に向かう。しかしその途中、京の妙覚寺に泊まった晩に本能寺の変が発生する。

明智光秀の反乱を知った信忠は、京都の守備を担当していた村井貞勝とともに信長のいる本能寺へ向かった。しかし、本能寺を囲む光秀の軍勢は多く、信長の救出に失敗する。

逆に信忠も光秀の軍勢に押され、貞勝とともに二条城に入って抵抗を続けた。だが、最後は二条城も落城し、信忠は貞勝とともに自害してしまう。

信忠は信長と違って情に厚く、織田家の後継者として、多くの家臣たちから将来を期待されていた。もし信忠が無事だったら、家中の結束もゆるがず、のちの織田家の衰退や、次男の信雄と三男の信孝の分裂も避けられたかもしれない。

おにこじま　やたろう
鬼小島弥太郎

上杉家 | 生没年 | 1522？～1582？年

STAGE
安土城、姉川、上田城、小田原城、川中島、岐阜城

鬼と恐れられた護衛役

上杉謙信の護衛をつとめた猛将。本当の姓は小島だが、あまりにも強いので、頭に「鬼」の字がつけ加わった。

元は力士だったともいわれ、巨漢のうえに怪力の持ち主だった。合戦ではつねに謙信の側にいて、謙信とともに戦場を駆け、敵陣に攻め入って将兵を次々となぎ倒していった。

弥太郎は身体だけでなく、その心も豪傑にふさわしかった。上杉軍が川中島で武田軍と対陣したとき、弥太郎は謙信の命を受け、武田信玄の本陣へ開戦前の口上（宣戦布告）を伝えに出向いている。

このとき信玄は、わざと獰猛な闘犬を弥太郎にけしかけた。闘犬は弥太郎の腕にかみついたが、弥太郎は顔色一つ変えずに謙信の口上文を読みつづけた。そして口上を終えると、腕を振りおろして闘犬を地面にたたきつけたのである。

この弥太郎の一件は武田家中で評判となった。そこで武田家の名将・山県昌景は、戦場で弥太郎をみつけると、その実力を試そうとして一騎討ちをしかける。だが、両者の力は互角で、勝負がつかなかった。昌景は引きあげるとき、「花も実もある豪傑よ」と弥太郎を絶賛した。上杉家の「鬼」の評判は昌景との勝負でさらに高まったのだ。

おににわ　つなもと
鬼庭綱元

伊達家　生没年 1549〜1640年

STAGE
伊勢長島、小田原城、川中島

伊達政宗の生涯を見守る

綱元は伊達重臣・鬼庭良直の子で、伊達政宗が幼いころから傅役（主君の子の世話役）として仕えた。

政宗の家臣には、武の伊達成実、智の片倉小十郎がいるが、綱元はその両面を兼ねそなえた武将である。ちなみに成実・小十郎・綱元の3名は「伊達の三傑」とも呼ばれている。

綱元は人取橋の戦いで、佐竹・蘆名連合軍との戦いに活躍した。この戦いは伊達家の存亡をかけた戦いで、綱元の父・良直は老齢をおして出陣し、激闘のすえに戦死している。

綱元は外交能力にも優れていた。政宗がたびたび反乱を画策し、豊臣秀吉に罪を問われると、そのたびに綱元が使者となって秀吉に弁解していた。そのため秀吉は綱元を気に入り、豊臣家の家臣になるように何度も勧誘していた。

このことが原因なのか、綱元は一時政宗の怒りを買って伊達家を去っている。しかしこれは、政宗が綱元に、京・大坂の情勢を探らせるためにしくんだともいわれている。実際、綱元は数年で伊達家に戻っているのだ。

綱元は政宗より18歳年上だが、90年以上も生きており、政宗よりも長生きしている。綱元は政宗の生涯を見守り、政宗の長所も短所もすべて承知のうえで仕えていたはずだ。これを考えれば、綱元が伊達家を去ったのは政宗と仲たがいしたのではなく、やはり政宗の策だったように思えるのである。

おやまだ　のぶしげ
小山田信茂

武田家　生没年 1539〜1582年

STAGE
安土城、姉川、小田原城、川中島、長篠、三方ヶ原、山崎

高くついた裏切りの代償

武田家の重臣で、武田二十四将の一人にも数えられている。

信玄が農民兵を採用したとき、信茂はそのなかで投石を得意とする兵を集めた部隊を任された。三方ヶ原の戦いではこの部隊を率いて先陣を切って戦い、徳川軍を撃破している。

信茂は信玄死後も武田勝頼から信頼されたが、武田家が織田信長に追いつめられると、主君・勝頼を裏切ってしまう。勝頼死後、信茂は勝頼の首を持って織田家に降伏するが、信長は信茂の不忠を怒り、処刑されてしまった。

戦国コラム①

腕一本で世を渡った剣豪たち

護衛部隊の剣豪はいずれも剣の達人だが、ほかにも戦国時代には多くの剣術者か活躍していた。代表的な剣豪を紹介しよう。

剣聖と呼ばれた2人の男

「殺るか、殺られるか」の戦国時代では、生き延びるための剣の技術が大いに発達し、数多くの流派が生まれた。

戦国時代の剣術の中でも伝統があるのが鹿島神道流で、その流派を代表する剣豪が塚原卜伝である。

卜伝は鹿島神宮の神官出身で、真剣勝負では無敗を誇り、「剣聖」と呼ばれていた。のちに鹿島神道流を発展させた「新当流」と呼ばれる流派を始めている。卜伝は多くの弟子を持ったが、その一人が同郷・常陸南部の豪族で「一羽流」を開いた諸岡一羽である。

卜伝と双璧といえる剣豪が、「新陰流」の開祖・上泉信綱である。彼も「剣聖」と呼ばれ、剣術の精神性を説いて多くの弟子をひきつけた。ちなみに彼は、上野長野家に仕えた武将でもある。

信綱の弟子の中でも有名なのが柳生宗厳と丸目長恵だ。宗厳は新陰流にさらに磨きをかけて「柳生新陰流」を開き、子の宗矩は徳川家の剣術指南となる。一方、肥後出身の長恵は、免許皆伝を受けて故郷へ戻り、「タイ捨流」を開いて九州一帯に広めた。そのタイ捨流を若いころに学び、攻撃的な剣術で有名な「薩摩示現流」を始めたのが東郷重位だ。

念流から一刀流へ

戦国時代の剣術には、「三大流派」と呼ばれる流派がある。塚原卜伝の「鹿島神道流」、上泉信綱の「新陰流」の母体となる「陰流」、そして「念流」である。

富田勢源はその念流の一派「中条流」の名人だった。富田家は代々、越前の大名・朝倉家のもとで中条流の発展につとめてきた。朝倉家滅亡後は加賀の大名・前田家に身を寄せている。

勢源の弟子だった鐘捲自斎は、中条流の一派である「外他流」の名人で、伊東景久、佐々木小次郎といった高名な剣豪を育てている。

伊東景久は「伊東一刀斎」の名のほうが知られている。景久は師匠の自斎に試合を申しこみ、打ち負かしたのちに「一刀流」を始めるなど、気性の激しい一面があった。

景久の弟子の一人である小野忠明、別名・御子神典膳も、師匠に似て気性の激しい剣豪だった。忠明の一刀流は柳生新陰流同様、一時は徳川将軍家の剣術となったが、忠明の気性が将軍・徳川秀忠に嫌われてクビになってしまう。

しかし一刀流の剣術としての評価は高く、かえって民間で盛んになり、多くの侍たちが学ぶようになったのである。

か行

INDEX

海北綱親（かいほう　つなちか）　P.052
柿崎景家（かきざき　かげいえ）　P.052
糟屋武則（かすや　たけのり）　P.053
片桐且元（かたぎり　かつもと）　P.053
片倉小十郎（かたくら　こじゅうろう）　P.054
葛山氏元（かつらやま　うじもと）　P.054
加藤清正（かとう　きよまさ）　P.055
加藤嘉明（かとう　よしあき）　P.055
金森長近（かなもり　ながちか）　P.055
金子美濃守（かねこ　みののかみ）　P.056
蒲生氏郷（がもう　うじさと）　P.056
唐沢玄蕃（からさわ　げんば）　P.056
河尻秀隆（かわじり　ひでたか）　P.057
北条高広（きたじょう　たかひろ）　P.057
木村重成（きむら　しげなり）　P.057
九鬼嘉隆（くき　よしたか）　P.057
黒田官兵衛（くろだ　かんべえ）　P.058
黒田長政（くろだ　ながまさ）　P.058
高坂昌信（こうさか　まさのぶ）　P.059
後藤信康（ごとう　のぶやす）　P.059
後藤又兵衛（ごとう　またべえ）　P.060
小西行長（こにし　ゆきなが）　P.060

か

海北綱親（かいほう　つなちか）

浅井家　生没年　？～1573年

STAGE
姉川

秀吉が兵法の師と称える

浅井（あざい）家中で、赤尾清綱（あかおきよつな）や雨森弥兵衛（あめもりやひょうえ）とともに「海赤雨の三将」と呼ばれた重臣である。

羽柴秀吉軍を破ったとき、敵の秀吉に「綱親こそ我が兵法の師である」と言わせたほど兵を用いるのがうまかったが、小谷（おだに）落城のときに戦死した。

柿崎景家（かきざき　かげいえ）

上杉家　生没年　？～1575年

STAGE
安土城、姉川、上田城、小田原城、川中島、岐阜城

上杉家中随一（ずいいち）の猛将

景家は上杉謙信と20歳も年が離れていたが、年下の主君に負けないくらい猛烈な戦い方をした。

謙信は景家のことを「これで教養さえあったら越後（えちご）にはかなう相手がいない」と評価したという。武芸ばかりに専念して、文化には興味がなかったようだ。

しかし、景家は決して武勇だけの人ではなかった。大事な交渉の使者をつとめたこともあれば、謙信が京に上ったときも行動をともにしているくらいだから、

多少の教養は身につけていただろう。

ただ、やはり戦場での働きのほうが目立つのは確かだ。

謙信が武田信玄と戦った川中島の戦いは、全部で5回行われているが、もっとも激しかった4回目の戦いでは、景家は騎馬隊の大将として上杉軍の先頭に立って戦っている。

このように戦場では猛将として名を知られ、外交でも活躍した景家だったが、織田信長とひそかに通じていたのではないかと謙信に疑いをかけられて、自害させられてしまう。

一説では、謙信に疑われて切腹したのは息子の晴家(まるいえ)で、景家はそのときすでに世を去っていたという。

かすや　たけのり

糟屋武則

豊臣家 | 生没年 | 不詳

STAGE
五右衛門

賤ヶ岳七本槍(しずがたけななほんやり)の一人

羽柴秀吉に幼いころから仕え、賤ヶ岳の戦いの活躍で、加藤清正(かとうきよまさ)や福島正則(まさのり)らとともに「賤ヶ岳七本槍」と称えられ、出世のきっかけをつかんだ。

のちに1万2千石の大名になり、小牧(こまき)・長久手(ながくて)の戦いや小田原城(おだわらじょう)攻め、朝鮮の役でも活躍している。

関ヶ原(せきがはら)の戦いでは西軍に味方して、徳川方の伏見城(ふしみじょう)の攻撃に加わり、関ヶ原での決戦にも参加した。西軍が負けたために領地を失ったが、2年後に5百石の旗本として徳川幕府に召し抱えられた。

かたぎり　かつもと

片桐且元

豊臣家 | 生没年 | 1566〜1615年

STAGE
大坂城、大坂、五右衛門

疑われて大坂城を去る

近江(おうみ)の生まれで、助作(すけさく)と呼ばれた幼いころから小姓(こしょう)(身の回りの世話をする役目)として羽柴秀吉に仕えた。

柴田勝家(しばたかついえ)と秀吉が戦った賤ヶ岳の戦いで「賤ヶ岳七本槍」の一人として名をあげ、それからは小牧・長久手の戦いをはじめ、おもだった戦いに参加した。

また、検地奉行(けんちぶぎょう)(田畑の面積や収穫量を調べる役目)として諸国をまわるなど内政や外交でも活躍している。

秀吉の死後は秀頼(ひでより)の補佐役となり、関ヶ原の戦いのあと、家康の指名を受けて豊臣家の家老になった。しかし、方広寺(ほうこうじ)鐘銘(しょうめい)事件で豊臣家と徳川家が対立を深めたとき、且元は苦境に立たされる。

秀吉が建てた方広寺は、地震や火災で崩壊(ほうかい)し、放置されていた。且元はこの寺の再建を担当して、寺の鐘に平和を願う「国家安康(こっかあんこう)」の文字を入れた。だが、これが家康の名を上下に切ったように見えるので、家康への呪(のろ)いではないかと徳川家から言いがかりをつけられたのだ。

且元は家康への弁明につとめたが、逆に豊臣家を裏切って徳川家についたと疑われ、大坂城を去ることになる。

この事件がもとで大坂の陣が起こるが、立場を失った且元は徳川方に加わり、戦後は山城(やましろ)や摂津(せっつ)に4万石の領地を得た。

かたくら　こじゅうろう
片倉小十郎

伊達家 | 生没年 1557〜1615年

STAGE
姉川、伊勢長島、桶狭間、小田原城、川中島、長篠、本能寺

政宗を支えた智謀の士

米沢の神主の子で、実名は景綱だが通称の「小十郎」のほうが知られている。小十郎が伊達家重臣の遠藤基信に推薦されて伊達政宗に仕えたのは、まだ政宗が梵天丸と名乗っていた幼児のころだ。それからはつねに政宗のかたわらで働き、生涯を捧げている。

幼くして難病にかかって右目を失明した政宗は、病んで腫れた右目が激しく痛んだ。そこで小次郎は、意を決して右目をえぐり出したと伝えられている。

政宗が18歳で伊達家の当主となってからは、参謀として数々の戦いを勝利に導いた。このことから、小十郎は一般には智謀の士として知られているが、戦場での勲功も決して少なくない。

豊臣秀吉が北条家の小田原城を攻めるときに、政宗にも出陣するよう求めてきた。それは秀吉に従えと言っているのと同じことだった。

小田原へ行って秀吉に従うか、秀吉と対決するかで悩んでいた政宗に、小十郎は「秀吉は蝿のようなもので，何度追い払ってもきりがない」と説得し、抵抗せずに従うよう強く勧めた。実際に政宗が小田原へ行くと、秀吉の力は政宗が思っていたよりも格段に強く、とても伊達家だけでは争えない相手だった。小十郎は政宗に正しい判断をさせたのだ。

伊達家が仙台に本拠を移すと、小十郎は白石城主となる。江戸幕府ができてからは、一つの藩に一つの城しか持てなかったが、白石城は幕府から特別に認められ、片倉家の居城となった。

ちなみに小十郎の子の重綱も、通称は父と同じ小十郎という。重綱は大坂の陣で戦った真田幸村に敬意を表し、その遺児2人をひそかに引き取っている。そのうちの娘は自分の妻に迎え、男子には片倉姓を名乗らせて幕府からかくまい、伊達家の家臣とした。こうして片倉家のおかげで幸村の子孫は続いたのである。

かつらやま　うじもと
葛山氏元

今川家 | 生没年 不詳

STAGE
桶狭間

信玄に家を乗っ取られる

駿河東部の豪族。氏元は今川義元に従ったが、葛山家の領地は相模・甲斐・伊豆と隣りあっていたため、北条家や武田家とも関わりが深い。実際に氏元の妻は北条氏綱の娘であり、一族のなかには武田家に従う者もいたのだ。

武田信玄が駿河に攻めこんだときには戦わずに降参し、穴山信君の配下となって駿河の領地経営に協力している。

その後、武田信玄の六男である信貞を養子として送りこまれ、葛山家は武田家に乗っ取られてしまう。一説に氏元は武田家によって謀殺されたというが、その最期については謎が多い。

かとう　きよまさ
加藤清正

豊臣家　生没年 1562〜1611年

STAGE
大坂城、五右衛門

豊臣家の将来を案じた猛将

尾張中村に生まれた清正は、同郷の羽柴秀吉とは遠縁にあたる。子供に恵まれなかった秀吉は、清正を家臣として迎えたのちも、自分の子のように特別に目をかけていた。

その期待に応えて、清正は賤ヶ岳の戦いで「賤ヶ岳七本槍」の一人として名をあげ、以降も戦場での活躍で秀吉の天下統一に貢献した。朝鮮の役では、出くわした虎を退治したことで知られ、一方では築城の名人でもあり、熊本城をはじめ、多くの城造りに関わった。

秀吉の死後は石田三成と対立し、関ヶ原の戦いでも「この戦いは三成の野心が起こしたもの」として徳川家康の東軍に加わっている。

とはいえ清正は豊臣家を裏切ったわけではなく、関ヶ原の戦後、52万石の大名になっても豊臣家への忠誠心は変わらなかった。家康と豊臣秀頼が二条城で会見したときも、清正は秀頼を守るために最後まで側から離れなかったのだ。

だが清正は、その2カ月後に死んでしまう。死因については家康の謀殺という説もあるが、当時は豊臣家の行くすえを不安に思うあまり、深酒をして気を紛らわせていたというから、それで体を壊したのかもしれない。

かとう　よしあき
加藤嘉明

豊臣家　生没年 1563〜1631年

STAGE
大坂城、五右衛門

秀吉子飼いの武将の一人

豊臣秀吉に子供のころから仕えた「子飼い」の武将の一人。柴田勝家と戦った賤ヶ岳の戦いで奮戦し、「賤ヶ岳七本槍」に名を連ねている。

その後も順調に出世して、淡路志智城主となってからは、水軍の指揮を任されて小田原城攻めや朝鮮の役に出陣し、兵糧の輸送を担当した。

秀吉死後は徳川家康に従い、関ヶ原の戦いでも徳川方に加わった。晩年は会津若松に40万石を得ている。

かなもり　ながちか
金森長近

織田家　生没年 1524〜1608年

STAGE
安土城、越前、桶狭間、京洛

茶人としても有名な勇将

長近は美濃の出身で、尾張に移り住んで信長の父・織田信秀に召し抱えられ、続いて信長にも仕えた。

織田家中では柴田勝家の配下となり、越前大野城を攻めて、戦後には大野城を与えられた。賤ヶ岳の戦い以後は秀吉に従い、飛騨国の統治を任された。関ヶ原の戦いでは徳川方に味方している。

武勇だけでなく、千利休の手ほどきを受けた茶人としても知られていた。

かねこ　みののかみ

金子美濃守

真田家 | 生没年 不詳

STAGE
上田城

乱世ならではの謀臣

上野沼田城主だった沼田顕泰の家臣で、妹は顕泰の側室だった。

顕泰がこの側室をとくに気に入っていたことから、美濃守は、側室が産んだ子に跡を継がせるように顕泰をそそのかした。こうして美濃守は、顕泰に跡継ぎの朝憲を謀殺させたのである。しかし、その後美濃守は顕泰を追放して、北条家に属してしまう。

のちに真田昌幸が沼田城を攻めたときには、美濃守は昌幸側に寝返っている。また、美濃守の妹が産んだ沼田平八郎が沼田家復活の兵を挙げたときは、昌幸の求めに応じて平八郎を謀殺した。謀略と裏切りで生き抜いた美濃守は、いかにも乱世に似つかわしい人物である。

がもう　うじさと

蒲生氏郷

織田家 | 生没年 1556～1595年

STAGE
安土城、越前

信長の期待を受けた若武者

近江の豪族・蒲生賢秀の子。

氏郷は幼いころ、人質として織田信長のもとへ送られたが、彼の才能を評価した信長は、娘の冬姫を氏郷の妻とする。いずれ信長の重臣となることが約束されたようなものである。

しかし、信長は本能寺の変で死去してしまい、氏郷は羽柴秀吉に従って、伊勢松ヶ島12万石の領地を得た。

小田原城攻めののち、秀吉は奥州の押さえとして、氏郷の領地を会津黒川92万石に移した。氏郷は、故郷である近江日野の若松の森にちなみ、城下町を若松と名づけている。

戦場での氏郷は先頭に立って戦うことを好む猛将として知られており、周囲の人たちからも、今後ますます活躍すると見られていた。

しかし、朝鮮の役に出陣するため、九州の名護屋に滞在していたときに病にかかり、40歳の若さで生涯を閉じた。

からさわ　げんば

唐沢玄蕃

真田家 | 生没年 不詳

STAGE
上田城

寝返って城を落とした忍者

真田家に仕えた忍者で、親子二代が同じ名を名乗ったという。

初代の名は杢之助とも伝えられる。もともと上野岩櫃城主・斎藤憲広の家臣だったが、真田幸村の祖父・幸隆に寝返って岩櫃落城のきっかけをつくった。

その後、嶽山の戦いで初代が戦死し、二代目が跡を継いだというが、その実態は明らかでない。

長篠の戦いから生還した武田方の武者のなかに玄蕃の名がある。おそらくこちらは二代目であろう。

かわじり ひでたか
河尻秀隆

織田家 | 生没年 1527？～1582年

STAGE
桶狭間、京洛

信長の手足となって働く

織田信長の父・信秀に召し抱えられ、信長にも仕えた。

信長に反逆した弟・織田信行を殺害したのをはじめ、信長の手足となって活躍し、精鋭部隊の黒母衣衆に加えられた。

のちには信長の跡継ぎである信忠のもとで武田家との戦いに活躍し、甲斐・信濃に領地を得ている。

だが、本能寺の変が起こったとき、武田家の元家臣が秀隆の領地で反乱を起こし、その攻撃を受けて戦死した。

き

きたじょう たかひろ
北条高広

上杉家 | 生没年 不詳

STAGE
川中島、岐阜城

裏切っても許される強運

高広は越後の豪族で、まだ少年だった上杉謙信が当主につくのを支持した。

のちに武田信玄に寝返り、謙信に居城の北条城を攻められて降伏する。だが、なぜかその後も高広は謙信から重んじられ、上野の厩橋城に移って関東の攻略を任されている。

謙信死後の上杉家の跡継ぎ争いでは上杉景虎に味方し、越後の北条城に戻って戦った。結局景虎が戦死し、北条城も落城したが、高広は武田勝頼の仲介で、新当主となった上杉景勝の許しを得た。

きむら しげなり
木村重成

豊臣家 | 生没年 1593？～1615年

STAGE
大坂

武人の美学を貫いた若武者

重成は豊臣秀頼の幼なじみで、成長後は豊臣家の重臣となった。色が白く、きりっとした眉の美男子だったという。

大坂夏の陣では井伊直孝軍を相手に奮戦するが、劣勢になっても退却せず、無理な突撃をかけて戦死した。

このとき重成は、討たれても敵に見苦しい姿を見せないように、体を清めて香をたいてから出陣したという。

く

くき よしたか
九鬼嘉隆

織田家 | 生没年 1542～1600年

STAGE
伊勢長島、京洛

戦国一の水軍大将

志摩の海賊出身の武将。滝川一益の推薦で織田信長に仕え、伊勢長島一向一揆の討伐や、伊勢の北畠家攻略で水軍を率いて活躍した。

石山本願寺との戦いでは、本願寺への海上からの兵糧輸送を阻止するため、毛利家に属する村上水軍と戦う。最初の戦いでは敗れたものの、鉄板で装甲した船で再度戦い、雪辱を果たしている。

のちは豊臣秀吉に従い、その命によって超大型の安宅船を建造し、朝鮮の役では60隻の船団の指揮をとった。

関ヶ原の戦いでは父子で敵味方に分かれ、子の守隆が東軍、嘉隆は西軍に加わった。両者は海上で戦うが、父子だけに士気が上がらず、八百長同然だったという。戦後、守隆は敗れた西軍に属していた父の命を救おうと努力したが、嘉隆はそれを知らずに自害してしまった。

くろだ かんべえ

黒田官兵衛

豊臣家	生没年	1546～1604年

STAGE

大坂城、五右衛門、本能寺、山崎

秀吉に嫌われた名軍師

官兵衛は本名を孝高といい、播磨の小大名である小寺家の家老だった。近い将来、小寺家が織田家と毛利家の板ばさみになると予測した官兵衛は、織田信長に味方して生き残ろうとする。

信長の中国攻略が始まると、官兵衛は織田軍の指揮をとる羽柴秀吉に、自身の居城である姫路城を明け渡した。このことから秀吉は官兵衛に信頼を抱くようになり、やがて竹中半兵衛とともに秀吉の参謀役を任されるようになった。

しかし、その一方で主君・小寺政職が荒木村重とともに信長を裏切ってしまった。官兵衛は村重に離反を思いとどまるよう説得するが、失敗して捕らえられてしまう。一年後、村重の城から救出された官兵衛は、半死半生の状態だった。

本能寺の変での信長の悲報が伝わったとき、嘆き悲しむ秀吉に官兵衛は「天下をとるいい機会です」と言って励ましたという。その言葉どおりに秀吉は天下統一への道を歩むが、本心を見透かされた秀吉は、官兵衛を警戒するようになる。

それからの官兵衛には目立った動きもなく、子の長政に黒田家を継がせて如水と号し、領地の九州・豊前に隠居していた。しかし、関ヶ原の戦いが起こると、官兵衛は一世一代の大勝負に出る。

九州の各大名が関ヶ原に兵を出し、手薄になっているのを見て、自ら兵を率いて九州制覇に乗り出したのだ。官兵衛はまたたく間に占領地を拡大するが、その野望はすぐにくじけた。関ヶ原での決戦が、わずか一日で決着したためである。もし戦いが長期化していたら、官兵衛は九州占領を足がかりに天下を望むこともできたかもしれない。

くろだ ながまさ

黒田長政

豊臣家	生没年	1568～1623年

STAGE

五右衛門

信長に疑われて危機一髪

幼いころ、人質として織田信長のもとにいた長政は、父である官兵衛が荒木村重に捕らわれたとき、官兵衛の裏切りを疑った信長に殺されそうになる。しかし、

官兵衛を信じていた竹中半兵衛にかくまわれて無事だった。

羽柴秀吉の備中高松城攻めで初陣をつとめてからは、父とともに秀吉のもとで賤ヶ岳の戦い、九州遠征に参戦し、黒田家を継いだのちは豊前中津に領地を得て、朝鮮の役でも活躍した。

石田三成とは仲が悪く、関ヶ原の戦いでは東軍に加わって、豊臣系諸将のまとめ役をつとめた。また、西軍武将への寝返り工作を成功させて東軍に勝利をもたらしたために、戦後は52万石の大勢力となる。さらに家康の養女を妻に迎えるなど、外様大名（途中から徳川家臣になった大名）でありながら破格の待遇を受けている。

こうさか　まさのぶ

高坂昌信

◆武田家 | 生没年 1527～1578年

STAGE
安土城、姉川、上田城、小田原城、川中島、長篠、三方ヶ原、山崎

上杉家との最前線を守る

昌信は16歳で武田信玄の側仕えとなり、信玄と勝頼の武田家二代に仕えた。

一人前の武将となってからは、信濃小諸城、次いで海津城を守り、越後の上杉家の動きを見張っていた。

これは、昌信があまりに信玄から大事にされたので家臣の反感を買い、信玄のもとから引き離されたためだという。だが、上杉家は武田家にとって一番の大敵であり、その最前線を守るということは非常に重要な役目だったはずだ。

三方ヶ原の戦いでは、徳川軍を浜松城に追いこんだのち、家臣のなかでただ一人浜松城攻撃に反対し、信玄やほかの家臣を思いとどまらせた。昌信には冷静な判断力があり、慎重な性格で無理な戦いをしないことから「逃げ弾正」とも呼ばれている。

長篠の戦いのときは、海津城を守っていて参戦できなかった。しかし、武田軍の敗北を知った昌信は、8千の兵を率いて主君・勝頼を出迎え、泥にまみれた服を新しいものに着替えさせている。敗戦によって傷ついた将兵の姿を、領民に見せないための昌信の心づかいだった。

ごとう　のぶやす

後藤信康

伊達家 | 生没年 1555～1614年

STAGE
川中島、長篠

独断で攻めて怒りを買う

戦場で黄色い母衣（背中につけて矢を防ぐ大きな袋のような布）をつけていたことから「黄後藤」の異名で呼ばれる。

大崎・葛西一揆が起こったとき、独断で夜襲をかけて宮崎城を占領したが、軍令に背いたため、領地を没収された。その後、許されて家臣に復帰し、関ヶ原の戦いのときには伊達軍の会津攻めに加わっている。

のちに大坂の陣への参戦を願ったが許されず、政宗の居城・青葉城の本丸から愛馬とともに飛び降りて自殺した。

ごとう　またべえ

後藤又兵衛

豊臣家 ｜ 生没年 ｜ 1560〜1615年

STAGE

大坂

死に場所を求めた猛将

播磨の生まれで、父は播磨の豪族・別所長治の家臣だった。やがて別所家が滅びると、又兵衛は各地を渡り歩いたすえに、豊臣家臣・黒田官兵衛に仕えた。

朝鮮の役では晋州城攻めで一番乗りを果たした。明の大軍に包囲されたときも又兵衛の活躍で黒田軍は危機を脱している。のちの関ヶ原の戦いにも参戦し、抜群の軍才を示している。

しかし、徳川の天下になって合戦が起こらなくなると、又兵衛は活躍の場がなくなり、主君の黒田長政と仲たがいして黒田家から去ってしまう。

又兵衛を恨んだ長政は、諸大名に通達して、又兵衛を召し抱えたら戦をしかけると脅しをかけた。そのために又兵衛は仕える大名もなく、京で軍学を教えながら苦しい生活を送っていた。

そんな暮らしぶりでも、又兵衛はあくまでも武人であった。豊臣家が徳川家との決戦に備えて浪人を集めたとき、又兵衛も招かれて大坂城に入り、浪人たちから人望を集めている。

大坂夏の陣では、大坂城から出て徳川軍の迎撃に向かった。だが、霧のなかで味方の軍とはぐれ、たった１部隊で徳川の大軍とぶつかってしまう。

又兵衛は小松山に登って激しく戦ったが、数に優る徳川軍にはかなわず、決死の突撃を行って敵の銃撃を受け、重傷を負って自害してしまった。

こにし　ゆきなが

小西行長

豊臣家 ｜ 生没年 ｜ ？〜1600年

STAGE

大坂城、五右衛門

猛将たちとは犬猿の仲

堺商人の出身で、元は備前の大名・宇喜多直家に仕えていた。直家が豊臣秀吉に従ったとき、行長は秀吉の家臣として取り立てられている。

文禄の役では加藤清正とともに先陣をつとめ、京城を占領するなどめざましい活躍を見せた。その一方では、外交能力を買われて明との講和交渉を担当している。だが、結局は明との交渉が決裂し、慶長の役が始まって再び朝鮮に出兵することになった。

このころ、行長が秀吉に、加藤清正ら朝鮮で戦っている武将の悪口を言っているとうわさになり、清正や福島正則らと仲たがいしてしまう。

石田三成と親密だったため、関ヶ原の戦いでは西軍に属したが、三成や行長を目の仇にしている豊臣家臣たちは、すべて敵の東軍に入ってしまった。

関ヶ原で西軍が敗れると、石田三成とともに捕らわれて京都六条河原で斬首された。ちなみに、このとき行長は切腹を拒否している。行長はキリスト教徒だったため、その教えで自殺を禁じられていたのである。

戦国コラム②

幸村を陰から支えた十勇士

忍者に僧侶に元海賊、鉄砲撃ちに鎖鎌の達人と、個性あふれる真田十勇士。
護衛部隊として登場する4人以外もあわせて紹介しよう

幸村の影武者が原型

「真田十勇士」とは、主君・真田幸村の活躍を助けた10人の家臣のことである。もともと幕末の講談や、明治末から昭和初期に登場した少年向けの活劇小説によって創作された架空の集団だった。しかし、大坂の陣において実際に幸村が使ったという影武者が、十勇士のモデルになっている。

十勇士の中でも幸村の影武者として登場するのが、穴山小助（あなやまこすけ）・海野六郎（うんのろくろう）・望月六郎（もちづきろくろう）・根津甚八（ねづじんぱち）の4名である。

穴山小助は穴山信君（あなやまのぶきみ）の甥（おい）といわれ、信君の死後真田家に仕えた。また海野・望月・根津というのは実際に真田家とゆかりのある家名である。海野六郎は十勇士中最古参で、幸村の幼少時代から仕えて参謀（さんぼう）もつとめていた。

幸村には大坂の陣後、薩摩（さつま）に逃亡したという伝説がある。このとき徳川家に討（う）たれたのは影武者の望月六郎で、この間に海野六郎が幸村の逃亡を助けたといわれているのだ。

個性派ぞろいの10人

十勇士の中でもっとも知名度が高く人気があるのが、甲賀忍者（こうかにんじゃ）・猿飛佐助（さるとびさすけ）と伊賀忍者・霧隠才蔵（きりがくれさいぞう）だ。両名はライバル関係にあり、忍術を競いあっていた。

佐助は完全な後世の創作だが、才蔵は大坂の陣で幸村に仕えた霧隠鹿右衛門（きりがくれしかえもん）という忍者がモデルになっている。才蔵の師匠は百地三太夫（ももちさんだゆう）といい、石川五右衛門とは兄弟弟子だという。

佐助と仲がよく、人気も高いのが僧侶の三好晴海入道（みよしせいかいにゅうどう）である。また、同じく僧侶の三好伊三入道（みよしいさにゅうどう）は、晴海入道の兄でもあるのだ。彼らはそれぞれ晴海入道が三好政康（みよしまさやす）、伊三入道が三好政勝（みよしまさかつ）という実在の武将がモデルとなっている。モデルの武将同士は兄弟ではないが、ともに戦国大名・三好長慶（みよしちょうけい）の一族だ。

十勇士は忍者以外にも異色の経歴を持つ武将が多い。根津甚八は一時海賊稼業（かぎょう）をしていたため、船上での戦いを得意としている。また筧十蔵（かけいじゅうぞう）は、元は阿波（あわ）の大名・蜂須賀（はちすか）家の家臣で、鉄砲の名手だった。由利鎌之助（ゆりかまのすけ）は、元は伊三入道とともに山賊をしており、名前のとおり鎖鎌を得意としていた。

真田十勇士は多彩で魅力あふれる人物たちが人気を呼び、いつの間にか本家の「尼子十勇士（あまご）」を上まわる知名度を得た。とくに猿飛佐助が、架空の人物ながらも服部半蔵とならぶ忍者の代表格として、小説・マンガなどで活躍しているのは言うまでもないだろう。

さ行

INDEX

さ
斎藤龍興（さいとう　たつおき）P.062
斎藤利三（さいとう　としみつ）P.062
斎藤朝信（さいとう　とものぶ）P.063
斎藤義龍（さいとう　よしたつ）P.063
酒井忠次（さかい　ただつぐ）P.063
榊原康政（さかきばら　やすまさ）P.064
坂崎直盛（さかざき　なおもり）P.064
佐久間信盛（さくま　のぶもり）P.065
佐々成政（さっさ　なりまさ）P.065
真田信之（さなだ　のぶゆき）P.066
真田昌幸（さなだ　まさゆき）P.066
し
七里頼周（しちり　よりちか）P.067
柴田勝家（しばた　かついえ）P.067
下間仲孝（しもづま　ちゅうこう）P.068
下間頼竜（しもづま　らいりゅう）P.068
下間頼廉（しもづま　らいれん）P.069
証恵（しょうけい）P.069
上条政繁（じょうじょう　まさしげ）P.069
新庄直頼（しんじょう　なおより）P.069
す
鈴木重朝（すずき　しげとも）P.070
鈴木重則（すずき　しげのり）P.070
薄田兼相（すすきだ　かねすけ）P.070

さ

斎藤龍興（さいとう　たつおき）

斎藤家　生没年 1548～1573年

STAGE
稲葉山城

斎藤家最後の当主

父・義龍（よしたつ）の死後、14歳で斎藤家を継いだ。人望がなく、多くの家臣から離反（りはん）されている。ことに美濃三人衆（みのさんにんしゅう）と呼ばれた氏家卜全（うじいえぼくぜん）、稲葉一鉄（いなばいってつ）、安藤守就（あんどうもりなり）が織田信長に寝返ったのは致命的だった。

このため、信長に居城・稲葉山城（いなばやましょう）を奪われ、美濃から追われた。その後は三好（みよし）家と組んで信長に抵抗し、最後は朝倉（あさくら）家を頼り、その滅亡と運命をともにした。

斎藤利三（さいとう　としみつ）

明智家　生没年 1534～1582年

STAGE
安土城、姉川、岐阜城、伊賀、本能寺、山崎

明智軍の中心的存在

元は斎藤義龍の家臣だった。稲葉一鉄の娘を妻にしており、一鉄が織田信長に寝返ると利三も織田家に仕えた。だが、一鉄から冷遇（れいぐう）されたので、叔父（おじ）にあたる明智光秀に従っている。

その後は丹波（たんば）平定に活躍したことで光秀の家老に取り立てられ、本能寺（ほんのうじ）の変でも重要な役割を果たしたといわれる。

山崎の戦いでは先頭に立って奮闘する

が、敗北して逃亡し、近江の堅田で捕らえられたのちに斬られた。

ちなみに徳川三代将軍・家光の乳母をつとめた春日局は、利三の娘である。

さいとう ともぶ
斎藤朝信

上杉家 | 生没年 ?～1591年

STAGE
川中島

上杉家二代に仕えた猛将

上杉家の軍事・内政両面で重要な役割を果たし、「越後の鍾馗（魔よけの神）」という異名がある。

川中島の戦いには参戦せず、不穏な動きを見せた一向一揆に備えるため、山本寺定長とともに越中に出陣している。武勇のみならず内政にも優れ、占領地の支配で成果をあげていた。

謙信没後、跡目争いが起こると上杉景勝に味方して勝利に導いた。その後は織田軍に対抗するために武田家との和解を進め、一方では越後に侵入した柴田勝家軍を越中魚津城で撃退している。

さいとう よしたつ
斎藤義龍

斎藤家 | 生没年 1527～1561年

STAGE
稲葉山城

早死には父・道三の呪い？

父・道三から家を継いで稲葉山城主となったが、道三が弟の孫四郎と喜平次をかわいがっていたことから、当主の座を奪われるのではと疑心暗鬼になった。このため、病気といつわって2人の弟を誘い出して殺害したうえ、父である道三も攻め滅ぼしてしまった。

義龍が道三を襲った理由は、道三が追放した美濃守護・土岐頼芸が、義龍の本当の父だと信じたためといわれるが、実際はよくわかっていない。

道三の死後、義龍は分裂した家臣団をまとめあげ、美濃攻略をもくろむ織田信長に対しても、一歩も引かぬ覚悟で臨んだ。このとき北近江の浅井家とも戦っているが、その間も信長にスキを見せることはなかった。

しかし、義龍は道三を滅ぼしてから5年後に急死してしまう。35歳の若さだったため、美濃の人々は道三の呪いではないかとうわさしたという。

さかい ただつぐ
酒井忠次

徳川家 | 生没年 1527～1596年

STAGE
安土城、姉川、桶狭間、伊賀、長篠、三方ヶ原

人質時代の家康を補佐する

家康より15歳年上で、幼かった家康が今川家の人質となったとき、駿河に同行して家康を補佐した。そのため家康から厚く信頼されるようになった。

桶狭間の戦いで今川義元が戦死したことで、家康に今川家から独立する絶好の機会が訪れた。このとき家中には隣国の織田信長と和解しようとする動きがあったが、織田家は長年争っていた敵でもあり、意見がまとまらなかった。

このとき忠次は、「今川氏真と信長を

比べて、どちらと結ぶのが得策かよく考えなされ」と家康に決断を迫り、織田家との同盟が成立したという。

西側の安全を確保した家康は三河統一に乗りだし、忠次も東三河の攻略を担当した。その後も姉川の戦い、三方ヶ原の戦いなど、主要な戦いに参戦する。

とくに長篠の戦いでは、鳶ヶ巣山への奇襲を提案し、織田信長から絶賛されている。この奇襲が成功したため、敵の武田勝頼は長篠での決戦に向かわざるを得なくなったのである。

その後、家康の跡継ぎの信康が武田家とひそかに通じているという疑いが起こり、信長が忠次を問いつめたとき、忠次はうまく弁解できなかった。このために信長は家康に圧力をかけ、信康は自害させられている。このことから、忠次と家康との信頼関係は傷ついたという。

だが、本能寺の変では家康とともに大坂から脱出するなど忠次の活躍は続き、本多忠勝、榊原康政、井伊直政とともに徳川四天王と称えられている。

榊原康政（さかきばら やすまさ）

徳川家 | 生没年 1548〜1606年

STAGE
安土城、姉川、上田城、小田原城、伊賀、長篠、本能寺、三方ヶ原

処罰覚悟で家康を非難

康政は三河一向一揆の征伐で初陣を踏み、このとき家康から一字をもらって康政と名乗っている。

その後は今川勢との戦いをはじめ、姉川の戦い、三方ヶ原の戦い、長篠の戦いなど主要な合戦で活躍した。また、小牧・長久手の戦いでは、秀吉の先陣を尾張羽黒で破り、大軍で押し寄せた秀吉軍の機先を制している。

関ヶ原の戦いのときは、のちに二代将軍となる秀忠に同行し、中山道を通って関ヶ原をめざした。だが、その途中で真田昌幸・幸村父子に足止めされ、決戦には間に合わなかった。

このために家康は激怒したが、康政は秀忠率いる主力軍の到着を待たずに決戦におよんだ家康に対して「抜けがけをした」と逆に非難したという。その後、家康の江戸からの出発を伝える使者が秀忠との合流に遅れたため、秀忠の進軍が遅くなったことがわかり、康政と秀忠は処分を免れている。

平和な時代が訪れると康政のような武人には活躍の場が失われていったが、酒井忠次らとともに徳川四天王と呼ばれる功臣としての地位はゆるぎなかった。

坂崎直盛（さかざき なおもり）

豊臣家 | 生没年 1565〜1616年

STAGE
大坂

花嫁を強奪しようとした男

備前の大名・宇喜多直家の甥で、元は宇喜多家に仕えていた。だが、家中で内紛が起こったときに宇喜多家を去り、徳川家康に従った。関ヶ原の戦いでは東軍に加わり、旧主の宇喜多家を敵に回して戦っている。

大坂夏の陣では、家康の孫で豊臣秀頼

に嫁いでいた千姫を大坂城から救い出している。実はこのとき、千姫を救った者は千姫を妻にもらえるという話があった。直盛もそれを期待したが、千姫はほかの武将との再婚が決まってしまう。

武士のメンツを傷つけられた直盛は、嫁入りする千姫を奪い取ろうと考えたが、幕府側に知られて実行できず、不遇を嘆きつつ自害したと伝えられる。

さくま　のぶもり
佐久間信盛

織田家　生没年 1527〜1581年

STAGE
安土城、姉川、稲葉山城、越前、大坂、桶狭間、岐阜城、京洛、三方ヶ原、山崎

失策を重ねて追放される

信盛は織田信長の父・信秀の代から織田家に仕えており、幼かった信長の補佐役をつとめていた。

信長が織田家を継ぐと、重臣として尾張の平定に活躍し、美濃攻めでも秀吉とともに墨俣一夜城を守って、稲葉山城攻略の足場を固めている。

しかし、信長の本陣の前を守った姉川の戦いでは敵軍に押され、三方ヶ原の戦いで徳川家康の援軍として参戦したときも惨敗するなど、失策もあった。

なかでも石山本願寺との戦いでは、本願寺勢の激しい抵抗にあい、長期間対陣したものの、ほとんど成果が得られなかった。結局、信長は朝廷を動かして本願寺と和解している。

信長は、この一件から信盛を無能と断じ、高野山に追放してしまう。信長の幼年期から忠節を尽くしてきた信盛だが、冷徹な信長は能力の評価をなによりも優先させたのだった。

かつての仲間の武将たちも、信長の怒りを恐れて信盛との関わりを避けるようになり、追放された翌年には寂しく生涯を閉じている。

さっさ　なりまさ
佐々成政

織田家　生没年 1536〜1588年

STAGE
安土城、伊勢長島、稲葉山城、越前、桶狭間、岐阜城、山崎

冬の山越えも徒労に終わる

早くから信長に従い、家中に武勇を知られたが、出世は遅かった。

美濃の斎藤家を攻めたとき、前田利家と協力して稲葉又右衛門という強敵を倒した。このとき互いに戦功を譲り合ったため、柴田勝家が代わって首を取り、その様子を信長に報告した。信長は三人の心がけを喜び、それぞれにほうびを与えている。

長篠の戦いで鉄砲隊を指揮して活躍したことから順調な出世が始まり、柴田勝家の配下として前田利家とともに北陸地方で戦い、ついに越中一国を任されるまでになった。

本能寺の変ののちには柴田勝家に従うが、越後の上杉景勝の侵攻を防いでいたため、勝家と羽柴秀吉が戦った賤ヶ岳の戦いには参戦できなかった。

勝家が秀吉に滅ぼされると、やむなく秀吉に従うが、徳川家康が信長の次男・信雄を立てて秀吉打倒の兵を挙げると、成政も秀吉に反逆する。

しかし、小牧・長久手の戦いで家康が秀吉と争っている間に、信雄が秀吉と和解してしまった。

戦う名目がなくなった家康が兵をひけば、成政は孤立する。成政は家康に会って戦いを続けるように直談判しようと考えたが、西は秀吉に寝返った前田利家、東は上杉景勝に押さえられているので、真冬の日本アルプスを越えて行かねばならなかった。

成政は決死の行軍のすえに浜松へたどり着いたが、すでに家康は秀吉と和解しようと決めていたのである。

結局成政は秀吉に降伏したが、のちに肥後へ移ったときに領内の反乱を収められず、切腹させられてしまった。

さなだ　のぶゆき
真田信之

真田家 | 生没年 1566〜1658年

STAGE
上田城

父と敵味方に分かれて争う

真田昌幸の長男で幸村の兄。真田家の跡継ぎであり、若いころから父を助けて働いている。

真田家が徳川家に従っていたとき、関係がこじれて徳川の討伐軍が昌幸の居城・上田城へ攻めかかると、信之は戸石城に入って側面から徳川軍を攻撃し、真田家の勝利に貢献した。

のちに秀吉の仲介により、信之が徳川家康の養女（本多忠勝の娘）を妻にもらうことで、昌幸は家康と和解した。

関ヶ原の戦いが起こる直前、家康は会津の上杉景勝討伐の軍を起こし、信之も昌幸とともにこの軍に加わった。ところがこのとき石田三成の密使が訪れ、真田父子に家康打倒の挙兵計画を告げたのである。昌幸と幸村は西軍につくことを決めて上田城へ戻った。しかし、信之は家康との関係が深かったために東軍に属し、父子で敵味方に分かれてしまう。

信之は中山道を進む徳川秀忠軍に加わり、幸村が守る戸石城を攻めた。だが、幸村が戦わずに城を明け渡したので、かえって秀忠から怪しまれ、信之は先陣からはずされている。

関ヶ原の戦後、信之は昌幸と幸村の助命を嘆願し、流罪に減刑してもらった。その後、幸村とは大坂の陣で再び敵対するが、信之は病気で大坂へ出陣できず、代理として息子の信吉と信政を送り出している。とはいえ、信之は幸村と戦うのを嫌って仮病を使ったのかもしれない。

さなだ　まさゆき
真田昌幸

真田家 | 生没年 1547〜1611年

STAGE
上田城

徳川軍を二度撃退した智将

真田家は昌幸の父・幸隆の代のときに武田信玄に仕えた。このとき三男の昌幸は人質として出され、信玄のもとで生活している。信玄は昌幸の才能を高く評価し、自らの側近とした。

幸隆死後、真田家は長兄の信綱が継いだが、武田軍が大敗した長篠の戦いで信綱と次兄の昌輝が戦死したため、昌幸は

真田家を継ぐことになった。

やがて武田家が滅亡すると、昌幸は真田家の生き残りをかけて、めまぐるしい動きを見せる。

最初は武田家を滅ぼした織田家に降伏して従ったが、本能寺の変後、織田家の支配力が薄まると、旧武田領の甲斐・信濃には、周辺の大名がそろって押し寄せる。このとき昌幸は、わずかなあいだに上杉、北条と乗り換え、最後に徳川家に従っている。

ところが、徳川家と北条家が和解したときに、昌幸の城だった沼田城を北条家に譲ることになった。昌幸は家康の城明け渡しの要求を拒否し、家康に反逆したのである。怒った家康は討伐軍を送ったものの、昌幸は新築した上田城に立てこもり、さまざまな奇策を繰り出して徳川軍を撃退した。

家康に屈しなかった昌幸の名は、天下に鳴りひびいた。そんな昌幸を秀吉は「表裏比興の者（油断ならない者）」と評し、豊臣政権下の大名として認め、家康の配下にした。秀吉は、昌幸をスパイとして徳川家に入りこませたのである。

関ヶ原の戦いでは、昌幸と次男の幸村が西軍につき、長男の信之は東軍に属した。昌幸は上田城を守って再び徳川軍を手玉にとり、関ヶ原への進軍を阻止したが、肝心の関ヶ原の決戦では西軍が敗北してしまう。

昌幸は徳川勢に大損害を与えているだけに、処刑は免れなかったが、信之の必死の嘆願が功を奏し、幸村とともに紀伊九度山へ流された。

その後、昌幸は何度も罪の許しを願ったが、昌幸に二度も煮え湯を飲まされた家康は決して許さなかった。こうして昌幸は、幸村を残して九度山で生涯を終えたのである。

し

しちり　よりちか
七里頼周

本願寺	生没年	不詳

STAGE
京洛

北陸で一向一揆を率いる

本願寺に仕えた寺侍（寺を守るために仕えた武士）で、本願寺宗主・顕如の代官として加賀の一向一揆を指揮した。

また、越前門徒の要請を受けて一揆の大将をつとめるなどしたが、織田信長軍の侵攻を受けて降伏している。

しばた　かついえ
柴田勝家

織田家	生没年	1523?～1583年

STAGE
安土城、姉川、伊勢長島、稲葉山城、越前、桶狭間、岐阜城、京洛、長篠、本能寺、山崎

織田家に忠誠を尽くした猛将

織田信長の父・信秀に仕え、信長の弟である信行を補佐していた。

信秀の死後、信行の求めに応じて信長に反逆したが、戦いに敗れて降伏し、以後は信長に忠誠を誓う。そして信長の出陣にあたっては必ず先陣を切って戦い、退却するときはつねに最後尾を守り、織

田家中随一の猛将として知られた。

近江の長光寺城が六角軍に包囲されたとき、勝家は城にこもって守ったが、やがて城内の水や兵糧が残り少なくなってきた。そこで勝家は、残っていた水瓶をすべて打ちくだき、出撃を命じたのである。これを見て覚悟を決めた配下の兵は必死で戦い、見事六角軍を撃退した。この話から、勝家は「瓶割り柴田」の異名で呼ばれている。

朝倉家滅亡後、勝家はその領地だった越前を与えられ、北ノ庄城を居城とする。そして佐々成政、前田利家らを配下として加賀一向一揆を平定し、能登や越中まで兵を進めて上杉景勝に対抗した。

しかし、本能寺の変が起こったときは上杉家の動きを警戒して越前から動くことができなかった。この間に羽柴秀吉が明智光秀を倒し、勝家は信長の仇討ちという殊勲を奪われてしまったのである。

このため、信長の跡継ぎを決める織田家臣の会議では秀吉に主導権を握られ、信長の三男・信孝を支持する勝家の意見は退けられた。

その後、勝家は信孝と組んで秀吉に敵対し、信孝の勧めで信長の妹・お市を妻にもらい受けている。

こうして勝家と秀吉は賤ヶ岳で対決する。当初は両軍とも動きがなかったが、秀吉軍の本隊が信孝の岐阜城を攻めに向かうと、勝家軍の先陣は残った秀吉の軍勢を攻めようとする。ところが、秀吉は予想外の速さで賤ヶ岳に引き返し、猛攻撃を始めた。驚いた勝家軍は総くずれとなり、敗北してしまう。

その後、勝家は北ノ庄城へ逃れたが、秀吉に寝返った前田利家らに城を包囲されてしまう。「もはやこれまで」と悟った勝家は酒宴を開き、秀吉軍の攻撃が始まって城に火がまわると、お市ともども自害してしまった。

しもづま　ちゅうこう
下間仲孝

卍 本願寺	生没年	不詳

STAGE
京洛

織田軍から本願寺を守る

本願寺の坊官（寺を経営する役職）。

織田信長に石山本願寺を攻められたときは、前線に立って防戦の指揮をとったという。また、本願寺が信長と和解する際には、本願寺を代表して下間頼廉・下間頼竜とともに交渉に当たった。

能楽の教養があり、石山本願寺を退去したのちは、豊臣秀吉や徳川家康に招かれて能を上演したり、能に関する書物も何冊か著している。

しもづま　らいりゅう
下間頼竜

卍 本願寺	生没年	不詳

STAGE
京洛

信長との和解交渉の代表

織田信長と戦った本願寺の坊官。

本願寺宗主・顕如が信長との和解を決めたときは、本願寺を代表して下間頼廉、下間仲孝とともに交渉の席についた。

茶の湯にも通じていたと伝えられる。

しもづま　らいれん
下間頼廉

本願寺 | 生没年 不詳

STAGE
京洛

信長への徹底抗戦を主張

本願寺の坊官で、武闘派として知られる。本山の家令（宗主に代わって物事を処理する役）をつとめ、信長に石山本願寺を攻められたときは、宗主・顕如を助けて戦いを指導した。

その後は秀吉の下で京都本願寺町奉行をつとめている。

しょうけい
証恵

本願寺 | 生没年 1494?〜1574年

STAGE
伊勢長島

伊勢長島一向一揆を率いる

伊勢長島願証寺（がんしょうじ）の住職で、一向宗門徒のほか、周辺の野武士を呼び集めて勢力を拡大した。信長の攻撃に激しく抵抗するが、力つきて木曽川（きそがわ）に身を投げた。

じょうじょう　まさしげ
上条政繁

上杉家 | 生没年 1553〜1643年

STAGE
川中島

人質から上杉家武将に

能登の大名・畠山義続（はたけやまよしつぐ）の次男。

政繁は当初、畠山家からの人質として上杉謙信のもとに送られていた。だが、謙信に気に入られたらしく、謙信の養子となって上杉一門の上条家を継ぎ、さらに上杉景勝の妹を妻にもらっている。

謙信死後の跡目争い（あとめあらそい）では、義兄の景勝に味方し、景勝を当主の座につけた。

本能寺の変で信濃（しなの）の織田領が混乱したとき、政繁はそれに乗じて海津城（かいづじょう）を占領したが、信濃の統治をめぐって景勝と対立し、上杉家から去ってしまう。

その後は豊臣家に仕え、片桐且元（かたぎりかつもと）が徳川方のスパイと疑われて大坂城を追われたとき、政繁も且元とともに退去している。このため大坂の陣では徳川方に加わって戦った。

しんじょう　なおより
新庄直頼

浅井家 | 生没年 1538〜1612年

STAGE
安土城、姉川

家康に許されて大名に復帰

北近江の生まれで、浅井（あざい）家に仕えていた。姉川（あねかわ）の戦いでは浅井勢の第四陣を任されている。

浅井家の滅亡後は織田信長、次いで羽柴秀吉に仕えた。このころは摂津（せっつ）や近江を守り、摂津高槻城主（たかつきじょうしゅ）となっている。

関ヶ原（せきがはら）の戦いでは西軍に加わって伊賀（いが）上野城（うえのじょう）を占領した。だが、関ヶ原の決戦で西軍が敗れたために所領を没収され、その身柄（みがら）は親族にあたる会津（あいづ）の蒲生秀行（がもうひでゆき）に預けられた。

その後、家康から許されて常陸麻生（ひたちあそう）3万石を与えられ、新庄家は麻生藩主として幕末まで続いている。

すずき　しげとも

鈴木重朝

雑賀衆 | 生没年 | 不詳

STAGE
安土城、岐阜城、京洛

徳川家に仕えた孫市の弟

紀伊雑賀の豪族・鈴木佐大夫の子で、雑賀孫市の弟といわれる。

豊臣秀吉に仕え、関ヶ原の戦いでは西軍に属し、徳川方が守る伏見城の攻撃に加わって鳥居元忠を討ちとった。

戦後は浪人となり、伊達家を頼ったのちに家康から3千石で召し出され、水戸藩主・徳川頼房の家老をつとめた。

すずき　しげのり

鈴木重則

真田家 | 生没年 | 1547～1589年

STAGE
上田城

ニセの書状にだまされる

真田家の家臣で、上野名胡桃城を守っていた。

あるとき重則は、主君・真田昌幸から呼び出しを命じる書状を受け取り、昌幸がいる上田城へ向かった。だが、これは北条家の猪俣邦憲が作ったニセものであり、邦憲は重則の留守を狙って名胡桃城を占領してしまった。

重則は途中でだまされたと気づき、矢沢頼綱の援軍を得て引き返したが、すでに城は北条勢が守りを固めていた。城の奪還が不可能とみた重則は、無念の思いを抱きつつ自害する。

この一件を知った真田昌幸は大いに怒り、ただちに豊臣秀吉へ訴えた。秀吉はこれを受けて北条家の居城・小田原城攻めを決めたのである。

すすきだ　かねすけ

薄田兼相

豊臣家 | 生没年 | ？～1615年

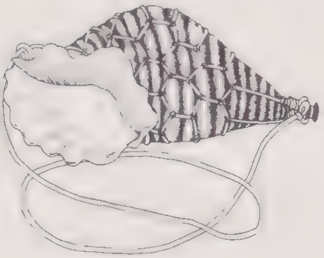
STAGE
大坂

遊びに走って不覚をとる

山城の生まれで、豊臣秀吉の馬廻（馬に乗った主君の周辺を警護する役目）をつとめた。大坂城一の怪力の持ち主であったと伝えられる。

大坂冬の陣の博労淵の戦いでは、女遊びをしているあいだに砦を落とされて、「橙武者」とバカにされた。橙はミカンのような外見で、正月の飾り物に使われるが、食べることはできない。つまり「見かけだおし」という意味だった。

汚名返上をかけた夏の陣では、道明寺の戦いで華々しく戦い、戦死した。



戦国コラム③

尼子家の元祖・十勇士

「十勇士」といえば真田家だが、山陰の大名・尼子家にも「尼子十勇士」がいた。
「十介」とも呼ばれる彼らの活躍を紹介しよう。

10人以上いた十勇士

「尼子十勇士」とは、山陰地方の戦国大名・尼子家に仕えた10人の勇猛な武将たちのことだ。いずれも名前の末尾に「介」がつくので「十介」とも呼ばれる。

十勇士といえば、現在では「真田十勇士」のほうが有名だが、真田十勇士が幕末から明治にかけて講談や小説で登場したのに対し、尼子十勇士は江戸中期の書物ですでに描かれている。実は真田十勇士のほうが尼子の十勇士を参考に考え出されたものなのだ。

尼子十勇士の10人は山中鹿介、秋上庵介、横道兵庫介、早川鮎介、尤道理介、寺本生死介、植田早苗介、深田泥介、藪中荊介、小倉鼠介である。しかし十介は書物や講談によっていろいろな説があり、ほかにも大谷古猪介、高橋渡介、荒波碇介、井筒女介、川岸柳介、破骨障子介といった人物が十勇士に入っていることもある。

尼子十勇士は、実在した尼子家臣がモデルになっているが、話をおもしろくするために、ふざけた名をつけられた者もいる。確実に実在したと思われるのは、鹿介、庵介、兵庫介の3人である。なかでもリーダー格である山中鹿介は、尼子家の名将として名高い。

苦難の尼子家再興運動

尼子家は出雲を本拠とし、山陰の広い地域を支配していた大名だが、中国地方の覇者・毛利元就の台頭によって滅亡してしまう。鹿介は主家滅亡後、機会をうかがって尼子家の生き残りである尼子勝久を探し出して尼子家再興をめざした。このとき鹿介のもとに集まった者こそが尼子の十勇士である。

挙兵の際、鹿介は月に向かって「我に七難八苦を与えたまえ」と念じている。それだけ尼子家の再興が困難であることを覚悟していたのだ。事実毛利家の前に、鹿介の最初の挙兵は失敗する。

そこで鹿介は、毛利家と対立する織田信長に支援を求めた。鹿介たちは信長の助けを得て再度挙兵し、播磨の上月城にこもって戦った。

しかし、当時信長は本願寺との戦いや荒木村重の反乱などの対応に追われ、鹿介の支援まで手がまわらなかった。このため孤立した上月城は落城し、勝久は自害、鹿介も捕らわれて処刑されてしまう。ほかの十勇士も戦死したり捕まったりして全滅してしまった。

しかし十勇士の主家再興にかける奮闘ぶりは後世の人たちの心を打ち、長く語り継がれてきたのである。

た行

INDEX

た 高山重友（たかやま　しげとも） P.072
滝川一益（たきがわ　かずます） P.072
武田勝頼（たけだ　かつより） P.073
武田信廉（たけだ　のぶかど） P.074
武田信繁（たけだ　のぶしげ） P.074
武田義信（たけだ　よしのぶ） P.074
竹中半兵衛（たけなか　はんべえ） P.075
伊達成実（だて　しげざね） P.075
ち 長宗我部盛親（ちょうそかべ　もりちか） [illegible]
つ 津田信春（つだ　のぶはる） P.076
土橋守重（つちはし　もりしげ） P.076
土屋昌次（つちや　まさつぐ） P.077
筒井順慶（つつい　じゅんけい） P.077
と 藤堂高虎（とうどう　たかとら） P.077
土岐頼元（とき　よりもと） P.078
徳川家康（とくがわ　いえやす） P.078
徳川秀忠（とくがわ　ひでただ） P.079
富沢伊予守（とみざわ　いよのかみ） P.079
豊臣秀頼（とよとみ　ひでより） P.080
鳥居元忠（とりい　もとただ） P.080

た

たかやま　しげとも

高山重友

豊臣家 | 生没年 1552〜1625年

STAGE
山崎

追放されたキリシタン大名

摂津の武将で、通称は右近。キリシタンだった父・友照によって12歳で洗礼を受け、洗礼名をジュストと名乗る。

重友は荒木村重に従って織田信長と敵対したが、信長から派遣された宣教師に「無益な殺生はやめなさい」と説得されて降伏し、信長の配下となった。

その後は合戦で活躍する一方で布教活動に力を尽くし、蒲生氏郷や黒田官兵衛らを入信させ、居城があった高槻は日本有数のキリスト教の拠点となる。

しかし、豊臣秀吉の時代になるとキリスト教が弾圧され、信仰を捨てなかった重友は所領を没収されてしまう。そして1614年、徳川家康の禁教令でルソン（今のフィリピン）へ追放されたのである。

たきがわ　かずます

滝川一益

織田家 | 生没年 1525〜1586年

STAGE
安土城、伊勢長島、越前、大坂、岐阜城、京洛、長篠、三方ヶ原、山崎

会議に遅れた鉄砲大将

一益は忍者で有名な甲賀の出身で、前田慶次の実父という説もある。

織田家代々の家臣ではなかったが、鉄砲の名手で武勇に優れた一益は、実力主義の織田家中でめきめき頭角を現した。

伊勢侵攻に加わって伊勢長島一向一揆の平定に活躍し、長篠の戦いにも参戦。その後は武田家を滅ぼし、上野の厩橋城主となって関東攻略を命じられた。このときが一益の絶頂期といえる。

ところが、本能寺の変が一益の運命を大きく変えてしまった。一益は至急中央へ戻ろうとするが、北条氏直の攻撃を受けて帰還が遅れ、信長の後継者を決める重臣会議に出席できなかったのだ。一益の出世コースはこのとき終わった。

その後は柴田勝家に従って羽柴秀吉と敵対するが、敗れて秀吉に降伏。小牧・長久手の戦いでは、尾張蟹江城を占領したものの、敵の徳川家康に奪回され、戦後はそれを恥じて隠居してしまった。

たけだ かつより

武田勝頼

◆武田家 | 生没年 1546〜1582年

STAGE

安土城、姉川、川中島、長篠、三方ヶ原、山崎

父を超えたい焦りが仇に

武田信玄の四男。信玄の側室・諏訪御料人の子で、最初は母の実家である諏訪家を継いでいた。

ところが長兄・義信は信玄との仲が悪くなって自害し、次兄は盲目、三兄は早死にしたため、勝頼に武田家当主の座が舞いこんできた。

しかし、信玄は「勝頼の子・信勝が成人したら武田家を継がせるように」と言い残しており、勝頼はいわば「中継ぎ」の当主だったのである。

「ならば実力を示して家臣たちに当主として認めさせてやる!」とばかりに、勝頼は遠江へ侵攻を開始する。そして1574年、遠江にある徳川方の高天神城を占領した。ここはかつて信玄が落とせなかった堅城であり、この一戦で勝頼はかなりの自信を持ったようである。

その自信と勢いで、勝頼は長篠城の攻略に向かった。これが長篠の戦いの発端になる。

当初は武田軍が優勢だったものの、敵の徳川軍に織田家からの大軍が加わり、兵力差は逆転した。家臣たちはこぞって決戦に反対し、撤退を主張する。だが、勝頼は「武田の騎馬軍団が織田の鉄砲に負けるはずがない」と、家臣の意見を無視して開戦を決意した。この結果、多数の武将が織田・徳川の鉄砲によって戦死してしまい、軍は壊滅状態になる。

これ以降、武田家は没落していき、木曽義昌、穴山信君ら、重臣が次々と織田・徳川家に寝返ってしまう。

チャンスとみた織田・徳川軍は武田領への侵攻を開始する。勝頼は居城の新府城を焼き、再起をめざして重臣の小山田信茂が守る岩殿山城へ向かうが、その進軍中に届いたのが「小山田信茂寝返り」の報告だった。

勝頼一行はやむなく天目山へ向かい、追撃してきた滝川一益軍と最後の合戦を行う。だが、決死の反抗もかなわず勝頼は家族ともども自害し、武田家は滅亡したのである。

たけだ　のぶかど
武田信廉

◆武田家　生没年　？～1582年

STAGE
安土城、姉川、小田原城、川中島、
長篠、三方ヶ原、山崎

戦ぎらいの影武者

武田信玄の三番目の弟。

信廉は顔つきが信玄に似ていたことから、信玄の影武者をつとめたといわれる。だが、実際は信玄と違って武芸ぎらいの教養人だった。とくに絵の才能があり、父・信虎や母の肖像画を残している。

信玄没後は戦場に駆り出されるようになり、美濃と信濃の国境にある大島城を守ったが、織田勢の侵攻にかなわぬとみて戦わずして撤退。勝頼死後、逃亡を続けたが、織田の残党狩りに捕まって処断されてしまった。

たけだ　のぶしげ
武田信繁

◆武田家　生没年　1525～1561年

STAGE
川中島

兄思いの名将、川中島に死す

武田信玄のすぐ下の弟。通称典厩。

信繁は信玄に劣らず優秀な武将だった。父・信虎は生意気な信玄より、従順な信繁を気に入り、跡継ぎにしようとしていたほどである。

信玄が信虎を追放して武田家を継ぐと、信繁も一家臣として兄を補佐する。文武に秀で、人格者でもあった信繁は、ほかの家臣からも人望を集めていた。

ところが、川中島の戦いで上杉軍と武田軍が激突したとき、信繁は信玄に「玉砕してでも目の前の敵を止めてみせるので、援軍は必要ない」と言い残して突撃し、戦死してしまった。信玄はその遺体を抱き寄せて大泣きしたという。

ちなみに、このとき武田信玄の側近だった真田昌幸は、見事な武勇を見せた信繁に感動し、次男を信繁と命名した。これがのちの真田幸村である。

たけだ　よしのぶ
武田義信

◆武田家　生没年　1538～1567年

STAGE
小田原城、川中島

父に嫌われた跡継ぎの悲劇

武田信玄の長男。

義信は若いころから跡継ぎとして育てられ、勇猛な若武者として成長した。

だが、川中島の戦いで叔父・信繁をはじめ多くの武将や兵を失ったことで、「作戦が悪かったのだ」と信玄を批判し、信玄との仲が険悪になった。

それに油を注いだのが、信玄の今川領侵攻である。義信は今川義元の娘を妻に迎えており、いくら義元没後の今川家が弱体化したといっても、妻の実家を攻撃する気になれなかった。

義信が猛反対したことで、父子の決裂は決定的になる。1565年、信玄は義信が家臣らとともに謀叛を起こそうとしたと罪を着せ、義信を幽閉してしまった。そしてその2年後、義信は怒りと絶望のなかで自害したのである。

たけなか はんべえ
竹中半兵衛

織田家 | 生没年 1544〜1579年

STAGE
稲葉山城、岐阜城、本能寺、山崎

稲葉山城を奪取した策謀家

本名は重治で、半兵衛は通称である。黒田官兵衛とならんで「二兵衛」と称された、羽柴秀吉配下の名軍師。

最初は美濃の斎藤家に仕えていたが、若いこともあって重用されず、軟弱そうな顔だちだったため、主君の斎藤龍興や同僚の武将からバカにされていた。

「いつか見返してやる」と思っていた半兵衛は、主君の居城・稲葉山城内に入っていた弟の久作が病気になったのを機に、計画を実行に移す。半兵衛は弟の見舞いと称してわずかな配下とともに城に入り、龍興を追い出して城を乗っ取ってしまったのだ。それで満足した半兵衛は、妻の父・安藤守就の仲介で龍興に城を返し、屋敷に閉じこもった。

これに驚いたのが、当時美濃攻略をめざしていた織田信長だ。半兵衛の才能を欲した信長は、羽柴秀吉に半兵衛を斎藤家から引き抜くように命じたのである。

半兵衛は訪ねてきた秀吉に最初は会おうともしなかったが、あきらめずに何度もやってくる秀吉に誠意を感じ、織田家に仕えて秀吉の下で働くようになる。

その後は軍師として秀吉の攻略を助けたが、生まれつき病弱だったためか、秀吉が中国地方へ侵攻しているさなかに若くして病死してしまった。

だて しげざね
伊達成実

伊達家 | 生没年 1568〜1646年

STAGE
姉川、伊勢長島、桶狭間、小田原城、川中島、長篠、本能寺

伊達軍団を支えた激情の士

伊達政宗の祖父・晴宗の弟・実元の子である。政宗より1歳年下だった。

成実は伊達家随一の猛将として知られ、片倉小十郎とともに伊達家の両輪として活躍した。1585年の人取橋の戦いでは、兵力に優る蘆名・佐竹連合軍を相手に奮戦し、伊達家の危機を救っている。

政宗が豊臣秀吉から小田原参陣を命じられたとき、成実は秀吉に従わず、戦うように主張している。秀吉と戦っても伊達家に勝ち目はないが、戦場での働きが第一と心がける成実としては、戦わずに降伏するのは許せなかったのだ。

このように、成実は政宗に忠誠を誓っていても、言いたいことは言う直情型の性格だった。これが災いしたのか、成実は1593年に勢いあまって伊達家を去ってしまう。自分の戦功に比べて恩賞が少ないという不満が原因だった。

だが、成実は、本心では政宗のもとへ帰りたかったのだろう。上杉家などからスカウトの手が伸びてきても、きっぱり断っている。

その後、片倉小十郎らの助けもあって ようやく伊達家に復帰し、関ヶ原の戦いのときは、奥州での上杉家との戦いに参戦。その後も以前と変わらぬ扱いを受け、伊達家を支えたのである。

ちょうそかべ　もりちか

長宗我部盛親

豊臣家　生没年 1575～1615年

STAGE
大坂

お家再興にかけた大坂出陣

盛親の父・長宗我部元親は土佐の戦国大名である。盛親はその跡を継いだものの、関ヶ原の戦いで敗れた西軍に属していたため、戦後になって領地を奪われてしまった。

盛親は浪人となり、一族を連れて京に移り住み、生活のために寺子屋を開いていたという。一国の大名から寺子屋の先生に落ちぶれるというのは、なみの苦しさではなかっただろう。

そんな盛親にとって、大坂の陣は再起をかけた一戦だった。戦力差からいって豊臣方は圧倒的に不利だったが、万が一盛親が武勲をあげて勝利すれば、大名に復帰できるかもしれないのだ。

冬の陣ではたいした戦功はあげられなかったが、夏の陣では藤堂高虎軍と激突する。ここで盛親は、全軍を土手に伏せさせ、藤堂軍が近づいたところで急襲し、見事に撃退している。

だが、同じ方面に進出していた木村重成が敗れたことから撤退し、藤堂軍の追撃にあって大敗してしまった。

このために翌日の天王寺の決戦には参加できず、大坂落城後は逃亡を図って捕らわれ、処断されてしまう。豊臣家と運命をともにせず、生き延びようとしたのは、なおも長宗我部家の復興をあきらめなかったからだろう。

つだ　のぶはる

津田信春

明智家　生没年 不詳

STAGE
安土城、姉川、伊賀、本能寺、山崎

主君を失い、光秀に従う

織田信長の甥・津田信澄の家臣。本能寺の変ののち、主君・信澄は、妻が明智光秀の娘だったため、信長の三男・信孝に疑いをかけられて殺害されてしまう。

主君を失った信春は、やむを得ず光秀のもとへ向かい、軍に加わって山崎の戦いに参戦。左翼に陣取って奮戦した。

つちはし　もりしげ

土橋守重

雑賀衆　生没年 ？～1582年

STAGE
京洛

本願寺に味方し、信長と戦う

紀伊雑賀の地侍。息子4人を連れて大坂石山の本願寺にこもり、雑賀孫市らとともに織田信長軍と戦った。

1577年、信長に雑賀を攻撃されて降伏するが、なおも信長への抵抗を続けている。しかし、孫市との仲が険悪になり、孫市に討たれてしまった。

つちや まさつぐ
土屋昌次

武田家 | 生没年 1545〜1575年

STAGE
安土城、姉川、川中島、長篠、山崎

長篠に散った若き猛将

武田信玄の家臣のなかでとくに優れた者を24名選んで「武田二十四将」と呼ぶが、昌次はそのひとりである。

17歳で川中島の戦いに参戦し、武田信玄の側近をつとめて働きを認められた。そして22歳で侍大将に出世する。

三方ヶ原の戦いでは、勇猛さで知られた徳川方の鳥居信元と壮絶な一騎討ちを行って破り、大いに名をあげた。

主君・信玄が没するとあとを追って死のうとしたが、思いとどまって長篠の戦いに参戦し、激闘のすえに戦死した。

つつい じゅんけい
筒井順慶

明智家 | 生没年 1549〜1584年

STAGE
安土城、本能寺、山崎

光秀と秀吉の間で迷う

筒井順昭の子。2歳で跡を継いだが、1560年に松永久秀が大和へ侵入し、順慶は城から追い出されてしまう。

その後、明智光秀の仲介で信長配下となり、信長を裏切った久秀の討伐に参加する。そして久秀が滅亡すると、信長から念願の大和支配の承認を得ている。

本能寺の変が起こったとき、順慶は光秀に味方しようとする。だが、羽柴秀吉が光秀を討伐にやってくると聞き、洞ヶ峠に留まってなりゆきを見守っていた。結局順慶は光秀を裏切って秀吉に味方したが、このことから、どっちつかずの行動を「洞ヶ峠をきめこむ」と言うようになったのである。

と

とうどう たかとら
藤堂高虎

徳川家 | 生没年 1556〜1630年

STAGE
大坂、小田原城

戦国一の世渡り上手

初めは出身地である近江の浅井長政に仕え、15歳にして姉川の戦いに参戦している。その後は織田信長の甥・信澄、続いて羽柴秀吉の弟・秀長に仕えた。

秀長没後はその子・秀保に仕えて文禄の役に参戦するが、まもなく秀保が死んだため、秀長父子を弔うために頭を丸めて高野山に入った。

だが、その才能を惜しんだ秀吉に呼び戻され、慶長の役では水軍を率いて活躍した。そして秀吉が没すると徳川家康に接近し、関ヶ原の戦いでは東軍に所属。のちの大坂夏の陣では、豊臣方の長宗我部盛親軍と激闘している。

主君を何回も変えた高虎は、節操がなさそうな感じもする。だが、彼が一国一城の主となるまでに出世するには「自分をもっとも評価する大名に仕える」というやり方がベストだったのだ。

とき　よりもと
土岐頼元

斎藤家　生没年　？～1608年

STAGE
稲葉山城

時代に流された名家の子息

美濃の守護大名・土岐頼芸の四男。頼芸が濃姫の父・斎藤道三に美濃を追われたあとも、頼元は斎藤家に仕えている。

織田信長が斎藤家を滅ぼすと武田信玄に身を寄せ、さらに豊臣秀吉に仕えて河内にわずかな領地を得る。関ヶ原の戦いののちは徳川家康に仕えた。

とくがわ　いえやす
徳川家康

徳川家　生没年　1542～1616年

STAGE
姉川、上田城、大坂、桶狭間、小田原城、五右衛門、伊賀、長篠、本能寺、三方ヶ原

豊臣家滅亡を見届ける

意外なことに家康は薬づくりが趣味で、自分で薬草を調合していたという。

徳川家康というと「狸おやじ」というイメージが強いが、まだ松平元康と名乗って今川家に属していたころは、勇ましい若武者だった。桶狭間の戦いでは今川軍の先発隊として活躍し、織田方の丸根砦を攻略している。

桶狭間の戦いで今川義元が戦死すると、家康は父祖の居城だった岡崎城を奪い、今川家から独立する。そして徳川家康と名乗り、昨日までの敵だった織田信長と同盟を結ぶのである。

対等の同盟とはいえ、実際は信長の家臣同然の扱いであり、姉川の戦いへも援軍を送り、浅井・朝倉軍を側面攻撃して織田軍の勝利に貢献している。

1572年の三方ヶ原の戦いでは、家康を無視して進軍する武田信玄に激怒し、城から出て追撃したところ、待ち伏せされて手痛い敗北を喫した。このとき家康はボロボロになって城へ戻ったが、軽率さを反省し、悔しさを忘れないために、自分のみじめな姿を絵に描かせている。

本能寺の変のときには、家康は堺におり、服部半蔵の手引きで伊賀の山中を通って逃れ、九死に一生を得ている（神君伊賀越え）。帰還した家康は、軍をおこして光秀を討とうとするが、羽柴秀吉に先を越されてしまう。天下取りのチャンスを逃してしまったのである。

その後は織田信長の次男・信雄と組んで秀吉に敵対するが、小牧・長久手の戦いののちに和解し、やむなく秀吉に従うことになった。

1598年に秀吉が没すると、豊臣政権で奉行をつとめた石田三成と対立し、関ヶ原の戦いへつながっていく。このとき家康は、秀吉の恩がありながらも三成を嫌っていた福島正則らを味方につけ、戦いが始まると小早川秀秋を寝返らせて、

わずか1日で勝利を収めた。

こうして家康は天下を取り、征夷大将軍となって江戸幕府を開く。だが、まだ大坂城に豊臣家がいるかぎり、家康は枕を高くして眠れなかった。関ヶ原の戦いから14年間、家康は幕府の体制を固める一方で豊臣家を滅ぼすチャンスをうかがっていたのである。

大坂の陣に老齢をおして家康自ら出陣したのは、人生の総決算として豊臣家の滅亡を見届けたかったのだろう。浪人主体の寄せ集めの軍だった豊臣方は意外と手ごわく、夏の陣では真田幸村の突撃にあってヒヤリとさせられた。だが、ついに家康は豊臣家を滅ぼし、その翌1616年に病没したのである。

徳川秀忠（とくがわ ひでただ）

徳川家	生没年	1579～1632年

STAGE
大坂

忍耐を強いられた二代将軍

徳川家康の三男で、江戸幕府第二代将軍。三男ながら跡継ぎになれたのは、長男の信康が謀叛を疑われて自害し、次男の秀康は家康に嫌われて結城家の養子に出されたためである。

二代目というと、家康が引いたレールの上を楽して歩んでいたように思えるが、二代目なりの苦労も多かった。

まずは関ヶ原の戦いでの失策である。このとき秀忠は、先発した家康のあとから大軍を率いて駆けつけるはずだった。

その進軍を阻んだのが上田城を守っていた真田昌幸・幸村父子だ。秀忠は西軍に属する昌幸らの城の前を素通りするわけにはいかなかった。ところが、秀忠軍は圧倒的な兵力だったにも関わらず上田城を落とせなかった。

これで秀忠の軍は関ヶ原の戦いに間に合わなかった。このため東軍勝利後にようやくやってきた秀忠に家康は会おうとせず、跡継ぎの座も危うかった。

それでも秀忠が二代将軍に就任できたのは、戦場で戦う武将としてより、国を治める政治家としての才能を認められていたからだろう。

とはいえ、家康は将軍を退いても「大御所」と呼ばれ、幕府の実権を握っていた。秀忠は名ばかりの将軍で、家康の許可なしには何もできない状況だった。

大坂の陣を終えた翌年、家康が病没すると、ようやく秀忠の時代が訪れる。秀忠は本多正純など家康の側近だった重臣を次々と失脚させて独自の政治体制をつくり、徳川幕府の基礎を固めた。歴史の教科書などでは三代将軍・家光のほうが有名だが、それも秀忠の業績があってこそだろう。

富沢伊予守（とみざわ いよのかみ）

真田家	生没年	？～1575？年

STAGE
上田城

真田家に寝返って戦う

富沢家は上野の豪族で、岩櫃城主・斎藤憲広に属していた。

父・行連は真田幸村の祖父・幸隆が岩

櫃城を攻めたときに真田方に寝返り、そのまま真田家に仕えている。

伊予守も父とともに真田家とその主君・武田家に従って戦ったが、長篠の戦いで戦死したともいわれる。

豊臣秀頼（とよとみ ひでより）

豊臣家 | 生没年 1593〜1615年

STAGE
大坂

城から出なかった総大将

豊臣秀吉と側室・淀殿とのあいだに生まれた子。秀吉が没したときはまだ幼かったが、豊臣家の世継ぎとして、淀殿の保護のもとで大切に育てられた。

秀頼というとひ弱な二枚目というイメージがあるが、太った巨漢だったという説もある。家康が19歳の秀頼と会見したときは立派な若者だったが、将来を恐れた家康が本多正信を使って手を回し、秀頼を酒色におぼれさせて骨抜きにしたともいわれている。

あまりに太りすぎて馬にも乗れず、のちの大坂の陣で出陣したくともできなかったという話もあるが、これは少々言いすぎだろう。

大坂の陣のとき、秀頼は豊臣方の総大将だったが、最後まで大坂城外へ出なかった。夏の陣では、真田幸村が息子の大助を城内に派遣して、味方の士気を高めるために秀頼の出馬を要請している。だが、秀頼はそれにも応じず、燃え上がる大坂城と運命をともにしたのである。

秀頼は秀吉の跡継ぎとはいえ、実権は淀殿が握っていた。秀頼が出陣を望んだとしても、秀頼を危険な目にあわせたくないという、淀殿の親心がそれを許さなかったのかもしれない。

鳥居元忠（とりい もとただ）

徳川家 | 生没年 1539〜1600年

STAGE
安土城、姉川、上田城、桶狭間、三方ヶ原

伏見に散った三河武士

元忠のように、三河出身で徳川（松平）家に父祖の代から仕えていた武将を「三河武士」という。主君に堅く忠誠を誓って勇敢に戦う一方、主君が間違った行いをすれば、怒りを買うのも恐れずしかりつける。そんな屈強な武士の集団が徳川家を支えていたのだ。

関ヶ原の戦いが始まる前、家康は越後の上杉景勝討伐へ向かったが、そのとき元忠は京の伏見城を守っていた。これは敵対する石田三成に軍事行動を起こさせるための家康のワナだった。

家康の予想通り、三成に味方する武将たちは大挙して伏見城に攻め寄せた。これで「三成が反乱を起こした」という大義名分を得た家康は、急いで軍を引き返し、関ヶ原へ向かった。

要するに、元忠は家康が関ヶ原の戦いを起こすための犠牲になったわけである。しかし、三河武士・元忠はそんな非情な役目であっても主君・家康のためと覚悟を決めて、降伏もせずに最後まで堂々と戦いぬいたのである。

戦国コラム④

信長の野心を映す二つの城

織田信長は、領地が広がるにつれて居城を移したが、その中でも重要なのが美濃の稲葉山城（岐阜城）と近江の安土城だ。これら二つの城のなりたちを解説しよう

権力の象徴・安土城

もっとも人気が高い戦国大名のひとりは織田信長である。その理由として挙げられるのが、桶狭間の戦いで見せた決断力と判断力、長篠の戦いでの大量の鉄砲隊を用いた先見力、民の経済や富を栄えさせた楽市楽座。そして最大の魅力は、信長の日本人離れした国際性にある。その権力の象徴として築城されたのが、安土城である。

1576年より、重臣丹羽長秀を普請奉行として建設工事に入り、3年の月日をかけて完成した安土城は、5層7階建ての壮麗なものであった。中国に深い憧れを抱いていた信長は、建築や装飾におけるすべてに唐文化を取り入れ、外壁には天下布武を主張する金箔の龍が描かれている。

安土城の外観は、従来の城とは違い、塔と表現した方が近い。

そして、城のもっとも高い場所を「天守閣」と呼ぶところを、信長は「天主閣」と命名した。これは、中国の天帝を「天主」と呼ぶことにちなんだものとされている。一般の城主は、居館を別の場所に持つが、信長はこの天主閣で寝起きしていた。安土山頂に築いた天に一番近い場所で、彼は本当の神になろうとしていたのだろうか。

だが、信長が本能寺の変で死去した10日後、安土城は何者かによって炎上した。その犯人は今だに謎のままだが、信長の運命とともに安土城は、わずか3年でこの世から消えたのだ。

天下への足がかり・稲葉山城

稲葉山城は、濃姫の父で美濃のマムシと怖れられた斎藤道三の国盗りの象徴ともいえる難攻不落の名城だった。信長の父信秀は何度も攻めたが、そのたびに手痛い敗北を喫している。両者の対立は、信長と濃姫の縁組みにより解消した。1556（弘治2）年、その道三は息子義龍に裏切られ、敗死する。その際に、器量を見込んだ婿の信長へ遺言状をしたため、美濃を譲ると記した。美濃攻めへの名分を与えたのである。

1567（永禄10）年、足かけ10年以上かけて、ようやく謀略によって稲葉山城は落ちた。美濃を手中にした信長は居城を稲葉山城に移し、岐阜城と改めた。標高338メートルの急峻な金華山頂にそびえ、山麓から見上げると米粒くらいだ。天守閣からは町が一望でき、天気の良い日には富士山も見える。美濃を取った信長が、天下統一をこの風景を眺めながら考えたのも、何だかうなずける。

な行

INDEX

な 内藤昌豊（ないとう　まさとよ）…… P.082
直江景綱（なおえ　かげつな）…… P.083
直江兼続（なおえ　かねつぐ）…… P.083
長井道利（ながい　みちとし）…… P.084
中川清秀（なかがわ　きよひで）…… P.084
中川重政（なかがわ　しげまさ）…… P.084
中村一氏（なかむら　かずうじ）…… P.084
に 仁科盛信（にしな　もりのぶ）…… P.085
丹羽長秀（にわ　ながひで）…… P.085

な

内藤昌豊（ないとう　まさとよ）

◆武田家　生没年　1522？～1571年

STAGE
安土城、姉川、上田城、小田原城、川中島、長篠、三方ヶ原、山崎

長篠に死に場所を得た名将

武田信玄は人を見る目が確かで、数多くの無名の者から、有能な者を取り立てた。そのなかでも昌豊は、馬場信房、山県昌景、高坂昌信とあわせて「武田四名臣」と呼ばれるほどの武将だった。

川中島の戦いで、武田軍団の副将格だった信玄の弟の信繁が戦死すると、その後釜として副将格となり、西上野の攻略を担当した。それも、昌豊が信玄に見こまれた証拠といえる。

昌豊の戦略眼はまさに大局的だ。「功をあせって首取りに執心する者ばかりでは勝てない。大将の采配に従って動くことが合戦の要諦である」と言い切って、三方ヶ原の戦いでも統制のとれた指揮ぶりをみせた。

信玄が死んだのち、織田信長との決戦となった長篠の戦いでは、左翼の部隊を任されて兵3千を率いる。織田軍の布陣をみて不利を感じた昌豊は、馬場信房、山県昌景らとともに撤退を主張するが、大将・武田勝頼は聞き入れない。

「ここが死に場所だ」と肚をくくった昌豊は、織田軍の鉄砲攻撃のなか、騎馬軍団を率いて突撃し、壮烈な死をとげた。

直江景綱

（なおえ　かげつな）

上杉家　生没年　？〜1577年

STAGE
上田城、川中島、岐阜城

上杉家を支えた謙信の片腕

謙信の父の代から長尾（上杉）家に仕えていた景綱は、謙信の兄に代わって謙信を当主に担ぎ上げるクーデターを成功させる。

それ以来、景綱は謙信の側近として領国経営に手腕を発揮した。

また、軍事面では川中島の戦いで信玄の長男・義信の軍勢を破り、ベテランらしく渋い戦いぶりをみせている。

景綱には二人の美しい娘がおり、謙信の身の回りの世話をしていたが、謙信に貴族の娘との縁談がもちあがったころ、尼僧になって謙信の居城・春日山城を去ったという。結局、縁談は取りやめになり、謙信は生涯独身を貫いた。

70余歳で死去した老将・景綱の心残りは娘を謙信の嫁にできなかったことだけだったかもしれない。

直江兼続

（なおえ　かねつぐ）

上杉家　生没年　1560〜1619年

STAGE
安土城、姉川、小田原城、川中島、岐阜城

仁義と智謀の名将

幼いころから上杉景勝の側に仕え、智謀に優れた名参謀である。

兼続の兜の前立（兜の正面に立てる飾り）はじつにユニークで、「愛」の字がさん然と輝いている。これは兼続が尊敬する亡き謙信がモットーにしていた「仁義の精神」に関係がある。仁とは「領民への愛」であり、義とは「仁を実行すること」に通じていた。兼続は「民を愛する心」を兜のシンボルに表したのだ。

ただし、戦場で敵を愛するわけにはいかない。領地が会津に移った景勝を補佐する兼続は、秀吉の死後、石田三成と連携して家康に挑戦状をたたきつける。

ところが、小山まで進軍してきた家康は三成の挙兵を知って引き返し、関ヶ原へ向かっていった。

敵が目の前から去ると、兼続は領土拡張を狙って出羽山形の最上義光を攻撃し、約4万の大軍を率いて最上軍の支城・長谷堂城を取り囲む。

しかし、まもなく関ヶ原の戦いで三成が敗れたという知らせが入り、兼続は「天は我を見放したか」と嘆いた。

前田慶次が軍の最後尾をつとめて決死の退却戦を切り抜け、兼続は「愛」の字の前立を光らせながら、領国・米沢に戻っていった。

ながい　みちとし
長井道利

斎藤家 | 生没年 | ？～1571年

STAGE
稲葉山城

「美濃のマムシ」の弟

美濃金山城主で「美濃のマムシ」こと斎藤道三の弟。家の相続をめぐって道三と長男・義龍が対立したとき、義龍と共謀して道三と絶縁した。

長良川の戦いで道三を破り、義龍が急死すると、跡を継いだ龍興に仕える。信長の美濃攻めでは稲葉山城の龍興を守ろうと抵抗したが敗れ、その後は龍興に従って流浪生活を送った。

なかがわ　きよひで
中川清秀

豊臣家 | 生没年 | 1542～1583年

STAGE
山崎

山崎の戦いで先陣を切る

摂津茨木城主で、ほかの摂津の武将とともに、山崎の戦いで羽柴秀吉軍に参加する。

清秀の行動は素早かった。まず、勝敗のポイントとなる天王山を占拠すると、今度は最前線へ向かう。

明智軍からの銃撃がきっかけで戦いが始まると、清秀の軍勢は敵を正面から突破して秀吉軍を優位に導き、先陣の役目を大いに果たした。

ただし、秀吉からあまり信頼されず、翌年の賤ヶ岳の戦いでも柴田勝家軍を誘い出すおとりに使われ、佐久間盛政の急襲を受けて全滅してしまった。

なかがわ　しげまさ
中川重政

織田家 | 生没年 | 不詳

STAGE
岐阜城、京洛、山崎

追放された織田家の一門

織田家の一族といわれ、信長直属の家臣だった。弟とともに信長が留守中の安土城を任され、守備を指揮する。

ところが、柴田勝家と領地のことで争いが起こり、弟が勝家の家臣を斬殺したため、兄弟そろって追放されてしまう。

頭を剃って「土玄」と名乗り、徳川家康のもとに身を寄せた重政は、三方ヶ原の戦いに出陣したというが、詳しいことは伝わっていない。

なかむら　かずうじ
中村一氏

豊臣家 | 生没年 | ？～1600年

STAGE
山崎

関ヶ原の戦いを前に病没

甲賀忍者53家の一つ・多喜家の出身といわれ、秀吉の配下に加って1573年ごろに近江長浜城下の砦を与えられた。

秀吉の小田原城攻めで活躍し、駿河を与えられた一氏の任務は、関東に領地を移した家康を監視することだった。

一氏は関ヶ原の戦いを前に家康と会見し、東軍への参加を決める。しかし、その直後に病気であっけなく世を去った。

に

にしな　もりのぶ
仁科盛信

◆武田家 | 生没年 ？～1582年

STAGE
安土城、姉川、上田城、川中島、長篠、山崎

高遠城に散った信玄の五男

武田信玄の五男で通称は五郎。軍令違反で処罰された仁科盛政の家名を継ぐ。信玄の死後は武田勝頼を補佐し、南信濃侵攻を狙う対信長防衛ラインの最前線にあった信濃高遠城を守備した。

1582年、信長の長男・信忠率いる大軍の攻撃を受けた盛信は、決死の覚悟で城にこもって戦い、敵をたじろがせる。

しかし、偉大な父から受け継いだ「風林火山」の兵法も、織田軍の圧倒的な物量作戦に打ちくだかれ、盛信は城兵全員とともに戦死した。

にわ　ながひで
丹羽長秀

織田家 | 生没年 1535～1585年

STAGE
安土城、姉川、伊勢長島、稲葉山城、越前、大坂、岐阜城、京洛、長篠、本能寺、山崎

光秀討伐を秀吉に譲る

信長の一つ年下で、柴田勝家とならぶ信長軍団の重鎮である。

姉川の戦いに参戦し、近江佐和山城を与えられると朝倉攻めで活躍し、また、伊勢長島の一向一揆討伐でも軍団トップの名に恥じない戦功をあげた。信長からの信頼は厚く、1576年に始まった安土城築城の責任者に任命されている。

長秀は「米五郎左（五郎左は長秀の通称）」と呼ばれており、米にたとえられたように、一見地味ながらも織田家中になくてはならない存在だった。

ただ、長秀は野望に燃えるタイプではなかったようだ。

本能寺の変のときは大坂にいたため、その気になれば光秀を討つことができたはずだが、なぜか軍勢を起こさず、羽柴秀吉に手柄をさらわれてしまった。

しかも、その後の信長の跡継ぎを決める重臣会議では秀吉に味方し、その後も秀吉に従っている。秀吉と一緒に行動することが多かった長秀は、いつの間にか「あいつの器量にはかなわない」とあきらめていたのだ。

とはいえ、長秀は死に際して驚くべきエピソードを残している。長秀は持病が悪化したのをみて、自ら腹を切り裂き、病巣を取り出して秀吉に送りつけたのである。長年仕えた織田家が秀吉に乗っ取られていくのを黙って見ているのがしのびなく、一矢報いたかったのだろう。

は行

INDEX

羽柴秀吉（はしば　ひでよし）　P.086
支倉常長（はせくら　つねなが）　P.087
蜂須賀小六（はちすか　ころく）　P.088
蜂屋頼隆（はちや　よりたか）　P.088
服部友貞（はっとり　ともさだ）　P.088
馬場信房（ばば　のぶふさ）　P.089
原田宗時（はらだ　むねとき）　P.089
原長頼（はら　ながより）　P.089
原昌胤（はら　まさたね）　P.089
塙団右衛門（ばん　だんえもん）　P.090
日根野弘就（ひねの　ひろなり）　P.090
平手汎秀（ひらて　ひろひで）　P.090
平野長泰（ひらの　ながやす）　P.090
福島正則（ふくしま　まさのり）　P.091
北条氏邦（ほうじょう　うじくに）　P.091
北条氏照（ほうじょう　うじてる）　P.092
北条氏直（ほうじょう　うじなお）　P.092
北条氏規（ほうじょう　うじのり）　P.092
北条氏政（ほうじょう　うじまさ）　P.092
北条綱成（ほうじょう　つなしげ）　P.093
細川忠興（ほそかわ　ただおき）　P.093
細川藤孝（ほそかわ　ふじたか）　P.094
堀内氏善（ほりのうち　うじよし）　P.094
堀秀政（ほり　ひでまさ）　P.094
本願寺顕如（ほんがんじ　けんにょ）　P.095
本庄繁長（ほんじょう　しげなが）　P.096
本多忠勝（ほんだ　ただかつ）　P.096
本多忠政（ほんだ　ただまさ）　P.097
本多正信（ほんだ　まさのぶ）　P.097

は

羽柴秀吉（はしば　ひでよし）

織田家　生没年 1537～1598年

STAGE
安土城、姉川、伊勢長島、稲葉山城、大坂城、桶狭間、岐阜城、五右衛門、本能寺、山崎

電撃の「中国大返し」作戦

天下人になった秀吉も少年時代は貧しく、諸国をまわって針を売り歩いていた。

「サル」というあだ名の秀吉が織田信長に仕えたのは、18歳のときだった。

生まれつきの愛嬌（あいきょう）とユニークな発想でしだいに頭角（とうかく）を現し、信長の美濃（みの）攻めでは「墨俣一夜城（すのまたいちやじょう）」を築城して、攻略の足がかりをつくったといわれる。

姉川（あねがわ）の戦いでは3千の軍勢を率いて浅井長政（あざいながまさ）軍を相手に奮戦している。戦いのあと、浅井氏の本拠・小谷城（おだにじょう）を牽制（けんせい）するために信長から横山城（よこやましょう）を任されたのは、信頼されている証（あかし）だった。

また、長篠（ながしの）の戦いでは、信長に従って徳川家康の援軍に駆（か）けつけ、最前線で鉄砲隊を指揮し、勝利に貢献（こうけん）している。

信長軍団の中国方面軍司令官として、

三木城、鳥取城を次々と攻め落とした秀吉は、1582年、備中高松城を囲んで水攻めにする。あとは総大将・信長の出馬を待って、屈服させるだけだ。

ところが、陣中に迷いこんだ明智光秀の密使が持っていた手紙を見て、秀吉は驚く。本能寺で信長が死んだのだ。

一時は嘆き悲しんだ秀吉だったが、すぐに立ち直り、備中高松城の背後に陣取った毛利軍に気づかれないように休戦交渉を開始する。

毛利軍が撤退を始めたのを確認した秀吉は、1万5千の軍勢を励まし、猛烈なスピードで東へ向かった。

「信長さまの弔い合戦をするのじゃ！」

秀吉の号令に軍勢も奮い立ち、光秀との決戦の地に選んだ山崎に到着したのはわずか6日後のことだった。

この電撃的な急反転は「中国大返し」と呼ばれ、のちに秀吉が天下人となる要因となった重大な作戦だった。

そのころ、光秀は新しい政権作りのために朝廷と交渉している最中であり、秀吉軍が到来するスピードはまったく予想できなかった。光秀はあわてて諸大名に協力を頼んだものの、筒井順慶や細川藤孝らに断られている。

6月12日、丹羽長秀、池田恒興らの軍勢と合流した秀吉は天王山のふもとに本陣を構え、軍勢を三つに分けて淀川沿いに布陣した。

勝龍寺城に入った光秀の軍勢は1万6千。秀吉の味方は2万8千だ。

天王山と淀川にはさまれた山崎の地は戦略のうえで重要なポイントだったが、ここを占拠した段階で、秀吉の勝利は決まったようなものだった。

6月13日、雨が降りしきるなかを進んできた明智軍が、秀吉軍の先鋒（先頭の部隊）・中川清秀を攻撃して、戦いの火蓋が切られる。しかし、平地におびき出されたかたちの明智軍に対し、数の上でも有利だった秀吉軍は、最初から敵を圧倒し、夕方までに勝利を決定づけた。

光秀は夜の闇にまぎれて命からがら敗走し、秀吉は勝ちどきの声をあげる。この戦いの勝利によって、サルと呼ばれた農村出身の男は、天下人への階段をトントン拍子に駆け上がっていくことになったのだ。

はせくら　つねなが

支倉常長

伊達家 | 生没年 1571〜1622年

STAGE
川中島

太平洋を渡った情報官

伊達政宗の家臣。21歳のときに合戦で伝令をつとめ、その後は情報収集役として活躍した。武芸よりも観察力やすばしっこさがとりえだったようだ。朝鮮の役では鉄砲足軽の組頭として活躍し、リーダーとしての才能も発揮している。

1613年、スペインとの貿易を計画する政宗の命令を受け、帆船サン・ファン・バウティスタ号に乗った常長は、90日間をかけて太平洋を横断し、スペイン国王やローマ法王に面会する。しかし貿易交渉は失敗し、さびしく帰国した常長は幽閉され、2年後に病没した。

蜂須賀小六

はちすか ころく

織田家 | 生没年 1526～1586年

STAGE

安土城、稲葉山城、大坂、岐阜城

秀吉に魅せられた男

小六は通称で名は正勝といい、元は尾張と美濃の国境付近を本拠にする野武士集団の頭だった。

小六は、特定の主君に仕えるのではなく、手下の蜂須賀党を率いて戦国大名に売りこみ、雇われ部隊として合戦で暴れ回るのを仕事にしていた。

数々の城を渡り歩いた小六は、斎藤道三に仕えたあと、織田信長の軍に入る。

それまで奇抜な作戦を考えても採用されなかった小六は、桶狭間の戦いで信長がとった戦略をみて「この御方なら、ついていく価値がある」と思った。先駆けをつとめ、桶狭間に突撃した小六は首一つを取り、一人を生け捕りにしたという。

だが、小六にとってもっと大きかったのは羽柴秀吉と出会ったことだ。信長の美濃攻めでは、10歳も年下の秀吉のもとで、最前線の墨俣に砦を築いた。秀吉の才能に感心した小六は、以後、秀吉の配下として危険な任務をこなしていく。

本能寺の変のときには秀吉とともに高松城水攻めに加わっており、信長の死を悟られないように毛利方と交渉した。

山崎の戦いでも奮戦し、のちに秀吉から阿波一国を与えられたが、「役目は終わった」と考えたのか、領地を息子に譲って引退している。

蜂屋頼隆

はちや よりたか

織田家 | 生没年 1534～1589年

STAGE

京洛、山崎

光秀軍を撃破して城主に

美濃の出身で、織田信長が美濃に攻め入ったころから家臣になった。

伊勢長島、越前の一向一揆攻めで活躍し、近江肥田城を与えられる。本能寺の変のときには、四国攻めの準備のため、大坂にいた。

信長の死を知ると、丹羽長秀らとともに出陣し、山崎の戦いでは勝龍寺城にこもる明智光秀を撃破した。その功績で越前敦賀城を与えられ、羽柴秀吉から羽柴姓をもらっている。

服部友貞

はっとり ともさだ

本願寺 | 生没年 ？～1574年

STAGE

伊勢長島

信長を苦しめた服部党頭目

伊勢長島を拠点に服部党を率いた友貞は、織田信長が侵攻してくると、一向一揆衆とともに長島城にこもって抵抗した。

友貞は信長に本拠を追われた伊勢周辺の豪族や食いっぱぐれの浪人となった侍をかきあつめて奮戦する。

川の流れが入り組んだ長島の低湿地帯を活用し、3カ月以上も信長を苦しめた友貞だったが、ついには兵糧が尽き、織田軍の総攻撃を受けて滅んだ。

馬場信房

ばば のぶふさ

◆武田家 | 生没年 1515？～1575年

STAGE
安土城、姉川、上田城、小田原城、
川中島、長篠、三方ヶ原、山崎

不死身といわれた猛将

信房は、官名を美濃守といったため、通称は「馬場美濃」という。30年間に70回以上の合戦を経験しながら、一度も傷を負ったことがないので、「不死身の馬場美濃」というあだ名がついた。

三方ヶ原の戦いでは左翼に陣取り、徳川家康軍を蹴散らしている。

尊敬していた武田信玄の死後、重臣のなかで最高齢の信房は、新当主の勝頼を補佐する。しかし、信房にとって残りの人生は死に場所を探すためにあった。

長篠の戦いで味方が総くずれになるなか奮戦する信房は、勝頼が退却したのを確認すると甲冑を脱ぎ捨て、「我こそは馬場美濃なり。討ち取って名を挙げるがよい！」と叫ぶ。

敵の槍を素手でつかんだ61歳の猛将は、そのまま自分の胸に突き刺し、亡き信玄のもとに旅立っていった。

原田宗時

はらだ むねとき

伊達家 | 生没年 1565～1593年

STAGE
川中島

早死にした政宗の参謀

10代のころから伊達政宗に仕え、奥州統一に向けた戦いで活躍した。

合戦では作戦を練る評定衆の一人として政宗に進言し、また、宿老として内政面の問題についてアドバイスするなど、政宗から頼りにされる若者だった。

だが、朝鮮の役から戻る途中で病気になり、対馬で没した。政宗はまだ29歳だった宗時の死を大いに惜しんでいる。

原長頼

はら ながより

豊臣家 | 生没年 ？～1600年

STAGE
安土城、越前、山崎

清洲城攻略を進言

関ヶ原の戦いで西軍に属した長頼は、別働隊として伊勢方面に出陣する。

このとき長頼は徳川家康の軍勢が西に向かってくるのを知り、清洲城を攻略して東軍の進路を断つ作戦を進言した。

実現すれば効果的な戦略だったのだが、結局は採用されず、関ヶ原で西軍が敗れると脱走して自害した。

原昌胤

はら まさたね

◆武田家 | 生没年 1531～1575年

STAGE
姉川、小田原城、川中島、長篠、三方ヶ原

武田軍団の先遣隊

昌胤の仕事は陣場奉行だ。これは、合戦の前に兵糧を確保したり、戦場の地形などを下見をしたりする仕事である。

生まれつき勘が鋭かった昌胤は、一度も訪れたことがない他国の山中でも、一目見ただけで道がわかった。彼の陣取り

の確かさは武田信玄もほめている。

長篠の戦いに出陣したとき、味方の布陣をみて不利を悟ったはずだったが、いさぎよく突撃して戦死した。

ばん　だんえもん

塙団右衛門

豊臣家 | 生没年 1567～1615年

STAGE

大坂

目立ちたがりの豪傑

加藤嘉明の家臣で、鉄砲大将として関ヶ原の戦いに参加する。しかし、我を忘れて一人で突撃し、嘉明から怒られた団右衛門は、加藤家を去って、転々と主君を変えながら浪人生活を送る。

大坂冬の陣で豊臣方についた団右衛門は、徳川軍への夜襲を成功させ、「夜討ちの大将、塙団右衛門」と書いた札をばらまいて自分の豪傑ぶりを宣伝した。

続く大坂夏の陣でも、さらに目立とうと先陣を争って敵陣に突入し、太ももを射抜かれながらも死ぬまで戦っている。

ひねの　ひろなり

日根野弘就

斎藤家 | 生没年 1518～1602年

STAGE

稲葉山城

徹底して信長に反抗する

美濃の斎藤家に仕え、美濃三人衆と呼ばれた安藤守就・氏家卜全・稲葉一鉄に次ぐ地位の重臣だった。

織田信長が美濃に侵入してくると徹底抗戦したが、稲葉山城が落城したため、一族を連れて浪人となる。浅井長政や本願寺など、信長に敵対する勢力に身を投じて意地を張ったが、伊勢長島一向一揆が信長につぶされると降伏した。

のちに出家して高野山に入っている。

ひらて　ひろひで

平手汎秀

織田家 | 生没年 1553？～1572年

STAGE

三方ヶ原

平手家最後の勇士

若き日の織田信長の素行を直そうとして切腹した平手政秀の孫にあたる。

三方ヶ原の戦いで徳川家康の援軍として派遣され、武田信玄の本陣に突撃して奮戦したが、あえなく討ち死にする。信玄は汎秀の戦いぶりに感心し、その首を信長のもとに送り届けたという。

だが、跡継ぎである汎秀が20歳で死んだため、平手家は断絶してしまった。

ひらの　ながやす

平野長泰

豊臣家 | 生没年 1559～1628年

STAGE

五右衛門

賤ヶ岳の戦いで大活躍

20歳ごろに羽柴秀吉の家臣となった。本能寺の変後に柴田勝家を破った賤ヶ岳の戦いで活躍し、「賤ヶ岳七本槍」の一人に数えられる。

秀吉から豊臣姓を授けられるほどだったが、関ヶ原の戦いでは東軍に属し、のちに徳川秀忠の家臣となる。

大坂の陣では、徳川家康に対して「拙者も豊臣。大坂方につきまする」と宣言したものの、老いの一徹は許してもらえず、江戸で留守番役を命じられた。

ふ

ふくしま　まさのり
福島正則

豊臣家 | 生没年 1561〜1624年

STAGE
大坂城、五右衛門

三成への憎しみから東軍へ

幼名は市松といい、尾張の桶屋の息子に生まれたという。

幼いころに羽柴秀吉に仕えて戦国武将になった正則の性格は豪快そのもので、とにかく戦場では先頭をきって敵陣に突撃するのが信条だった。

加藤清正とともに秀吉子飼いの武将として活躍した正則だったが、官僚的な石田三成がどうにも気にくわない。

三成を憎む正則の感情は関ヶ原の戦いを前にした会議で爆発する。ここで正則が「家康どのとともに三成を討つ！」と宣言したのがきっかけで、豊臣家配下の大名が続々と東軍に参加したのだ。

東軍の先発部隊に参加して西へ向かった正則は、ほかの豊臣恩顧の大名たちと共同で岐阜城を攻略する。

ところが、先陣をきるはずだった正則は、池田輝政に先を越されてしまった。さらに、関ヶ原の戦いでも井伊直政に、一番槍（真っ先に敵と戦うこと）をさらわれてしまう。

それでめげる正則ではない。かえって闘志に火がつき、西軍の宇喜多秀家隊に鉄砲の一斉射撃を命じると、数時間にわたって激戦を展開した。

大坂の陣では、裏切りを警戒する徳川家康から江戸留守居を命じられる。豊臣家の滅亡に直接手を貸すのは免れたが、虚しさを感じた正則は、その後、酒におぼれていったという。

ほ

ほうじょう　うじくに
北条氏邦

北条家 | 生没年 1541？〜1597年

STAGE
小田原城

謙信との同盟を推進

北条氏康の三男で、武蔵鉢形城主。上杉謙信との同盟交渉で北条家の責任者をつとめ、成功に導いた。

1569年、武田信玄が駿河に侵攻してきたときは、鉢形城にこもって迎撃する。小田原城を囲んだ武田軍が退却を始めると、兄・氏照とともに三増峠で待ち伏せたが、逆にはさみ撃ちにあって、惨敗してしまった。

豊臣秀吉の小田原城攻めでは、圧倒的な兵力を見て抵抗をあきらめ、敵将の前田利家に降伏した。

ほうじょう　うじてる

北条氏照

北条家　生没年 1540？〜1590年

STAGE　小田原城

信玄の逆襲を受けて惨敗

北条氏康の次男で、滝山城、のちに八王子城を居城にしていた。

剛毅な性格の氏照は、1569年、武田信玄が駿河に侵攻してきたことに立腹して、上杉謙信との同盟締結を進める。

その後、滝山城にこもった氏照は信玄が小田原城の包囲を解いて甲府へ向かうのをみて三増峠に先回りしたが、信玄の戦略にはまって惨敗、多数の戦死者を出してしまった。

豊臣秀吉の小田原城攻めで降伏し、兄・氏政とともに切腹を命じられた。

ほうじょう　うじなお

北条氏直

北条家　生没年 1562〜1591年

STAGE　小田原城

信長の死を機に出撃

北条氏政の次男で、1580年に家を継ぎ、第五代当主となる。

本能寺の変が起こったとき、氏直はチャンスを逃さず、行動に出た。織田信長の家臣で関東を任されていた滝川一益を攻撃して追い払うと、さらに領土拡張を狙って徳川家康と対立する。

家康とは和解したが、のちに秀吉の小田原城攻めに敗れ、高野山へ追放された。

ほうじょう　うじのり

北条氏規

北条家　生没年 1545〜1600年

STAGE　小田原城

人質だった家康と知り合う

北条氏康の五男で、子供のころ今川家へ人質に出された。このとき徳川家康も人質として駿府に来ていたため、親しくつきあったという。

本能寺の変後、北条家と家康が信濃と甲斐の支配権を争ったとき、氏規は幼なじみの家康と交渉して講和を結び、旧交を温めた。

秀吉の攻撃に屈して小田原城が落城したとき、兄である氏政と氏照の介錯（切腹後に首を斬る役）をつとめている。

ほうじょう　うじまさ

北条氏政

北条家　生没年 1538〜1590年

STAGE　小田原城

政務が得意な北条家第四代

北条氏康の長男で、22歳のときに家を継ぎ、当主となる。しかし、隠居した父は依然として北条家の実権を握っていたので、やや影が薄かった。

1561年、関東の制覇を狙う上杉謙信が北条家に敵対する豪族を引き連れて小田原城を包囲したとき、父とともに城にこもり、徹底して戦った。難攻不落といわれた小田原城はびくともせず、謙信は城下を焼いただけで引きあげていった。

武田信玄が駿河に侵攻してくると、弟の氏照が率先して宿敵・謙信と同盟を結ぶ。信玄の攻撃でも小田原城は落ちなかったが、三増峠の敗戦は痛手だった。

文武両道の父、剛勇を誇る氏照に対して、氏政の得意分野は政治家としての能力だったようだ。その証拠に、氏政は父の死後、謙信との同盟を破り、信玄と結んで北関東へ領地を拡大している。

しかし、豊臣秀吉の上洛（京へ上ること）命令を無視して総攻撃を受け、小田原城が陥落すると、氏政の命運も尽きてしまった。

ほうじょう　つなしげ
北条綱成

北条家　生没年 1515〜1587年

STAGE
小田原城

「地黄八幡」の猛将

父の福島正成は今川家配下だったが、武田家との合戦で討ち死にしたため、家臣とともに小田原へ落ちのびて北条家を頼った。綱成という名は、養育してもらった北条氏政の祖父・氏綱と父の名を組み合わせたものである。

北条の姓を与えられ、一門に加えられた綱成は、父譲りの剛勇を発揮する。戦う前から「勝った！」と叫んで敵に斬りこむほどの気迫は、北条家への恩返しのあらわれだった。

北条家では、兵団を5種類に色分けして編成しており、綱成は黄色に統一した部隊「黄備え」を任されている。

黄色の絹地に「八幡大菩薩」と書かれた旗をひるがえし、つねに先頭に立って戦場を駆け回る綱成。その姿は敵を恐れさせ、味方は彼を「地黄八幡」と呼んで敬意をはらった。

河越城や玉縄城を守った綱成は、「関東の関ヶ原」といわれる1545年の河越夜戦でも、わずかな兵力で足利・上杉軍を破って活躍したが、のちに主君・北条氏康の死を悼んで出家した。

ほそかわ　ただおき
細川忠興

豊臣家　生没年 1563〜1645年

STAGE
大坂、本能寺、山崎

義父・光秀の謀叛に苦しむ

細川藤孝の長男で、若いころは織田信長の配下として活躍する。

忠興は戦場での槍働きだけでなく、スタイルでも目立っていた。自分でデザインした兜や陣羽織に身を包み、華麗に馬を走らせる姿はいかにも若武者らしい。

16歳のとき、信長の命令で明智光秀の娘・玉子を妻にもらった。これがキリシタンで有名なガラシャ夫人である。

1582年、忠興は信長の命に従って、中国攻めの援軍として備中へ向かう途中で本能寺の変を知る。反乱を起こしたのは妻の父・光秀だ。

忠興の悩みは深かったが、結局、義父からの誘いを断り、愛するガラシャを幽閉して光秀と縁を切る。父とともに髪を切って謹慎した忠興は山崎の戦いに参陣せず、その後、秀吉の配下となった。

忠興は関ヶ原の戦いで家康に味方し、

黒田長政らとともに石田三成の本隊を激しく攻撃して戦功をあげている。

しかし、そのころガラシャは西軍の人質になって大坂城に入るのを拒否し、西軍に屋敷を襲われて命を絶っていた。夫婦そろっての忠節に感激した家康によって領地は大幅に増加されたが、忠興の心は晴れなかったに違いない。

ほそかわ　ふじたか
細川藤孝

豊臣家 ｜ 生没年 ｜ 1534〜1610年

STAGE
本能寺、山崎

知性と教養が身を助ける

足利十二代将軍・義晴の隠し子ともいわれる藤孝は、知性と教養の人だった。

朝廷や将軍家とのつながりが深く、茶道や囲碁、蹴鞠から料理まで、幅広い知識を持ち、とくに和歌では一代でたった一人だけに許される『古今和歌集』の奥義を伝授されている。

明智光秀とは織田信長の配下としてともに戦ってきた仲だったが、山崎の戦いでは光秀からの誘いを断っている。これは藤孝が先を見通していたからだろう。

髪を切って隠居し、幽斎と名を改めた藤孝は、山崎の戦いが終わったあと、焼け落ちた本能寺を訪れ、信長追悼の連歌会を開いて、羽柴秀吉の信頼を得た。

合戦は息子の忠興に任せた藤孝だったが、関ヶ原の戦いでは東軍に属し、丹後田辺城にこもって西軍と戦った。

落城の危機に陥ったとき、後陽成天皇から「藤孝が死ねば古今伝授の奥義が途絶えてしまう」と停戦命令が下り、藤孝は無事救出される。

教養が身を助けたわけだが、藤孝はそうなることを見越して戦っていたのかもしれない。

ほりのうち　うじよし
堀内氏善

雑賀衆 ｜ 生没年 ｜ 1549〜1615年

STAGE
京洛

熊野水軍を率いた神官

紀伊新宮城主で、熊野新宮の別当職(神官)の家柄だった。

熊野一帯は海賊の根城で、氏善は彼らを支配しながら勢力を張っていた。

織田信長の石山本願寺攻めに軍勢を派遣し、のちに羽柴秀吉に従う。

関ヶ原の戦いのとき、氏善は石田三成の要請に応じ、隠居していた信長水軍の将・九鬼嘉隆に西軍への参加を求めた。嘉隆が挙兵すると、氏善も伊勢方面に出陣したが、結果は西軍の惨敗だったため、戦後に領地を没収された。

本来は切腹となるところだが、氏善は神官だったために助かっている。

ほり　ひでまさ
堀秀政

織田家 ｜ 生没年 ｜ 1553〜1590年

STAGE
安土城、越前、岐阜城、京洛、山崎

信長の仇討ちに活躍

秀政は、13歳から織田信長に仕え、敵方への使者をつとめるなど、信頼が厚

かった。本能寺の変のときも、信長の中国出陣を伝える使者として、備中高松城を囲む羽柴秀吉のもとに向かっていた。

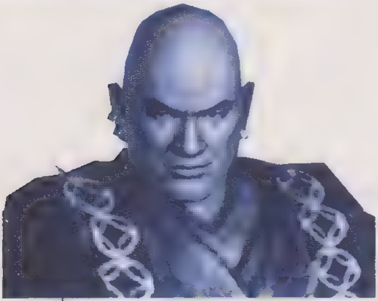
信長の死を知ると、秀吉と行動をともにし、山崎の戦いでは天王山の麓に布陣して明智光秀軍を破る。さらに光秀の居城・坂本城を攻撃して陥落させている。

本願寺顕如（ほんがんじ けんにょ）

卍	本願寺	生没年	1543〜1592年

STAGE
京洛、山崎

戦う一向一揆のシンボル



豊臣秀吉の時代になって本願寺は復活するが、東西二派に分裂してしまった。

この男が一声かければ、全国の一向宗門徒が動く。それを証明したのが、1570年9月12日の石山本願寺蜂起だった。

その日、顕如は諸国の門徒に「仏敵織田信長を打倒せよ」という命令を発する。夜になって本願寺の境内に「カンカンカン！」と早鐘をつく音が響き、門徒たちのどよめきが起こる。

緊迫した鐘の音は、やがて鉄砲の轟音にかき消されていった。一揆に加わっていた雑賀衆らが、信長勢の陣所に向けて攻撃をしかけたのだ。信長勢には根来寺の鉄砲衆が加わっていたので、両軍は激しく撃ち合い、夜の大坂に硝煙の臭いがたちこめる。

この日から始まったのが、本願寺対信長の石山合戦だ。両軍は激しい銃撃戦を開始し、昼も夜も銃声がやむことはなかったという。

顕如は、上洛（京に上ること）した信長が軍資金として5千貫という大金を要求してきたとき、しぶしぶ提供した。

しかし、信長が次々と無理難題をふっかけ、さらに本願寺を囲むように軍勢を配置したのをみて、顕如はついに信長との戦いを決意したのだ。

加賀や越前、伊勢長島など諸国の門徒たちは、一向一揆とよばれる独立した集団を組織していた。江戸時代の農民の一揆とちがって、一向一揆は戦国大名に匹敵する規模を持つ武装勢力である。

顕如は、彼ら門徒の頂点に立つ指導者で、蜂起したときは28歳、信長より9つ年下の若さだった。

顕如が信長に抱いた怒りの激しさは、諸国の門徒に出した戦闘開始の宣言文に「蜂起しなければ破門する」とあるのをみても、よくわかる。

ただし、顕如は感情的になって無計画に蜂起したわけではない。

信長と対立する三好三人衆（三好長逸・三好政康・岩成友通）や朝倉・浅井同盟軍、本願寺と婚姻関係にあった武田信玄、そして信長と決別した将軍・足利義昭らと連絡を取り合い、「信長包囲網」

を完成させたのだ。

三方ヶ原の戦いで信長と徳川家康の連合軍が武田軍に惨敗した結果は顕如を喜ばせたが、伊勢長島の一向一揆が鎮圧されてからは苦しい戦いが続く。

越前、加賀の一向一揆が信長に敗れ去ると、10年にわたる石山での戦いは終わり、顕如は紀伊に退いていった。

本庄繁長（ほんじょう しげなが）

上杉家　生没年 1539～1613年

STAGE
姉川、小田原城、川中島、岐阜城

影響力をもった上杉家臣

繁長の豪勇ぶりと政治力は上杉家中のなかでも指折りで、愛用の刀は「本庄正宗」という天下の逸品である。

川中島の戦いでは、上杉謙信本隊とともに八幡原に進み、激戦を繰り広げた。のちに武田信玄とひそかに通じた疑いで謙信に攻められて降伏するが、繁長の活躍は謙信の死後も続いた。

上杉景勝の上杉家の相続を助け、のちに秀吉から謀叛を疑われて流浪したが、景勝の領地が会津に移されたとき、復帰を許されている。

本多忠勝（ほんだ ただかつ）

徳川家　生没年 1548～1610年

STAGE
安土城、姉川、桶狭間、伊賀、長篠、本能寺、三方ヶ原

戦場を駆ける黒い鬼神

京へ向けて進軍する武田信玄が、徳川領の遠江に侵攻してきたとき、家康直属部隊が敵の大軍と鉢合わせになった。

引くに引けない絶体絶命のピンチだ。ところが、そこで黒ずくめの鎧に鹿の角を立てた兜の騎馬武者が現れると、敵と味方の間に乗り出し、堂々とした態度で名乗りをあげ、敵を圧倒した。忠勝だ。

徳川軍は、おかげで無事に退却できたが、このときの忠勝の迫力は敵の武田軍でさえ、「家康にはもったいない男」と評価するほどだった。

つづく三方ヶ原の戦いでも、敗北はしたものの忠勝は力の限り戦いぬき、徳川四天王の一人として、その名をあらためて天下に示している。

穂先にとまったトンボが真っ二つになって落ちたという名槍「蜻蛉切」はダテではない。生涯に50数回の合戦を経験しながら、かすり傷ひとつ負ったことがない無双の勇士だ。

長篠の戦いでも活躍し、さらに真価を発揮したのが、関ヶ原の戦いだった。

本多家の本隊は息子の忠政に任せ、決戦に臨んだ忠勝は、はじめのうち家康の本陣で作戦参謀をつとめていた。

しかし、戦況が不利になると、自ら馬にまたがって最前線に飛びこみ、バラバラになっていた将兵に次々と指示を与えて軍団を立て直す。「蜻蛉切」を振り回す黒い鬼神に、西軍の雑兵は恐れおののくばかりである。

兵の動きを巧みに操って軍の態勢を整え、悠然と引きあげる忠勝の胆力と用兵術は、かたわらで見ていた猛将・福島正則でさえ、舌を巻くほどだった。

本多忠政

ほんだ ただまさ

徳川家 | 生没年 1575～1631年

STAGE
上田城、大坂、小田原城

猛将・忠勝の血を受け継ぐ

本多忠勝の子で、父に劣らず勇猛果敢な戦いぶりで知られた。

関ヶ原の戦いでは、中山道を進む徳川秀忠軍の後陣をつとめる。

秀忠の命令で、城の明け渡し要求の使者として上田城の真田昌幸に会い、開城するという約束をとりつけたが、これは昌幸の謀略だった。

結局秀忠軍は上田城を攻略することになったが、攻めきれずに終わり、本来の目的である関ヶ原に大遅刻してしまう。だが、この忠政の失策にもかかわらず、忠政への秀忠の信頼は厚く、大坂夏の陣でも一軍を任されて奮戦している。のちに姫路城主となった。

本多正信

ほんだ まさのぶ

徳川家 | 生没年 1538～1616年

STAGE
姉川、上田城、大坂、伊賀

徳川家に帰りざいた謀臣

徳川家康の家臣だった正信は、三河一向一揆に加わった罪で追放され、各地を放浪する。

およそ6年がたち、彼の能力を知る大久保忠世の仲介で復帰が許されると、正信は家康の参謀として絶大な信頼を受けるようになった。

ただ、徳川四天王をはじめとした古参の家臣たちからは「帰り新参のくせに」と嫌われている。

1600年、関ヶ原へ向けて中山道を進む秀忠軍に従った正信は、上田城攻めにこだわる秀忠に「一刻も早く関ヶ原へ向かうべきです」と反対する。

しかし、戦功を焦る秀忠は、榊原康政ら強硬派の意見にしか耳を貸さない。

結局、秀忠は関ヶ原への到着予定が大幅に遅れ、決戦に間に合わなかった。このとき正信は「秀忠さまを説得できなかったのはヤツの責任だ」と陰口をたたかれている。

それでも正信は、家康から必要とされる人材だった。本能寺の変以降の家康の行動は、ほとんどが正信が提案したとおりだったといわれる。

徳川幕府創立後は、息子の正純とともに幕政の中心となり、徳川政権の基礎をつくりあげた。

そしてその生涯も、家康とともに終わった。正信が死んだのは、家康の喪が明けたわずか50日後だったのである。

ま〜わ行

INDEX

ま 前田利家（まえだ　としいえ） P.098
前田利常（まえだ　としつね） P.099
前波新八（まえば　しんぱち） P.099
松井宗信（まつい　むねのぶ） P.099
松平忠輝（まつだいら　ただてる） P.099
松平忠直（まつだいら　ただなお） P.100
松田憲秀（まつだ　のりひで） P.100
松田政近（まつだ　まさちか） P.100
み 宮部継潤（みやべ　けいじゅん） P.101
む 村上義清（むらかみ　よしきよ） P.101
も 毛利勝永（もうり　かつなが） P.101
森可成（もり　よしなり） P.101
や 矢沢頼貞（やざわ　よりさだ） P.102
矢沢頼綱（やざわ　よりつな） P.102
山県昌景（やまがた　まさかげ） P.102
山本勘助（やまもと　かんすけ） P.103
る 留守政景（るす　まさかげ） P.103
わ 脇坂安治（わきさか　やすはる） P.103

ま

前田利家（まえだ　としいえ）

織田家　生没年 1538〜1599年

STAGE
安土城、姉川、稲葉山城、越前、大坂、桶狭間、岐阜城、京洛、長篠、山崎

武名とどろく「槍の又左」

幼名は犬千代（いぬちよ）、通称を又左衛門（またざえもん）と呼ばれた利家のあだ名は「槍の又左」だ。

合戦での武勇伝は数多く、顔に矢が刺さったまま、槍で敵をなぎ倒したことさえある。利家の武名は高まり、おかげで敵の軍勢は、利家の槍がギラリと光るのを遠くから見ただけで、戦意を失ってしまうほどだった。

ところが、ささいなことで主君・織田信長の側近（そっきん）を成敗（せいばい）したため、利家は出仕停止を言いわたされてしまった。

その後、利家はこっそりと合戦に参加し、信長の機嫌（きげん）を取り戻すために必死で働く。桶狭間（おけはざま）の戦いでは敵の首を3つ取って信長の前に進み出たが、出仕停止中だから評価はされない。

美濃（みの）攻めで抜群の働きをした功績でようやく再出仕を認められると、利家はそれまで以上にはりきった。

長篠（ながしの）の戦いでは、鉄砲隊の指揮官を任（まか）され、武田騎馬軍団を撃破すると、信長自身から羽織（はおり）を授かる名誉を得た。

本能寺（ほんのうじ）の変が起こったとき、越前（えちぜん）を転戦していた利家は、柴田勝家（しばたかついえ）とともに越中魚津城奪還（えっちゅううおづじょうだっかん）の戦いを進めていた。そ

のため、山崎の戦いの決戦場は遠すぎて間に合わず、勝家が賤ヶ岳の戦いで滅んだあとは、羽柴秀吉に従う。

秀吉が死んだとき、徳川家康という怪物に対抗できるのは利家だけだった。だが、関ヶ原の前年に利家が死去したために誰も家康を止められなくなり、豊臣家は衰退していったのだ。

まえだ　としつね
前田利常

徳川家	生没年	1593～1658年

STAGE
大坂、小田原城

天王寺の激戦で活躍

利常は前田利家の四男で、加賀百万石の藩主である。大坂冬の陣では、外様大名（途中から徳川家に従った大名）で最大の1万2千という大軍を率いて徳川軍に参加し、岡山口に着陣した。

真田丸にこもって抵抗する真田幸村に苦しめられるが、翌年の夏の陣では総攻撃作戦に加わり、利常の軍勢は天王寺の激戦で3千以上の首をあげる。

その戦功で、江戸幕府の参議という役職を与えられた。

まえば　しんぱち
前波新八

朝倉家	生没年	？～1570年

STAGE
姉川

姉川の戦いに散った朝倉家臣

朝倉家の家臣で、1570年、姉川の戦いに3千の軍勢を率いて出陣した。

新八率いる朝倉軍第二陣は、姉川を渡ってきた徳川軍の酒井忠次と激突する。

数のうえで倍以上の軍勢を指揮した新八は有利に戦いを進めるが、徳川軍の榊原康政から側面攻撃をしかけられて部隊がくずれてしまい、新八は乱戦のなかで討ち死にした。

まつい　むねのぶ
松井宗信

今川家	生没年	不詳

STAGE
桶狭間

今川軍の斬りこみ隊長

今川義元の家臣で、1529年、兄の跡を継いで遠江二俣城の城主となる。

1560年、尾張に侵攻する義元軍の先陣をつとめた。今川軍は余裕の進軍を続け、宗信は桶狭間に到着すると、陣所を設営して義元を迎える準備を整える。一説には茶の湯を楽しもうとしたという。

宗信だけでなく、義元軍のすべてが油断していた。やがて織田信長の急襲を受けた義元の本陣は混乱に陥り、そのなかで宗信も討ち取られてしまった。

まつだいら　ただてる
松平忠輝

徳川家	生没年	1592～1683年

STAGE
大坂、小田原城

父・家康に見放された男

徳川家康の六男に生まれた忠輝は、色黒できつい目つきの顔を家康に嫌われ、幼いころから皆川広照という家臣に養育

される。自分の顔に責任を持つような年齢でもないのに親から捨てられた忠輝の心境は、さぞ複雑だったことだろう。

大坂冬の陣では、「お前は用なしだ」とばかりに家康から江戸留守居を命じられ、忠輝は反抗心を激しく燃やす。

大坂夏の陣では大和口に着陣するが、戦う意欲も見せなかったため、家康の怒りを買って領地を没収されてしまった。

父に反抗しつづけた忠輝は、その後、流罪のまま92歳の生涯を終えた。

まつだいら　ただなお

松平忠直

徳川家 | 生没年 | 1595～1650年

STAGE

大坂

幸村と対戦した家康の孫

徳川家康の次男だった結城秀康の長男である。

大坂夏の陣で、忠直率いる軍勢は、真田幸村が布陣する茶臼山の正面にいた。前日、味方の危機を黙って見ていた忠直は家康に厳しくしかられていた。忠直は「今日こそは」と意気ごんで戦いに臨むが、幸村隊の中央突破を許してしまう。

しかし、乱戦のなかで疲れて座りこんでいた幸村を討ち取ったのは、忠直配下の鉄砲頭だった。

家康からほめられて喜んだ忠直だったが、ほうびにもらったのは茶道具や脇差で、所領の加増はまったくなかった。

ヘソを曲げた忠直は酒色におぼれて異常な行動をとり、謀叛までうわさされたため、隠居を命じられてしまった。

まつだ　のりひで

松田憲秀

北条家 | 生没年 | ？～1590年

STAGE

小田原城

誘惑に負けた北条家の重臣

松田家は北条家に代々仕えた名族で、憲秀は、合戦のときも当主の側に控える特別待遇の重臣だった。秀吉が小田原城に迫ったときは、北条氏直に籠城（城にこもって守ること）を進言している。

しかし、秀吉方の堀秀治からひそかに裏切りを誘われた憲秀は、生ツバをゴクリと飲みこむ。内通すれば伊豆と相模を領地として与えるというのだ。

誘惑に負けた憲秀は、「わかった」と応える。結局、裏切りは身を滅ぼすことになり、小田原落城後に処刑された。

まつだ　まさちか

松田政近

明智家 | 生没年 | ？～1582年

STAGE

安土城、姉川、本能寺、山崎

山崎の戦いで先陣を切る

明智光秀の家臣で、山崎の戦いで先鋒（先頭の軍）をつとめた。

決戦当日は雨だった。政近は秀吉軍が布陣する天王山の麓をにらむ。

午後4時ごろ、政近は秀吉軍の先鋒・中川清秀軍を銃撃し、ついに戦いがはじまった。しかし、この攻撃はかえって秀吉軍の猛反撃を呼び、政近はアッという間に討ち死にしてしまった。

みやべ　けいじゅん
宮部継潤

浅井家 | 生没年 ？～1599年

STAGE
本能寺

異色の僧侶大名

はじめは比叡山の僧侶で、善祥坊と名乗っていた。

継潤は浅井長政に仕えていたが、姉川の戦いで浅井軍が敗れると、羽柴秀吉の誘いを受けて織田信長の配下となる。

秀吉の口車に乗せられた格好だが、先を見る目はあったということだろう。

晩年は秀吉の御伽衆として、昔の合戦話を披露する穏やかな日々を送った。

むらかみ　よしきよ
村上義清

上杉家 | 生没年 1503～1573年

STAGE
小田原城、川中島、岐阜城

川中島決戦をまねいた豪族

北信濃で最大の勢力だった義清は、侵攻してくる武田信玄の攻撃を何度もはねかえしていた。

ところが、信玄の謀略で配下が寝返ったために苦境に陥り、義清は上杉謙信を頼って越後へ逃げる。

義清の願いを受けた謙信は、北信濃に侵攻し、やがて信玄と対決する。これが川中島の戦いの始まりだ。つまり、義清こそが信玄・謙信の両雄激突のきっかけをつくった武将だったのだ。

もうり　かつなが
毛利勝永

豊臣家 | 生没年 ？～1615年

STAGE
大坂

豊臣家の恩義に報いた勇将

関ヶ原の戦いで西軍に属して敗れた勝永は、土佐の山内家預かりとなる。しかし、かつて仕えた秀吉と豊臣家への恩義を忘れることはなかった。

大坂の陣を前にして、勝永は土佐を脱出して大坂城に入り、真田幸村、長宗我部盛親らと健闘を誓いあう。

夏の陣では幸村との共同作戦で家康軍を苦しめたが、奮戦むなしく敗れ、燃え上がる大坂城内で切腹して果てた。

もり　よしなり
森可成

織田家 | 生没年 1523～1570年

STAGE
安土城、姉川、桶狭間、岐阜城

姉川の戦いを勝利に導く

森蘭丸の父。美濃出身で、早くから織田信長に仕えている。

桶狭間の戦いの活躍で信長に認められ

た可成は、姉川の戦いで信長軍五番隊を指揮する栄誉を授かった。

一番隊から四番隊までが次々とくずれていくなか、可成は期待に応えようと軍勢を激励して、浅井勢の猛攻に必死で持ちこたえる。

そこに稲葉一鉄の部隊が敵に側面攻撃をしかけ、形勢はたちまち逆転して、朝倉・浅井連合軍は敗走した。可成のねばりが勝利を呼びこんだのだ。

しかし、その3カ月後、可成は、石山本願寺と手を組んだ朝倉・浅井の大軍に城を襲われることとなり、討ち死にしてしまった。

やざわ　よりさだ

矢沢頼貞

真田家	生没年	不詳

STAGE
上田城

真田信之の補佐役

矢沢頼綱の子で、真田幸村とは従兄弟同士である。

関ヶ原の戦いを前に、東軍に参加することになった幸村の兄・信之に属した。

信之を補佐して徳川秀忠の軍に加わり、中山道を進んで上田城攻防戦に臨んだが、内心は「昌幸（幸村の父）さまに勝てるわけがない」と思っていただろう。

その後、大坂夏の陣では徳川方につき、初めての大合戦を経験する信之の2人の子供たちを補佐して戦った。

やざわ　よりつな

矢沢頼綱

真田家	生没年	1518〜1597年

STAGE
上田城

真田昌幸を助けた名家老

真田幸村の叔父。幸村の父・昌幸が当主になると、補佐役として活躍し、信濃各地の城を攻略した。

攻めとった上野沼田城の城代をつとめる一方で、真田家家老として昌幸を助けている。1582年に北条氏邦が沼田城を攻撃してきたが、昌幸や上杉景勝からの援軍を受けて守り通した。

派手な働きは少ないが、智略を得意とした真田家には欠かせない存在だった。

やまがた　まさかげ

山県昌景

武田家	生没年	1530〜1575年

STAGE
安土城、姉川、上田城、川中島、
長篠、三方ヶ原、山崎

壮烈な最期をとげた猛将

武田信玄とその子・勝頼に仕えた昌景は、家中でいちばん背が低い。しかし、いったん合戦が始まれば、カミナリのような大声と燃えるような闘志を全身にみなぎらせ、敵を恐れさせる存在だった。

三方ヶ原の戦いでは、軍団の右翼に布陣し、徳川軍の酒井忠次隊を攻撃する。

精鋭ぞろいの山県隊は、たちまち酒井隊を粉砕し、馬上の昌景が戦場に響きわたる大声で「本陣へ突っこめ！」と叫ぶと、怒涛のように家康めがけて迫った。

必死で逃げた家康は「なんと恐ろしいやつだ」と震え上がったという。

信玄の死後、死に場所を求めていた昌景は、長篠の戦いで最後の叫び声をあげる。鉄砲隊の銃弾をかいくぐって敵陣に斬りこんだ昌景は、至近距離から弾丸を浴び、鬼のような形相で戦死した。

やまもと　かんすけ

山本勘助

武田家	生没年	1501〜1561年

STAGE

川中島

異形の天才軍師

武田家の合戦の歴史を記した『甲陽軍鑑』という書物に登場する名軍師だ。

勘助の見た目はじつに異様である。左目がつぶれ、右足が不自由で顔に大きな刀傷がある。色黒で背は低い。

勘助は、武田信玄の密命を受けて諸国に潜入し、情報を集めるスパイ役もつとめていた。そして自分が見聞きした情報や、それに基づく戦略を信玄に提言し、得がたい知恵袋として活躍する。

川中島の戦いで、信玄に「啄木鳥戦法」を提案したのも勘助だった。妻女山に陣取った上杉謙信を背後からつつき出し、はさみ撃ちにする戦法である。

作戦は完璧だったが、謙信は予想外の行動に出た。夜のうちに妻女山を降りた謙信の軍勢は、千曲川を渡り、夜が明けると信玄軍の目の前に現れたのだ。

作戦失敗を悟った勘助は、責任を一身に背負って猛然と敵に斬りこみ、全身に86カ所の傷を受けて、討ち死にした。

る

るす　まさかげ

留守政景

伊達家	生没年	1549〜1607年

STAGE

川中島

伊達政宗の頼れる叔父

伊達政宗の叔父にあたり、留守家の養子となって跡を継いだ。

人取橋の戦いで奮戦するなど、政景は政宗の奥州制覇に大きく貢献する。

関ヶ原の戦いの余波で、上杉景勝が最上義光を攻めたとき、政宗の代理として出陣し、景勝と戦って大勝利した。独眼竜・政宗が頼みとする名将だった。

わ

わきさか　やすはる

脇坂安治

豊臣家	生没年	1554〜1626年

STAGE

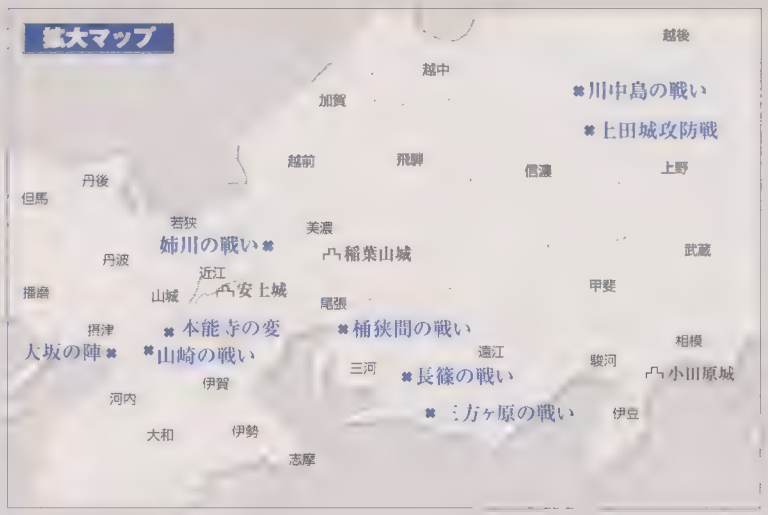
大坂城、五右衛門

関ヶ原で東軍に寝返る

16歳で豊臣秀吉に仕えた安治は、「賤ヶ岳七本槍」の一人として知られる。

関ヶ原の戦いでは、西軍に属して大谷吉継の指揮下で戦う。しかし、小早川秀秋の裏切りで形勢が不利になると、東軍に寝返って大谷隊を側面攻撃した。安治にとっては生き残るための決断だった。

合戦の章
Battlefields



本願寺顕如

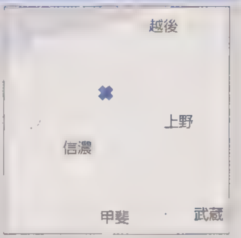
浅井長政
川中島の戦い（P.106）
上田城攻防戦（P.132）
出羽
陸奥
伊達政宗
姉川の戦い（P.122）
能登
越後
上杉謙信
越中
加賀
上野
下野
越前
飛騨
信濃
若狭
美濃
稲葉山城
武蔵
常陸
武田信玄
山城
安土城
近江
尾張
甲斐
上総
三河
駿河
相模
伊賀
小田原城
下総
遠江
伊勢
伊豆
安房
大和
志摩
今川義元
三方ヶ原の戦い（P.110）
長篠の戦い（P.114）
徳川家康
桶狭間の戦い（P.118）
織田信長
本能寺の変（P.126）
山崎の戦い（P.128）

龍虎、大将同士の一騎討ちにて相打つ！

川中島の戦い

BATTLE OF KAWANAKAJIMA

日時		1561（永禄4）年9月
戦場		信濃（長野県）川中島
参戦武将	【武田軍】	武田信玄、武田信繁、武田信廉、武田義信、山県昌景、馬場信房、穴山信君、高坂昌信、飯富虎昌、小山田信茂、小山田昌行、小幡信貞、内藤昌豊、諸角昌清、浅利信種、真田幸隆、原昌胤、甘利昌忠、跡部勝資、今福浄閑、相木昌朝、初鹿野忠次
	【上杉軍】	上杉謙信、柿崎景家、本庄繁長、新発田長敦、色部顕長、安田顕元、山吉豊守、斎藤朝信、加地春綱、中条藤資、村上義清、宇佐美定満、北条高広、甘粕景継、上杉景信、直江景綱、鬼小島弥太郎



宿命のライバル

戦国時代、屈指の名将であった武田信玄と上杉謙信。並び立つ両雄は、宿命のライバルであった。その能力も対照的で、一言でいえば、「戦略の信玄、戦術の謙信」、である。合戦を始めるまでに有利な状況を整える戦略的能力に関して、武田信玄は戦国時代最優秀の部類であっただろう。また、信玄は実際の戦場で発揮される戦術的能力にも優れていた。だが、上杉謙信の戦術的能力は、その信玄をさらに上回っていたのである。

信玄と謙信、両雄の直接対決となった「川中島の戦い」は、全部で5回行われている。

1541（天文10）年、武田晴信（のちの武田信玄）は父・信虎を追放して武田家の実権を握ると、翌年から信濃の攻略を進めていった。信濃には多くの中小大名がいたが、ある時は降伏させ、ある時は計略によって倒し、ある時は大軍によって戦いをしかけ、着々と勢力範囲を広げていった。

一方、1552（天文21）年、越後をほぼ平定していた長尾景虎（後の上杉謙信）の元に、北条氏に敗れた関東管領の上杉憲政が逃げ延びて来た。足利幕府においては関東の支配者であった関東管領だったが、戦国時代のこの時期には実権を失っていた。旧来の権威を尊重する長尾景虎は、関東管領を本来の地位に復帰させるため関東出兵を開始した。後に、長尾景虎は上杉憲政から関東管領職を譲られ、さらに憲政から名家・上杉の姓までも譲られた。

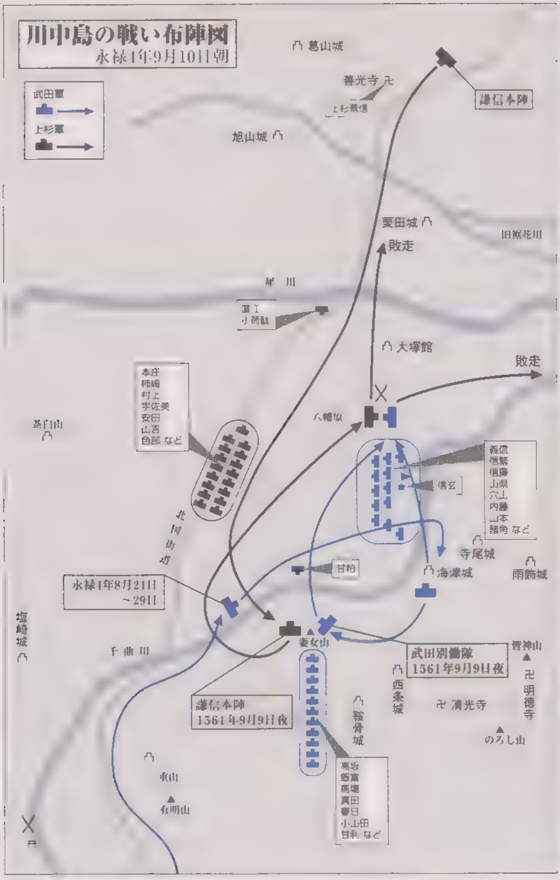
信濃侵略のために計略や陰謀の限りを尽くす武田信玄と、関東管領の地位回復という大義のために関東へ出兵する上杉謙信、二人の戦いぶりも目的も対照的だ。

北信濃の小大名・村上義清は、合戦で信玄を破るなど最後まで抵抗していたが、1553（天文22）年、ついに敗れ去って越後に逃げ延びた。謙信に助けを求めたのである。

両雄、北信濃で対決

村上義清の領地回復という大義名分に加えて、北信濃にまで手を伸ばしてきた信玄への牽制のため、謙信は北信濃に出兵した。信玄は謙信と本格的に戦うつもりはなく、第1回の川中島の戦いは、小手調べのように小競り合いのみで終わっている。

翌年、謙信手強しと見た信玄は、謙信の有力な家臣・北条高広に働きかけて謀叛を起こさせた。戦略家・信玄の見事な手腕である。だが、謙信は即座に北条を破り降伏



させた。反乱を瞬時に鎮めてしまう、謙信の戦上手ぶりは際立っている。

1555(弘治元)年、2回目の戦いでは、両軍ともに力を入れて大軍を出した。お互いに隙が見出せなかったのか、華々しい戦いもなく200日にも及ぶ対峙が続いた。今川義元が間に入って講和が成立、両軍が兵を引いた。

1557(弘治3)年、3回目の戦いは、内容・結果どちらも詳しいことは不明である。

1561(永禄4)年、4回目の戦いで初めて本格的な戦闘になった。「川中島の戦い」と言えば、普通はこの4回目の戦いを指す。

啄木鳥の戦法

この年の8月14日、春日山城から謙信が1万6千の兵を率いて出陣。善光寺防衛のため、上杉景信率いる3千の兵を残した。信仰心の篤い謙信らしい行動だが、多くの信仰を集める善光寺は、重要な戦術拠点でもあった。

16日、武田方の高坂昌信が守る海津城を見下ろす妻女山に、謙信は陣を敷いた。

謙信の出陣を聞いた信玄は、18日に1万8千の兵を率いて甲府を出発。謙信の動向をうかがいつつ、29日に海津城に入った。

両軍は、そのまま20日以上対峙を続けた。やはり両雄の直接対決では、うかつには動けないのだろう。

ここで信玄の軍師・山本勘助が作戦を提案する。全軍を二隊に分けて、一隊で妻女山に夜襲をかけて川中島に追い出し、待ち構えさせておいたもう一隊と共に包囲殲滅しようというものだ。名づけて「啄木鳥戦法」である。

武田軍は、ひそかに作戦準備にとりかかったが、夜襲のため兵に配る飯を炊く煙が海津城に上がった。普段と違う時間に上がった炊煙を、戦いの天才・上杉謙信は見逃さなかった。このわずかな手がかりだけで、武田方の作戦を見破ったのである。ただちに、全軍を妻女山から下ろして、川中島へ向かった。

武田軍は、信玄率いる本隊8千が八幡原へ向かい、高坂昌信率いる別働隊1万2千が妻女山への夜襲攻撃に向かった。

武田軍本隊は、夜襲により妻女山から追い出される上杉軍を待ち構えるべく布陣した。陣形は包囲するための、鶴翼の陣である。ところが、八幡原には妻女山にいるはずの上杉軍全軍が霧のなかから忽然と現れたのである。

鶴翼対車懸かり

上杉軍を妻女山から追い出すため、夜襲をかけようとした武田軍別働隊だったが、妻女山に着いた時には、すでに陣地はもぬけの殻となっていた。そして千曲川の向こうでは、合戦が始まろうとしていた。別働隊は直ちに妻女山を駆け下り、八幡原へ本隊の救援に向かう。しかし、上杉軍の後衛・甘粕景継隊に阻まれて思うにまかせなかった。

夜が明けて霧も晴れると、武田軍本隊8千対上杉軍1万3千の間で、戦いの火蓋が切られた。上杉軍の先鋒・柿崎景家が信玄の本隊に突撃し、両軍本隊同士の衝突は、いきなり激戦となった。

鶴翼の陣を敷いた武田軍に対し、上杉軍は車懸かりの陣で襲いかかった。車懸かりの陣は、各隊を円形に配置して車輪が回転するように動いて代わる代わる攻撃した、と言われているが、それは現実的ではない。おそらく実際には、各隊を交代で攻め掛けさせた動きを車懸かりと表現したものと思われる。いずれにせよ狭い範囲に攻撃を集中させる、突破に適した戦法である。別働隊に多くの兵を分けて数が少なくなったうえに、鶴翼の陣で薄い配置になっていた武田軍本隊には、大きな打撃を与えることになる。

上杉軍の柿崎景家、新発田長敦の隊は、武田軍左翼の武田信繁の隊に攻撃を集中し信繁を討ち取った。信繁の戦死は、この戦いで武田軍が受けた最大の損害だったかもしれない。武田信繁は信玄の実弟、信玄の良き補佐役であり、文武ともに優れた人物。典厩公（てんきゅうこう）と呼ばれ、武田家内での人望も厚かった。

軍師・山本勘助も激戦の中、自らの発案による啄木鳥作戦の失敗を償うかのように

戦死した。他にも、諸角昌清、初鹿野忠次など、名だたる武将が次々に討ち取られていった。

予期せぬ上杉軍の猛攻に、並みの武将なら総崩れになってしまう場面だが、手痛い打撃を負いながらも踏み止まれたのは、さすが武田信玄と言うほかない。必死に防戦しつつ、妻女山に向かった別働隊が八幡原に駆けつけるのを待った。

戦いの前半を優勢に進めていた謙信だったが、武田軍の別働隊に合流されては優位は失われてしまう。その前に信玄を倒さなければならない。謙信の戦いは、時間との戦いでもあった。

別働隊が八幡原の戦場に着くと、武田軍が戦力で優位に立った。別働隊は本隊と別方向から接近したため、上杉軍を包囲する形になった。啄木鳥戦法の本来予定していた形が、ようやく実現したのである。

前半は上杉軍優勢だった戦いは、次第に武田軍優位へと変わった。だが、包囲されつつあった上杉軍の抵抗は衰えることなく、乱戦となっていった。

謙信、信玄本陣に斬り込む

謙信の戦いは、敵本陣に向って激しく迫ることが多い。今回もまた例外ではなかった。武田の包囲陣を突破するため、謙信は信玄のいる武田軍本陣へと突撃した。

この時、本陣の信玄の元に馬に跨った謙信が飛び込み、二人の一騎撃ちとなった。馬上から刀で斬りつける謙信に対し、床几（しょうぎ）に腰を下ろした不動の姿勢のまま軍配で受ける信玄。頭を丸め信玄と号した時から、二度と刀は抜かないと誓った信玄は、刀ではなく手にした軍配で謙信の一撃を受けたという。謙信の剣の前に信玄の命も風前の灯かと思われたが、武田軍本陣の真っ只中に長居をするほど、愚かな謙信ではない。一撃で倒せなかったことを悟ると、そのまま風のように去っていった。

真偽は定かではないが、川中島の戦い、いや戦国時代の合戦のクライマックスとも言える名場面である。

武田軍に包囲された上杉軍は、犀川を渡り撤退する。このとき、直江景綱の小荷駄隊がよく追撃を防ぎ、また武田軍も損害が大きく、さらなる追撃は不可能であった。上杉軍は上杉景信が守る善光寺へ退却して、戦いは幕を閉じた。

武田軍の戦死4千6百、上杉軍の戦死3千4百を数えたと言われ、戦いは互いに大損害を被った痛み分けに終わった。信玄は川中島周辺を勢力下に置き続け、戦略的には信玄の勝ちと言えよう。だが、信玄にとって多くの武将を失った痛手、特に典厩公信繁の損失は大きかったのである。

死闘、その後

1564（永禄7）年、5回目の戦いが行われた。前回の戦いの余りの激しさからか、どちらも積極的に動くことはなかった。信玄と謙信は、対陣してのにらみ合いを60日間続けたのちにお互い兵を引き、本格的な合戦にはならなかった。

10年もの間、5回にわたる合戦が繰り広げられた「川中島の戦い」は終わった。

知力と武勇の限りを尽くして戦った両雄の間には、真剣勝負をした者同士のみが知る、信頼のようなものが、いつしかでき上がっていたのだろう。

信玄は死の直前、後継者の勝頼に対し、上杉謙信を頼って助けを求めよ、と言い残している。信玄の死を聞いた謙信は、驚愕のあまり食事中で手にした箸を落とし、好敵手を失ってしまった、と嘆息をついたという。

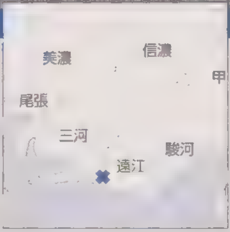
謙信の死後、景勝と景虎の養子同士の間で後継者争い（御館の乱）が起こるが、景勝は信玄の息子・勝頼に協力を求めた。景勝はこの争いに勝利して、上杉家を継いだ。宿命のライバルとして激しく争った信玄と謙信だったが、息子たちは手を結んだのだった。

甲斐の虎、家康を蹴散らす

三方ヶ原の戦い

BATTLE OF MIKATAGAHARA

日 時		1572（元亀3）年12月
戦 場		遠江（静岡県）三方ヶ原
参戦武将	【武田軍】	武田信玄、武田勝頼、武田信廉、一条信龍、望月信雅、山県昌景、馬場信房、穴山信君、高坂昌信、小山田信茂、小山田昌行、小幡信貞、内藤昌豊、原昌胤、甘利昌忠
	【徳川軍】	徳川家康、酒井忠次、石川数正、本多忠勝、榊原康政、松平家忠、大久保忠世、大須賀康高、鳥居元忠、夏目吉信
	【織田軍】	佐久間信盛、滝川一益、平手汎秀



最強、武田軍団

武田信玄が旗印とした、「孫子」の有名な一節「其疾如風　其徐如林　侵掠如火　不動如山」の十六文字から、「速きこと風のごとく、静かなこと林のごとく、侵略すること火のごとく、動かざること山のごとく」という言葉を端的に示す「風林火山」の四文字は、信玄とその軍団の代名詞となっていた。

1572（元亀3）年、武田信玄はついに3万余の大軍を率いて京の都へと進撃を開始。「動かざること山のごとく」だった武田軍の動向は、正に『山が動いた！』と天下を驚かせたのである。

武田信玄が、ライバル上杉謙信との争いや関東方面への関与に忙殺されている間に、尾張の織田信長が先んじて上洛を果たしていた。織田信長は、足利幕府に代わる権力者として天下に号令をかけようとしていたが、浅井長政、朝倉義景、松永久秀、石山本願寺などの諸勢力に包囲され苦境に立たされていた。

この状況での上洛開始は、さすが戦国時代きっての戦略家である武田信玄、と言わざるを得ない。「動かざること山のごとく」好機が訪れるのをじっと待ち、「速きこと風のごとく」「侵略すること火のごとく」動くのは今と、満を持しての行動開始だった。織田信長の命運は、風前の灯火となった。

本多忠勝の武勲

動き出した風林火山・武田軍の矢面に立たされたのが、遠江国浜松に居城を構えていた徳川家康。四方を敵に囲まれた織田信長の、ほとんど唯一の同盟者であった。3万を数える武田信玄の大軍に対して、徳川家康の軍勢は8千ほど。家康は信長に援軍を要請するが、信長も大軍を送る余裕はなく、佐久間信盛、平手汎秀率いる3千の兵を向かわせるのがやっとであった。

「孫子」の一節を旗印とするだけに、「それいまだ戦わずして廟算勝つは、算を得ること多ければなり」という「孫子」の一節の通り、信玄は戦いに臨む前に有利な態勢をすでに整えていたと言える。

遠江国に進入し東方より浜松に近づく武田軍に対し、家康はその戦力を探ろうと一部を出陣させた。見付宿付近で偵察を試みたが、この部隊は武田軍の先鋒に発見される。偵察隊はただちに浜松城に向けての退却を図るが、一言坂で武田軍に捕捉されてしまう。ここから浜松城までは開けた平地が広がっており、武田軍と戦闘を続けては全滅あるのみである。

そこで、家康の旗本・本多忠勝は一言坂に踏み止まって武田勢を食い止め、味方の退却を助けた。忠勝の奮戦ぶりは、味方のみならず武田方も感服させた。信玄の近習

小杉左近が「家康に過ぎたるものが二つあり、唐の頭に本多平八」(家康は身分に似合わない立派な物を二つ持っている。それは唐様式の兜と本多平八郎忠勝である)と即興で和歌を詠んだほどであった。

おびきだされた家康

前哨戦である「一言坂の戦い」に続き、いよいよ両軍の本隊同士の対決に移ることになるはずだった。戦力の差から見て、徳川軍は浜松城に籠城して武田軍を待ち構え、武田軍は城を包囲して攻城戦に移行するのが、この場合の常道と言える。しかし、武田信玄は浜松城を包囲する様子さえ見せず、そのまま素通りして更に西方への進軍を続けようとした。

後年の「狸親父」ぶりとは異なり、この当時の家康は三十の血気盛んな壮年武将である。信玄に自らの存在を全く無視するかのごとく通過され、このうえない屈辱と取ったか、周囲の反対を押し切って浜松城から打って出た。行軍隊形のままの武田軍に対し、側面あるいは背面から一撃を加えれば、勝算ありと踏んでいたかも知れない。

だが、家康は信玄の罠にまんまと引っかかってしまった。信玄は、これ見よがしに浜松城を通過して、家康を誘い出そうとしていたのだ。浜松城の北方、三方ヶ原にて鶴翼の陣をもって攻めかかろうとした徳川軍に対し、武田軍は魚鱗の陣を敷き待ち構えていたのである。やはり若い徳川家康よりも、百戦錬磨の武田信玄の方が一枚上手であった。

また、信玄は戦略的な状況も考慮したと思われる。浜松城に籠もられて攻城戦を仕掛けることとなっては、どうしても時間がかかる。戦略的に優位な状況で、織田軍主力と決戦を行うためには、一刻も早い上洛が必要である。時間をかけずに徳川軍に手痛い一撃を与え、西方への進軍を続けるためには、野戦のほうが都合がいい。

武田軍に先制の一撃を与えるはずだった徳川軍は機先を制され、武田軍先鋒の小山田信茂率いる投石隊が石を投げて三方ヶ原の戦いの火蓋は切って落とされた。戦いが小山田隊の投石により始まるのは、武田軍の定石である。小山田信茂はつねに投石隊を率いて先鋒を務めた。

石を投げる、と聞くと大したことがないように思えるが、遠距離から投げつけられ頭上から雨霰と降ってくる石の威力には侮り難

いものがあり、しかも防ぐ手立てはない。そして、真冬の遠江国は常に強い西風が吹いている。投石の威力はさらに増しただろう。

役に立たない織田の援軍

夕方の4～5時頃始まった戦いは、序盤から武田軍優位に進み、織田からの援軍であった佐久間信盛は、味方に利あらずと見るや早々に退却してしまう。信長から預かった兵を、不利な戦いで無用に消耗したくないという考えだったのろうか。対照的に、もう一人の織田軍からの援将・平手汎秀は討死した。かつて信長の傅役をつとめ、その放埒な行動を諌めるために死を選んだ平手政秀の子であり、父同様に織田家のために愚直なる死を選んだともいえる。数年後、佐久間信盛はこの時の平手汎秀を見捨てての退却を信長に咎められ、織田家中より追放の憂き目に遭っている。

さて、先手を取られ戦力的にも劣勢な徳川軍は、戦闘開始後2時間程で総崩れとなり壊走する。このときの退却戦は、徳川家康の生涯における最大の危機であった。必死に逃げる家康に、追撃をかける武田軍。だが、家康配下の三河武士は忠義者であるという評判通り、家康の身代わりとなって次々と倒れていった。その中の一人、夏目吉信は自らの鎧を家康に着せて、家康の鎧を着込み自分が家康であると叫びながら、追手に向かって斬り込み討たれた。その子孫は幕府の旗本となって家名を保ち、末裔から明治時代に文豪・夏目漱石を輩出することになる。

空城の計

三方ヶ原の戦いにおける徳川家康の退却ぶりは、当時としてもよほど印象的な事件だったのだろう。浜松周辺には、逃げる家康にまつわる挿話が数多く伝承されて

いる。その中の代表的なものにこんな話がある。

懸命に逃げたため疲れた家康主従は、途中の茶屋で休息し小豆餅を頼んだ。ところが食べている間に武田軍の追っ手が迫ったため、餅の代金を払わずに逃げ出した。食い逃げだと怒った茶屋の老婆は家康を追いかけて、餅の代金を払わせた。茶屋のあった場所は「小豆餅」、老婆が代金を払わせた場所は「銭取」という地名がつき、現代に至るまで残っている。2つの地名の間は2km以上もあり、馬に乗って必死に逃げた家康を茶店の老婆が追い付けるのか、そもそも武田軍から必死に逃げる家康に茶店で一服入れる余裕があるのか、と真偽は定かならぬ逸話である。

また、三方ヶ原から浜松城までの距離は約10km。家康は敗走開始から2時間後には浜松城にたどり着いている。途中多くの逸話を残している余裕など、とうていあり得ない。だが、似たような伝承が多数残っているのは、三方ヶ原の戦いの激しさと追撃戦の凄まじさを物語る傍証だろう。特に武田軍の侍大将の山県昌景の追撃ぶりは手厳しく、家康は山県隊の赤備えを後年、部下の井伊直政に真似させたという。

浜松城まで命からがら落ち延びた徳川家康は、恐怖の余り脱糞までしていたと伝えられる。しかし、このとき家康は放胆にも城門を開け放ち、篝火を焚いて、敗兵を収容した。さらに家康の宿将・酒井忠次は、闇のなかに帰ってくる自軍の将士のために自ら太鼓を叩き、浜松城の健在をアピールしたという。浜松城まで追ってきた武田軍の馬場信房と山県昌景は、この異様な光景に徳川方の計略を疑い、城を攻めなかった。

失敗を教訓とした家康

さて、武田信玄との戦いに、このうえない屈辱的な敗北を喫してしまったわけだが、この失敗がよほど身にしみて教訓としたか、以後の家康の行動には、軽挙妄動が一切見られなくなった。

晩年、天下の実力者と目されるようになった時期には、すでに世を去って久しく伝説的な存在となっていた武田信玄に対し、劣勢をも顧みず勇猛果敢に立ち向かったということで、却ってその武勇を称えられ評価を高めることになったのである。

もくろみ通り、徳川軍に致命的な打撃を与えた武田信玄は、さらに西方への進軍を続けた。三河国に入った信玄は、徳川方の野田城を包囲する。立て籠もる兵は数百の小城ながら、巧妙な造りの野田城はよく持ちこたえた。堅い城に籠もられてしまっては、いかに戦上手の武田信玄といえども陥とすにはどうしても時間がかかってしまう。だからこそ、浜松城では家康を誘き出したのだが、さらに小勢の野田城主・菅沼定盈が城外に打って出るはずもなかった。

信玄、上洛途上に命運つきる

籠城中の野田城には、村松芳休という笛の名手がおり毎晩笛を吹いた。その妙なる笛の音を、敵味方がこぞって聞き惚れた。武田信玄さえ例外ではなく、城壁近くに姿を見せていたという。笛の音を聴いていた信玄は、城兵・鳥居三左衛門が鉄砲で狙撃され、重傷を負い、それが元で命を落としたという伝説がある。

信玄は甲斐から金山掘り人足を呼び寄せ、城の地下を掘らせて水脈を断った。城内の井戸が枯れたため、菅沼定盈はやむなく降伏、野田城は開城するに至った。攻城戦は1ヵ月に及んだのである。

城内からの狙撃による鉄砲傷が元かどうかはともかく、武田信玄は病状が悪化したため上洛を断念、甲斐国への帰途についた。帰還の途中、信濃国駒場に至ったところで死去。武田信玄は、上洛を果たして天下に号令することなく、53年の生涯を閉じたのである。

武田騎馬軍団、壊滅する

長篠の戦い

BATTLE OF NAGASHIINO

日時		1575（天正3）年5月
戦場		三河　愛知県　長篠
参戦武将	【織田軍】	織田信長、佐久間信盛、柴田勝家、丹羽長秀、滝川一益、羽柴秀吉、蜂屋頼隆、水野信元、佐々成政、前田利家、福富秀勝、野々村正成
	【徳川軍】	徳川家康、徳川信康、石川数正、大久保忠世、本多忠勝、井伊直政、榊原康政、大久保忠世、大須賀康高、鳥居元忠
	【武田軍】	武田勝頼、武田信廉、武田信豊、穴山信君、小山田信茂、馬場信房、山県昌景、内藤昌豊、原昌胤、土屋昌次、真田信綱、真田昌輝、一条信龍、望月信雅、甘利昌忠、跡部勝資、今福浄閑

信長、ついに武田軍団と対決する

1575（天正3）年5月21日、織田信長の用いた「3千挺3段撃ち」という前例のない鉄砲隊は、最強無敵といわれた武田軍騎馬隊を見事に壊滅させた。これが世にいう長篠の戦いである。東方で勢力を延ばしてきた武田氏は、織田信長にとってもっとも油断ならない相手であった。西方は日夜戦火の嵐であったこの時期、あえて武田氏との対決に出向いたのは、この戦いに重要な意味があると考えていたからだ。最大の敵を倒し、周囲の反逆を一挙に鎮圧しようとした信長は、慎重にかつ神妙にこの戦いに挑んだ。長篠の戦いは信長の非凡な天才性が大きく発揮された戦いとなった。

これまで、歴史年表などで示されている「長篠の戦い」は、ほとんどの場合が織田軍鉄砲隊×武田軍騎馬隊との衝突のみをさしている。だが、実際に決戦場となったのは、長篠より西方にあたる設楽原だったことから、最近では「設楽原の戦い」とも呼ばれるようになった。しかし、事の起こりとなった長篠城をめぐる徳川氏対武田氏との領土争いを含めれば、「長篠の戦い」と呼称しても間違いではない。

武田勝頼、長篠城を囲む

奥三河の武田氏と徳川氏の勢力圏沿いに位置する長篠城は、家康からすれば武田軍を前線で抑えるための必要不可欠な城であり、また武田氏にとっては三河侵攻のため確保しておきたい城であった。そのため長篠の地では、何度と争奪戦が繰り返されてきた。信玄の死後、家督を継いだばかりの勝頼は、老臣に「今は国を守ることが先」と反対されるも聞き入れず、父の遺志を継いで、三河・遠江の侵攻に乗り出した。

1574（天正2）年5月、勝頼は、東遠江の要衝・高天神城へ2万5千の大軍を率いて攻撃した。このとき、家康に援軍を要請さ

れた信長は、嫡男の信忠と老臣の佐久間信盛を救援に向かわせるが、間に合わず、ついに信玄でさえ落とせなかった高天神城はあっけなく落城してしまう。家康はこれに反撃するため、奥三河地方の武田方の豪族であった奥平貞昌を説き伏せて味方とし、長篠城の城主とした。長篠城は信玄が生前に奪われたが、取り戻していたのだ。

翌1575(天正3)年4月21日、高天神城を落として自信をつけた勝頼は、1万5千の軍勢を率いてすぐに長篠城へ攻め寄せた。城の裏山に鳶ノ巣山砦を含める多数の砦を築いて包囲網を強化し、寝返った奥平氏に対するみせしめとして、勝頼は激しく城を攻め立てた。武田軍が布陣した鳶ノ巣山砦は、長篠城を見下ろせる位置だったため、それだけでも城兵たちを威圧するに十分であった。さらに勝頼は、金掘人足を呼び寄せ、場外から坑道を掘って城内に潜入を試みたりと徹底的に圧力をかけた。しかし、奥平貞昌は頑強に防戦を続け、長篠城は容易に落ちなかった。

勝頼が手を焼いていたそのころ、織田信長の3万という大軍が美濃を出発し、密かに長篠へと近付いていた。援軍にこれだけの兵力を投入したのは、高天神城の戦いに遅れたこともあり、家康の信頼を取り戻す意味もあったのだろうが、この対戦における信長の意気込みが、尋常ではなかったことの現れであろう。

新戦法・鉄砲隊

5月18日、織田軍は徳川軍8千と合流したのち、長篠城の手前で進撃を中止して、設楽原に布陣した。信長は、兵士一人ずつに運ばせていた丸太をつないで柵を作らせ、陣の前を流れる川を濠とみなし、掘や塁壁を築いた。つまり、野戦築城である。戦場に柵を作ることは珍しいことでないが、信長の場合、これを武田騎馬軍の攻撃をくい止めるための馬防柵として用いた。ここが、通常の活用法と違う点である。

野戦での衝突は兵力の差が勝敗を分けるが、信長は少しでも味方への打撃を避けるため、神速で突入してくる武田軍に対して、鉄砲を主力として迎撃しようと考えた。

しかし、それまで鉄砲は野戦には向かないとされてきた。理由は、最前列で鉄砲が射撃を始めて先鋒を防いでも、第2部隊が突撃すれば、途端に敵味方と入り乱れてしまうため、それ以降は撃つことができなくなるからだ。それに当時の鉄砲は、先端から弾丸を込める先込め式の火縄銃なので、発射するまでに時間がかかる。

そこで、信長は「3千挺3段撃ち」をという新戦法を考案した。信長が揃えた鉄砲の数は、なんと3千挺。これを千人に持たせ、

長篠の戦い布陣図

3段階交代で一斉に撃たせるのである。当時の戦国大名には全く思いつかない発想であった。だが、信長が率いた鉄砲隊は、諸国から掻き集めた借用部隊であるため、千人が一斉に交替しつつ射撃を続ける訓練など受けているはずがなかった。混乱状態に陥りやすい戦場で、発射の号令に合わせて引き金を引くことなど不可能である。

おそらく、実際の合戦では一斉射撃にはせず、3人が一組となり、いつでも3人のうち一人が発射出来るような態勢をとっていたのではないかと考えられる。

また、鉄砲の数については、千挺であったという説がある。種子島より鉄砲が伝来してから、国内生産が進んでいたとはいえ、10挺で千両（2億2千万）という破格の戦費であった。その当時の信長の経済力がいくら莫大であったとしても、3千挺をそろえるのは不可能に等しい。後世に伝わるにつれ、数が膨張され記録されたとも思われるが、信長は生産を増加させただけでなく、大和一国の領主・筒井順慶など多くの諸大名から借用したとされている。どちらにしろ、信長の揃えた鉄砲の数は、常識を超える範囲であったことには間違いない。

設楽原決戦へ

勝頼は、織田軍が長篠城より離れた場所で行軍を停止したことを臆したものと判断した。20日、武田軍は長篠城の包囲をわずかな兵に任せ、1万2千の軍勢を率いて、設楽原へ向かった。すると、夜のうちに信長が送り込んでいた、家康の重臣・酒井忠次の率いる5百の別働隊が、長篠城に築いた武田側の鳶ノ巣山砦に攻撃を仕掛けた。この襲撃には重要な意図があった。別働隊の働きにより、武田側は落城寸前の長篠城を失ったどころか、本陣の背後から攻められ退路を失い、前進せざるをえない状態に追い込まれたのだ。そのため、信長の思惑通りに、武田軍は鉄砲隊が待ち構えている織田・徳川連合軍の設楽原へ誘き寄せられる形となった。

5月21日早朝6時、武田軍騎馬隊は、織田・徳川連合軍と対峙した。このとき、信長は左翼、家康は右翼に布陣しており、酒井忠次の不在で手薄となった南端を、信長の老臣・佐久間信盛が援護した。武田軍の左翼を固めていた山県昌景が先鋒隊となり、徳川軍へ向けて突進を始めた。待ち構えていた千人の鉄砲隊は、押し寄せて来るぎりぎりまで動かず、そして一定の距離に入ったその直後、号令とともに一斉に火を吹いた。武田勢は次々となぎ倒されたが、2発目には時間がかかるはずと思い、すぐに第2部隊が駆け出した。

鉄砲と馬防柵にはばまれる

普通の場合なら、鉄砲の射程距離は約100メートルなので、2発目を発射までにかかる時間は約30秒。それだけあれば、100メートル先の敵に近付くことなどたやすいはずである。しかし、武田軍が踏み入れようとした瞬間に、またもや鉄砲隊の射撃によりばたばたと崩れて行った。こうした正面衝突が何度と繰り返されるも、武田軍は頑固として真っ向から飛込む姿勢を止めようとはしなかった。それは、武田軍が疾風怒濤と恐れられる最大の理由の一つで、猪突猛進ともいえる生死を顧みない性癖にあった。副将・内藤昌豊の部隊は柵を乗り越え強行突破を試みるが、いずれも撃退され、多くの指揮官を失った武田軍の統制が乱れ始めた。

これは従来の合戦の突撃を貫き通した武田軍に対し、織田・徳川軍が待ち構えて射撃するという新戦法で迎撃を続けたことにあった。勝頼は、次々に入る宿将の討死の知らせを聞いて、ついに撤退を命じる。そのしんがりを、重臣の馬場信房が務め、織田・徳川軍の追撃に自殺同然に立ち向かって行った。馬場の働きにより、勝頼は奥三河へ落ち延びたが、このときわずか6騎だったという。武田勢の重臣はほとんど討ち死にし、1万の兵力を失った。こうして8時間にも及ぶ激戦は、織田・徳川軍の圧勝のもとに幕を閉じたのであった。

武田氏の衰亡

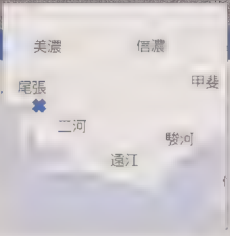
長篠の戦いでの武田軍の失態は、勝頼の読みの浅さと自尊心の過信からといえる。また、信玄のころから仕えていた重臣らの信頼に欠けていたことも挙げられる。信玄は「人は城、人は石垣」という名言を残しているように、家臣の実力を讃え、領内に城を築く事を好まなかった。しかし勝頼は、我が軍に足りないものは強固な城だと言って、家臣を信じず築城しようとした。となれば、人心が離れていくのも当然である。

逸話の一つに、長篠の戦いとなる前夜、「甲陽の4名臣」である馬場信房、山県昌景、内藤昌豊の宿老らが、別れの水盃を交わしたという話がある。勝頼に不満を抱いていた宿老は、決戦の前に今生での別れをすでに済ませていたのだ。実のところ、信玄が勝頼に跡を継がせたのは真意ではなく、嫡子の信勝が年若だったため、その代行を任せただけに過ぎなかった。「負けるのも滅びるのも人皆天命」と言い残した信玄は、死後、わずか2年足らずのうちに最強無敵の武田軍がもろくも崩れ、滅びの道をたどることになろうとは思いもしなかったであろう。まさに時の運としか、言いようがない。

信長、会心の奇襲作戦

桶狭間の戦い

BATTLE OF OKEHAZAMA



日時		1560（永禄3）年
戦場		尾張（愛知県）桶狭間
参戦武将	【織田軍】	織田信長、佐々勝通、織田信蕃、佐久間信盛、佐久間盛重、岩室長門守、金森長近、河尻秀隆、佐々成政、長谷川橋介、柴田勝家、林秀貞、森可成、服部小平太、毛利新助
	【今川軍】	今川義元、朝比奈泰朝、朝比奈泰能、岡部元信、葛山信貞、鵜殿長照、松平元康、葛山氏元、松井宗信、井伊直盛

強大な今川軍

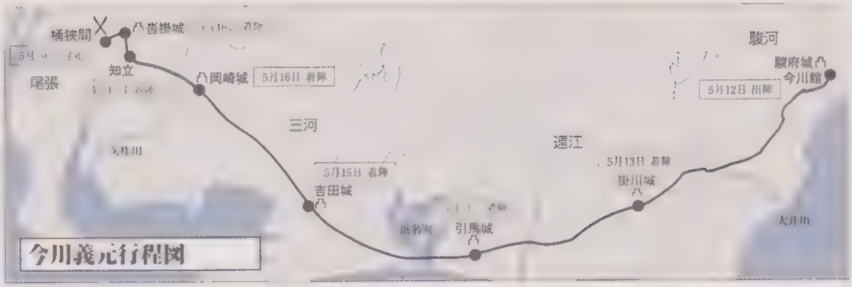
桶狭間の戦いは、1560（永禄3）年に尾張国桶狭間で起こった織田信長と今川義元との戦いだ。駿河・遠江（静岡県）・三河（愛知県）の三国を率いる今川義元の軍勢は、2万5千とも4万ともいわれ、当時これほどの軍勢を動員できる戦国大名はほかにいなかった。それに対し、家督を継ぎ、同族争いのすえようやく尾張半国を平定したばかりで、領国全土からかき集めたとしても、せいぜい5千ぐらいにしかならなかった。双方の勢力からすれば、戦は交える前から結果が見えていたのである。しかし絶体絶命に追いこまれた信長は、小勢を率いて奇襲をしかけ、今川軍勢を撃破した。桶狭間の戦いは、当時27歳の若き織田信長が、その名を乱世に刻む大きな転機となったのだ。

今川義元の意図

さて、今川義元がなぜ尾張国に攻め寄せたかについて、これにはいくつかの説がある。まず定説とされるのが「上洛説」である。

1554（天文23）年、義元は甲斐の武田信玄、相模の北条氏康と三国同盟を結び、背後の安全を確保し、いよいよ西側に目を向けるようになる。今川家は、没落した足利将軍の連枝では、唯一栄えていて、義元自身かねてから京都に強い憧れを持っていた武将であるから、足利氏に代わって将軍になろうと考えたのではないかとされる。将軍家の一門だからといっても易々と上洛するのはかなわなかったであろう。なぜなら、諸国に割拠する戦国大名たちは互いに牽制しあっていて、自分に先駆けて他の大名の上洛を容易に許さなかったからである。後年、信長が上洛に幕府復興をめざす足利義昭を奉じるような大義名分が義元にはない。となると考えられるのが、上洛を表向きにした「尾張奪取説」である。尾張の織田信長が大うつけだという噂はもちろん義元の耳にも入っていただろうし、たかが半国を手に入れるだけのために、義元自身が大軍を引き連れたとは考えにくい。おそらく、「上洛ついでに尾張をいただいていこうか」などと言って、タカをくくっていたに違いない。とはいえ、その後に美濃の斎藤義龍、近江の浅井・六角が控えているわけだし、たとえ尾張併合を果たしてもすぐには動けないだろうから、やはり上洛説はあとから付け足したものであろう。

そして、もう一つ考えられるのが、「三河確保説」である。もともと今川氏と織田氏が対立する背景には、両者の間に位置する三河国の奪い合いがあった。1540（天文9）年、信長の父・信秀は領地拡大のため三河に侵攻するが、三河領主・松平広忠（徳川家康の父）は今川義元に援助を申し出て、何とか危機を脱する。広忠はこのとき、今川氏を味方につける条件で、わずか7歳の松平元康（のち



今川義元行程図

の徳川家康)を人質として送り出している。とはいえ、今川氏が完全に三河国を支配できたわけではなかった。桶狭間の戦いの直前、義元は念願の三河守に任じられ、これをきっかけにいよいよ三河平定に乗り出したのではないかと考えられる。

それを裏付けるのが、尾張と三河の国境線付近で起きた鳴海城での一件だ。もともと織田領にあたる鳴海城の城主山口左馬助は、信長が家督を継ぐとすぐ織田家を見限り、今川家に寝返った。義元はこれを確保するため、家臣の猛将・岡部元信を城主として入れ、兵力を投入する。が、信長は今川氏の動きを阻止するため、善照寺、中嶋、丸根、鷲津の5カ所に砦を構えて反撃に出た。つまり、義元が出陣したのは、信長との決戦ではなく、この封鎖を排除する救援として出向いただけに過ぎなかったのだ。

実際、これまで着実に所有を広げてきた義元が、わざわざ力づくで織田家を滅ぼそうとしていたとは思えないし、すでに述べたように義元にしてみれば、信長など赤子の手をひねるくらいにしか思っていないはずだ。だが、むろん戦いを挑まれれば打って出ようとは考えていただろうが、あくまで目的は戦闘ではなく、策略にあったのだ。

1560(永禄3)年5月10日、今川軍は遠州井伊谷城主・井伊直盛を先鋒として出陣し、これに成人した松平元康も加わっている。12日、いよいよ今川義元本隊が府中の駿河城を出発した。13日に掛川へ到着したころ、先発隊はすでに天竜川まで達していた。今川軍は、14日に引馬(浜松)城、15日に吉田城、16日には岡崎城へと、順調に軍を進めていった。

籠城か、野戦か

一方、清洲城では軍議が行われ、織田家の重臣らは籠城の意見で一致した。信長の居城・清洲城は作りそのものが頑丈なうえ、東に五条川が流れ、その周りには岩倉城、那古野城、勝幡城、守山城、末森城など支城があるので、簡単には攻撃できない。戦いが長引けば、今川軍は兵糧や戦力に影響をきたすであろうし、籠城なら何とか持ちこたえられるとの見方が妥当であった。信長はこの席で何も発言せず、ただ押し黙って、交わされる論議を聞いていた。このとき、信長の腹では出撃と決まっていた。だが、諸将らが籠城と唱えるのが、かえって都合がよかったのだ。信長の出方を探っていた今川側は、織田家の台所奉行が兵糧をかき集めていることや、信長配下の鷲津を含める諸砦の人数が至って増えないことから、信長は籠城と決めこんでいるものと読んで、義元は先陣の人数を増やし、自らの本陣は5千に抑えた。

18日、今川軍は着々と駒を進め、ついには尾張国に入り沓掛城を略奪した。しかし信長は軍事会議を開くこともせず、家臣たちに何の司令も出さなかった。それどころか、緊迫した席で扇を広げ、「人生五十年　下天(げてん)のうちにくらぶれば　夢幻のごとくなり　ひとたび生(しょう)をえて　滅せぬもののあるべきか」と、好きな敦盛をうたい出した。唖然とした家臣らを尻目に、信長はさっさと部屋に引きこもって

寝てしまった。

信長は、兵力劣勢な織田軍が、2万に及ぶ大軍に突撃するのではあまりに無謀であり、今川義元が尾張を攻めるために軍を散り散りにするチャンスを狙うべきだと考えていた。つまり、数で打撃を与えるのではなく、大将一人に的を絞るのである。だが、これは千に一つ、あるかどうかも分からぬ賭けであった。「天が味方するかどうか」、信長は寝床の中でつぶやいた。

信長、出陣する

19日午前3時、今川側の松平元康が最前線となる鷲津砦や丸根砦にまで及んだという情報が入った。この包囲網を撃ち破られては、大高城はすでに落ちたと思っていい。これを聞いて、信長は初めて出陣命令を出した。あまりにも突然だったので、このとき信長に続いたのはたったの5騎だった。その後、籠城すると思わせている敵に動きを察知されないように、熱田神宮で兵が集るのを待った。信長が熱田神宮に集結したのは、自分にどれだけの家臣がついて来るかを試す意味もあった。しばらくすると、その数は3千近くになり、信長は兵を整えたのち、いよいよ三河方面に向かう。

一方、正午近くに今川義元が桶狭間から17,8丁(約2キロメートル)の距離にある田楽狭間に差しかかった。すでに鷲津砦や丸根砦が陥落したという朗報がもたらされ、義元の心にゆるみが生じていた。歩を進める途中、僧侶や神官、村長などによる餅米30俵のちまきと酒10樽の貢ぎものを差し出された。こうした者が、新しい支配者に媚びを売りに来ることはめずらしいことではない。向かう大高城は、先陣の元康が兵糧を入れ確保しているし、慌てて赴く必要もない。そこで、貢ぎものに気を良くした義元は、早くも祝杯を挙げようと言い出した。今川本軍は、大高城を目前にして、この場所に本陣を構え昼食を取ることにした

信長の家臣・梁田政綱は今川軍が尾張に入る前より、すべての動きを偵察しており、今川本陣が田楽狭間にて布陣した情報もいち早く聞き付け、即座に信長へ報告した。

田楽狭間は丘陵が重なり合い、普通の谷間より細長く、大部隊では身動きの取りづらい場所であった。たとえ丘の上に見張りをつけたとしても、相手からは前方の窪地と向こう側の丘が見えるだけで展望がきかない。信長は絶好のチャンスだと思った。

織田軍が今川勢の右背後に到着したのは正午頃であった。思った通り、丘の上からは本陣の様子が丸見えである。兵士らは酒に酔い、呑気に歌を歌っていた。すると、突然雲行きが怪しくなり、稲妻が走り豪雨となった。天が信長に味方をしたのだ。雨が止んだと同時、織田軍は今川勢に気づかれないまま一気に本陣に突撃した。

義元の最期

義元は、まさか織田勢が攻めてくるとは思っていないので、最初は味方の喧嘩か謀叛と思った。というのも、ふつう、戦いは時間を要するため午前中にしかけるのが常識で、信長が現れたのは午後2時というあり得ない時間帯だったからだ。しかし気づいたときにはすでに遅く、態勢を崩した今川軍勢はもはや蜘蛛の子を散らす有り様であった。不意を突かれた義元は、旗本に守られながら退去を命じた。それは意外な展開に動揺したからではなく、ごく当たり前の対応策として、ここは一旦退いて態勢を整えたほうが無難であると判断した結果であった。

しかし、それに追い付いた服部小平太が、義元に飛びかかり、槍を膝に突き刺した。義元がよろめいたところを、毛利新介がその首をはねた。大将を失った今川軍の兵士は、あっという間に諸国へ逃げ帰ってしまった。不運にも、義元が兵力の分散をしたために、本陣にて直接引き連れた兵士は5千人ほどしかおらず、そのほとんどが農民から構成された者たちで、実際に戦力になったのは、わ

ずか2千たらずであった。一方の織田軍は全員が戦闘員だったため、十分に互角の戦いができたのだ。戦国武将が戦場で討ち死にするというきわめて稀な、今川義元の最後であった。

徳川家康の独立

この知らせを大高城で聞いた元康(徳川家康)は、耳を疑った。昨日、元康が苦心して落城させたこの城は、織田領に侵入した前線基地で、義元が討たれた田楽狭間より西方にあたり、戦場から孤立していた。「海道一の弓取り」と呼ばれ、他国の大名から恐れられていた今川義元がいともあっさりと討ち死にとは信じがたいが、元康は信長と対立するのは得策ではないとすぐに悟った。こうして元康は、13年間の人質の身から解放され三河国に戻ることとなる。

余談だが、のちの家康がまだ竹千代と名乗っていた幼少のころ、河原で印字打ち(石合戦)を見物していた。5月5月の節句に子供たちの行事として、両軍に別れ石を投げ合って勝敗を競うというものだ。一方は3百人という多勢に対して、片方はその半数足らずで盛んに石を投げ合っていた。家臣たちは、多勢のほうが勝つと言ったが、竹千代は小勢の方が勝つと言った。家臣らがわけを聞くと、「数が多いと油断ができ、協力もしない。数が少ないと真剣に戦うので命中力もよく、統制も取れる」と説明し、家臣たちを驚かせた。結果、小勢側が勝った。石合戦と桶狭間では大小の差はあるが、信長も家康も、先見性や判断力にとんだ人物であった。

後年、両者はお互いの力を尊重し、協同して天下統一を果たそうと約束を交わす。つまり、どちらかが戦に巻きこまれた場合も必ず援助するというのものだ。この約束は、戦国時代にはめずらしく忠実に守られていく。

元康とは対照的に、桶狭間で義元が戦死したあとも信長に抵抗し続けた者がいる。鳴海城主・岡部元信である。彼は、義元の首と引き換えならば開城してもいいと言い張り、頑強な抵抗に手こずっていた信長はこれに応え、交換条件をかなえると、岡部はようやく駿付に引きあげて行った。

今川家の没落

最近の研究では、この桶狭間での戦いが奇襲ではなかったという説が浮き彫りになりつつある。それが「正面攻撃説」である。従来の定説では、信長は熱田神宮から善照寺砦に入り、そこから東に進んだのち山中を大迂回し、義元の背後にまわったとされていた。しかしそれは全くの誤解で、信長は善照寺から南へ移り、最短距離を進んで正面から突撃したというのだ。いくら正確な情報であっても、義元がいつまでも同じ場所に留まっているとは限らず、現実主義であった信長が、わざわざ遠回りまでして奇襲をしかけるとは考えられず、敵の居場所がわかった以上、一刻も早く向かう必要があったと思われる。むろん周辺は今川軍によって占領されていたし、相手にこちらの動きを察知されないはずがないため、隠密に今川軍の背後にまわることなど不可能であったのだ。

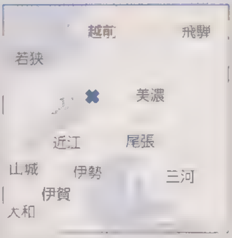
さらに、今川本陣が布陣した位置についても、実は田楽狭間ではなく、桶狭間山という丘陵上であったといわれている。いくらなんでも、不利な低地に陣を置くはずはなく、もっともこのあたりの土地は鳴海城を攻略してからはすでに今川領であり、地理にも明るかったはずである。いずれにしても、義元が信長に敗れたのは、籠城と思っていた信長が神速に出撃し、前陣からの報告が義元に届く直前に攻撃をしかけられたことにある。不意を突かれた今川軍は、緊急事態に対応する間もなく、簡単に大破してしまったのだ。桶狭間の戦い後、信長は自分の存在を全国にアピールし、一躍戦国時代の主役へとおどり出るが、それに対し敗者の今川氏は、後継の氏真に覇気がとぼしく、武田氏と徳川氏に領地を取られて、滅亡する。

怨恨を結んだ正面決戦

姉川の戦い

BATTLE OF ANEGAWA

日時		1570（元亀元）年6月
戦場		近江（滋賀県）姉川
参戦武将	【織田軍】	織田信長、坂井政尚、池田恒興、羽柴秀吉、柴田勝家、森可成、佐久間信盛、丹羽長秀、氏家卜全、安藤守就、稲葉一鉄
	【徳川軍】	徳川家康、酒井忠次、小笠原長忠、石川数正、榊原康政
	【朝倉軍】	朝倉景紀、朝倉景健、前波新八、真柄直隆、魚住景固
	【浅井軍】	浅井長政、浅井政澄、磯野員昌、阿閉貞征、新庄直頼、遠藤直経



朝倉と織田の間で

1570（元亀元）年6月28日、近江の姉川（滋賀県長浜市）を挟んで、織田軍は援軍の徳川軍とともに、浅井・朝倉軍と向かい合った。それは、大軍同士が正面から衝突するという、いかにも戦国時代らしい合戦のように思える。しかし、見通しのよい平地での戦闘は、軍勢の数が勝負の決め手となる反面、勝者も大きく痛手を被るため、こうした大規模な正面衝突はめずらしい例だった。だが、天下統一をめざす信長にとって、避けては通れない道であった。姉川の戦いは、裏切りと怒りから生まれた、信長と浅井・朝倉との因縁の戦いである。

1567（永禄10）年、美濃（岐阜県）を手中に治めた信長は、いよいよ天下統一への基盤を固めようと動き始めていた。そのためには、まず上洛し、天下に号令する大義名分を得る必要がある。そこで、美濃と京の交通路にあたる近江（滋賀県）を確保するために、北近江の浅井長政と同盟を組むことにした。長政に妹のお市との縁談を申し出たのである。

しかしこの話は滞ったままになっていた。その背景には、朝倉義景の存在があった。浅井氏は朝倉氏に長年の間、従属しており、一方、朝倉家と織田家は代々からの犬猿の仲にある。そもそも織田家の主家は、越前・若狭・尾張・遠江の守護職・斯波氏で、織田家はその一つ尾張を任された守護代であった。しかし、同じように朝倉氏も斯波氏の家臣であり、尾張での織田家の勃興よりも早い時代に越前守護職になった古い家柄である。

朝倉氏からしては、織田家の家格はれっきとした格下である。まったく無関係の家同士なら、割り切ってつきあうことも可能だが、元の主人が同じで、いわば同僚であったことから、その意識が強い。とすれば、両家が不仲であるのは当然である。織田氏、浅井氏、朝倉氏によるこうした複雑な関係は、平穏無事には収まりそうになかった。

お市の方、輿入れ

そんな折り、信長の居城・岐阜城に一風変わった客人が訪れた。信長の正室・お濃の従兄にあたる、明智光秀である。光秀は明智城で生まれ育ったが、斎藤氏から城を追いやられ、諸国をさすらったのち、越前（福井県）の戦国大名・朝倉義景に仕えた。

それから3年後、13代将軍足利義輝が三好長慶と松永久秀に討たれたため、義輝の弟である義昭は、細川藤孝の案内で越前に

身を寄せた。義昭は、早くから仏門に入り覚慶と名乗っていたが、兄に代わって将軍職を取り戻そうと、還俗して、義景に支援を求めた。

しかし、腰の重い義景はなかなか動こうとせず、それどころか戦よりも歌舞や酒宴を好み、戦国武将らしからぬありさまだった。藤孝とともに義昭擁立を担っていた光秀は、煮え切らない義景を見限り、信長へ持ちかけたのだった。信長からしてみれば、棚からぼた餅である。浅井長政は、信長が義昭を奉ずるのを知ると、お市との縁談をすぐにまとめる姿勢をとりはじめた。なぜ、こうもすんなりと手の平を返したかというと、当時、実質的な征夷大将軍の権威がなくなっていたとはいえ、天皇のお膝元にある武家政権の立党者という、その官位そのものが、重要視されていたからなのだ。

信長の上洛

1568（永禄11）年9月、信長は早くも義昭を奉じて、近江路を進軍して上洛を果たす。このとき、浅井軍も加わり、先鋒を務めている。途中、南近江の六角氏が抵抗を示したがこれをわずか4日間で蹴散らし、これで京に上るのに何の障害もなくなった。

念願の第15代征夷大将軍に就任した義昭は、信長に副将軍に就任するよう要請するが、信長はこれを断っている。副将軍になれば、義昭と主従関係になる。信長は自ら政治の実権者だという意識が高く、義昭を将軍職に就かせたのは、他の大名達の動きを制御するためにあった。そのため、信長と義昭の関係は次第にぎくしゃくし始め、ついには対立するようになる。

それを決定づけたのが、翌年の1569（永禄12）年、信長が義昭に承認させた、「殿中の掟」という五箇条の条書である。その内容は、「諸大名に出す手紙には、信長の副状をつけなければならない」「信長の一存で誰でも処罰していい」といった義昭の執行権や行動を制限するものだった。堪りかねた義昭は、越前の朝倉義景や甲斐の武田信玄などの、信長を心良く思わない勢力に密書を送り、反信長派を形成しその黒幕として働きかけ始めた。

信長、越前攻めへ

1570（元亀元）年4月、朝廷から皇居の修理や皇室領地復興を命じられた信長は、しばらく京都に滞在することとなる。そのとき、信長は諸大名に、「皇居修理などの協力を要するため上洛せよ」という命令を出した。しかし、朝倉義景は応じなかった。

ここで命令に従えば、信長の支配下であることを認めることになる。信長は、朝倉氏との溝は永遠に埋まらないと判断し、一挙に討伐に踏み切る決断をする。そうと決まれば、信長は行動が速い。同月20日、すぐに京を発って越前へ向かった。途中、徳川家康の援軍と近江の坂本城で合流したのち、ただちに朝倉氏の支城である手筒山城、金ヶ崎城を陥落して、7日目には義景の居城である一乗谷城へ攻め寄せた。ところが、思わぬ敵軍が信長の背後に迫っていた。浅井長政の軍勢である。信長はこの知らせをなかなか信じなかったという。なぜなら、長政には妹のお市が嫁いでおり、織田家とは信頼の厚い同盟関係を結んでいる間柄だったからだ。

長政は出撃を決意する直前まで、内心は揺れていた。実のところ、盟友である朝倉氏と、義兄である信長の、どちらも敵として戦いたくない相手である。だからといって、その両家の争いを黙って見ているわけにもいかない。長政は、力量や武力からいって、信長に味方するべきだと主張するが、父・久政を含める諸将たちは、浅井氏が戦国大名になれたのも、朝倉氏の支援のおかげであり、その恩義を忘れてはならないと主張した。そもそも、長政が信長と同盟を結ぶ条件とした、「浅井氏に無断で朝倉氏を攻めない」という約束を破ったのは信長であり、浅井氏が激怒して反旗を翻しても文句は言えないのだ。結果、浅井氏は挙兵し、朝倉氏の援軍として立ち上がったのだ。

織田軍は両軍の挟み撃ちになれば、袋のネズミであり、完全に動きを遮断されることになる。28日、信長は越前攻略を断念し、身一つで今日へ逃げ帰った。

金ヶ崎のしんがり

このとき、しんがりを務めたのが、木下藤吉郎（のちの豊臣秀吉）である。しんがりとは、劣勢が明らかな状態で、主君の退去を助ける役目である。当時の攻撃手段として、打撃の多い正面衝突を避ける分、こういった敵の移動中を徹底的に狙うのが常識だった。このときも例外ではなく、朝倉軍は、織田軍のしんがりをしつこく追いかけ回した。藤吉郎の軍勢はわずか5百程度だったが、弓矢と鉄砲を交互に打ち浴びせながらの戦法で、見事なチームワークを見せつけた。そのため、朝倉軍の激しい追撃からも無事撤退することに成功した。信長はこのときの編成を応用し、のちの長篠の戦いにも鉄砲隊の編成を、より強力なものとして用いていくことになる

姉川の血戦へ

同年6月19日、信長は岐阜城から出陣、浅井長政の居城、小谷城攻めを開始した。しかし、小谷城は標高459メートルの山上に築かれており、城郭は丘陵や断崖絶壁などの要害で囲まれ、難攻不落の要害であった。長政の兵力は8千、対する織田軍は2万3千余、さらに徳川家康5千が援軍に駆けつけた。このように劣勢の長政が、やすやすと城の外に出てくるはずがない。

何とか短期で雌雄を決する野戦に持ちこもうと、信長は城下を焼いたり挑発を試みるが、一向に動きを見せなかった。そこで、信長は、南側にある横山城を攻めることにした。

この城は浅井氏の前線基地でもあるほか、近江から朝倉氏の越前を繋ぐ要路となるため、否応なく長政は出撃して来るはずである。

27日夜、信長の誘き寄せ作戦にはまった浅井軍は、横山城の近くを流れる姉川の北岸に陣を取った。そこに朝倉氏の援軍約1万が到着した。両者は、姉川を挟んで向かい合う形となり、このとき、浅井・朝倉軍勢1万8千、織田・徳川軍2万8千である。

夜明けとともに、戦いの火ぶたは切って落とされた。織田軍の陣容は、第一陣が坂井政尚、以下、池田恒興、羽柴秀吉、柴田勝家、森可成、佐久間信盛で各3千。信長本

陣は5千で、これを13段にわけて備えた。ほかに横山城の抑えと予備を兼ねて丹羽長秀3千に安藤守就・氏家卜全各1千。

徳川勢は、酒井忠次・小笠原長忠・石川数正各1千に家康本隊2千、これに稲葉一鉄1千が遊撃としてついた。

浅井軍は、先鋒の磯野員昌1千5百、浅井昌澄と阿閉貞秀、新庄直頼が各1千で、長政の本隊が3千5百。朝倉軍は兵1万を朝倉景紀3千、前波新八3千、朝倉景健4千に分けている。

徳川勢は朝倉勢と、織田勢は浅井勢と衝突を開始した。平地での戦闘は数の少ない側が不利となるため、浅井勢が苦戦と思われたが、もはや後がないという思いと、劣勢をカバーしようとする団結力からか、士気は高く、倍以上の織田軍勢に優勢な戦力を発揮した。

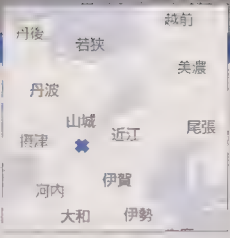
浅井の先鋒・磯野員昌は、織田軍の第1部隊、第2部隊を突破し、羽柴秀吉、柴田勝家の隊をも蹴散らし、織田軍の13段構えの11段まで崩したのである。さらに、信長の本陣をめざして進撃を続けた。一方、2倍の朝倉勢に対し苦戦していた徳川勢は、榊原康政が横槍をいれると戦況の逆転に成功した。朝倉軍が逃げ始めると、手の空いた稲葉一鉄隊が浅井軍の側背から攻撃を開始した。さらに、氏家卜全、安藤守就らが浅井勢の側面から攻撃をしかけた。三方から攻められる形となった浅井勢は、たまらず、潰走をはじめた。

浅井・朝倉軍の死者は1千8百、織田・徳川軍は8百を数え、姉川は死者であふれ、血で染まったといわれている。こうして、浅井勢は小谷城に敗走し、織田・徳川連合軍の圧勝で決着が着いたのだった。

明智光秀、怨念の逆襲

本能寺の変

HONNOUJI INCIDENT



日時	1582（天正10）年6月	
戦場	山城（京都府）本能寺	
参戦武将	【織田軍】	織田信長、森蘭丸、森力丸、森坊丸、小河愛平、高橋虎松、菅屋角蔵、魚住勝七、金森義入、武田喜太郎、狩野又九郎、織田信忠、村井貞勝
	【明智軍】	明智光秀、明智秀満、明智茂朝、津田信春、斎藤利三、松田政近

是非に及ばず

1582（天正10）年6月2日、刻は暁。水色に染め抜かれた桔梗の旗印が、信長が京都で宿所としていた本能寺の周辺をぐるりと取り囲んだ。本来ならば秀吉の援軍として中国路を進んでいるはずの光秀の軍勢、1万3千である。

空が白んできたころ、外のようすがにわかに騒々しくなったのに、宿直していた森蘭丸が気づいた。だが信長は、周囲の異変に気づくのが遅れた。前夜、堂上公卿衆を招いての盛大な茶会を催し、上機嫌だった信長は、寝所に入ってからも普段たしなまない酒を呑み夜更かしをしていたからだ。

森蘭丸が信長に異変を告げたそのとき、土居の外から鬨の声が挙がった。光秀の謀叛と聞いた信長は「是非に及ばず(やむを得ない)」と言葉を吐き捨て、弓を手に白綾の寝巻姿のままで広縁に出た。

寝込みを襲われた信長

信長ほどの人物が、このときに限って最大のミスを犯していた。羽柴秀吉や柴田勝家をはじめとする有力な軍勢のほとんどが他国で交戦中であり、本能寺には、小姓など戦闘できる手勢がわずか70名ほどしかいなかったのである。状況が絶望的なのは明らかだった。

だが実のところ、光秀の重臣を除く将兵たちは敵の正体を知らされていなかった。門前の警備にあたっていた守衛を蹴散らして院内に押し入りながらも、この敷居の奥に潜む相手が、まさか戦国の覇者、織田信長であるとは夢にも思っていなかった。もし事前に知らされていたら、多くの兵が後難を恐れて逃げ出していたかもしれない。

信長は、本能寺を囲む明智の兵に向けて矢継ぎ早に弓を放った。ところが、三矢ほど放ったところで弦が切れてしまった。信長は槍に持ち替え、侵入した兵と戦ったが、太股に深手を負った。そこへ信長の前に、襷をかけ、薙刀を持った正室・お濃が現れた。信長は驚き、早く落ちるよう促すが、お濃は女人の身でありながら敵勢のなかへ進み出て、大いに薙刀を振るったという話がある。その姿を哀れに思った信長は、奥の間に引き戻って火を放ち、ついに自刃して果てたのであった。

一方、異変を知った信長の嫡男で、すでに織田家の家督を継いでいた信忠は、宿所であった妙覚寺から、手持ちの兵5百を率いて出陣するが、光秀の大軍に押さえこまれたため二条城に逃げこんだ。それでも、信忠は何とか本能寺に向かおうと抵抗を試みるが、圧倒的な兵力差になすすべもなく、信忠自身も無念にも自害することとなる。

しかしどういうわけか、本能寺から信長

の死体は見つからなかった。そのときの火事があまりに大きかったため、信長がどのように死んだのかはわかっておらず、生きながら焼死したとも、火薬を使い自爆したともいわれる。とはいえ、その声だけでなく、その名だけで万人を戦慄させていた人物が、毛髪といわず骨といわず灰燼に帰せざるものすべて、地上に残さず消えてしまった信長の死に様は、まさに信長の人生そのものが、戦国の世に起きた夢幻のごとくであったといえよう。

謀叛の真意は

天下を馳せる織田信長が、一家臣であった明智光秀に討たれた本能寺の変は、日本人ならば誰もが知っている大事件であるが、その真相についてはいまだに解明されていない。

一般的には、信長の行為に怨恨と不安を抱いた光秀の突発的な行動とする説がある。また、信長の天下に不安を覚えている羽柴秀吉と徳川家康による共謀説もある。

さらに諸説の一つに、信長の茶頭を勤めた三宗匠の一人、津田宗及が謀叛をけしかけたいう説がある。信長が天下統一を成し遂げれば、次は天皇の座が危うくなるのではないかとささやかれていた。

信長は、武田氏討伐後に征夷大将軍任官を勧めた公家を追い返している。そして安土に総見寺を建て、自身を現人神として崇めよと高札を掲げている。公家たちにすれば、天皇に取って変わる意志が信長にあると考えるのはムリもないことである。

公家たちに相談を持ちかけられた宗及は、交友が深い光秀にこのことを打ち明け、さらには実行犯に仕立てあげた、というのである。宗及は変の前夜、家康の接待役として堺にいたため、本来ならば出席すべき堂上公卿との茶会に出席していない。すべての事態を承知していたからではあるまいか。

森蘭丸スパイ説

もう一つ興味深い説としては、森蘭丸スパイ説がある。中国に「傾国」という策略がある。敵国に容姿端麗のスパイを潜りこませ、敵将を腑抜けにさせる。戦わずして国を滅ぼす、肉体を蝕む癌細胞の様なものである。森蘭がその傾国のスパイだったというのだ。信長に忠誠を誓ったとされる森蘭丸がスパイとは少々考えにくいが、時代は肉親でさえ血で争う戦国の世である。思わぬところに敵が潜んでいてもおかしくはない。

事実、信長は本能寺の変が起こる数年前から、かつての野心を失いつつあった。戦さは家臣任せとなり、以前の信長とは思われぬような軽率な行動が目立ちはじめる。数年前といえば、森蘭丸が小姓となったころだ。その異常なまでの寵愛ぶりは、傾国の策にはまったといえなくもない。よくよく考えてみれば、とくに戦功もなかった森蘭丸が岩村5万石の大名に出世したこと事自体が異例なのである。

では、誰が森蘭丸を送りこんだのか。森家はかつて美濃の斎藤道三に滅ぼされた土岐明智家の家臣であったという伝承がある。そして光秀も土岐明智家の流れだという。そう、森蘭丸と光秀には共通の接点があったのだ。実のところ、森蘭丸が森可成の子だったのも定かではない。彼をはじめ小姓として取り立てられた坊丸、力丸の森三兄弟は突如として歴史上に登場する。兄で「鬼武蔵」と呼ばれた森長可とは10歳近くも離れており、容姿や性格などもまったく異なっていたそうだ。

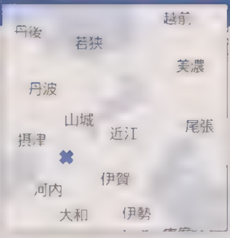
しかし、森蘭丸は本能寺の変で信長とともに果てた。光秀による口封じと考えられなくもない。文字通り、真実は闇の中に葬られたのであった。

反転した秀吉、天王山を制す

山崎の戦い

BATTLE OF YAMAZAKI

日時		1582（天正10）年6月
戦場		山城（京都府）山崎
参戦武将	【羽柴軍】	羽柴秀吉、羽柴秀長、池田恒興、黒田官兵衛、高山重友、竹中半兵衛、中川清秀、中村一氏、蜂須賀小六、堀秀政、織田信孝、丹羽長秀、田中吉政、加藤清正、山内一豊、仙石秀久
	【明智軍】	明智光秀、明智茂朝、明智光近、津田信春、斎藤利三、藤田行政、伊勢貞興、村上清国、阿閉貞征、松田政近、並河易家



本能寺の変

1582（天正10）年、織田信長は天下統一への道のりを着々と進んでいた。織田配下の武将、柴田勝家は北陸で上杉景勝と戦い、滝川一益は関東管領となって北条氏と対峙し、羽柴秀吉は中国で毛利方の城を攻め、丹羽長秀は四国侵攻の準備をすすめていた。

京に上洛を果たしたばかりのころは、周囲を敵対勢力に囲まれていたのが、このころには日本の3分の1を版図におさめ、配下の有力武将を多方面に展開して戦わせるほど、信長の勢力は強大になっていたのである。

大軍団を各地に派遣していたため、信長の手元には大きな兵力はなく、わずかな手勢とともに京に滞在していたが、それが不用心でもなく何の心配もないほど、信長の勢力は強大であった。

誰も何も警戒していないところに、「本能寺の変」が起こった。京都・本能寺に滞在していた織田信長が、臣下の明智光秀の謀叛に遭い、殺されてしまったのだ。

明智光秀は、織田軍団の中でも一、二を争う実力者である。流浪の身から信長に取り立てられたうえ、信長に実力を認められてたちまち出世していった者。まさか信長を裏切って、弑逆するとは誰しも予想していなかった。

光秀が信長を裏切った理由は、さまざまな説が取り沙汰されているが、未だに不明である。信長の厳しい扱いに耐えかねた末の暴発、旧来の権威を徹底的に否定する信長に反発したため、信長の命令により人質に取られていた母親が処刑された恨み、朝廷筋からのそそのかしに応じたため、果てはストレスによる心神耗弱まで、色々な理由が挙げられている。

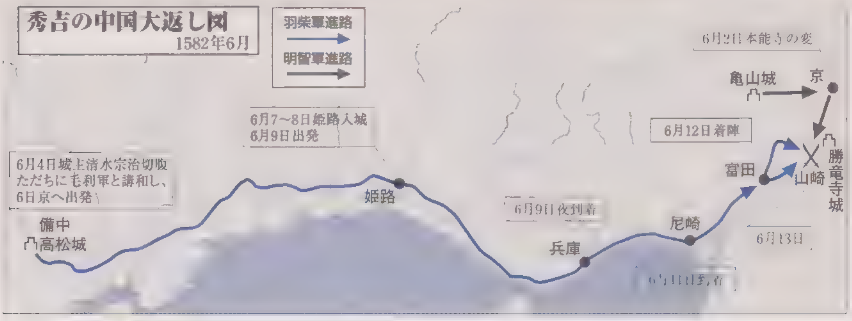
しかし、織田軍団の戦略的な空白をついて、一気に信長暗殺に成功したのは、光秀の手腕があればこそだろう。

秀吉の中国大返し

羽柴秀吉は、前記の通り中国地方の山陽道で毛利氏と対峙していた。毛利方の備前国・高松城を攻めている最中であった。突貫工事で長大な堤を築き、川の水を引きこんで、高松城を水没させるという「水攻め」である。

秀吉は、城主・清水宗治1人の切腹により城兵の命は保証する、という条件で降伏を勧告していた。城方も条件を飲んで開城、降伏する寸前であった。

そこへ、秀吉方の陣地に密書を持った使者が紛れこみ、兵に捕らえられた。使者が持っていた密書は、差出人が明智光秀、宛先は毛利氏である。光秀が信長を討ち取ったことと、毛利氏に自分への協力を願うことなど



が書かれていた。

信長の死を知った秀吉は、驚愕し大いに嘆き悲しんだ。信長は、小者だった木下藤吉郎を猿、猿、と呼んで可愛がり、実力を買って出世させてくれた大恩人である。また信長の徹底した実力主義がなければ、秀吉はここまでの身分に昇ることはとうてい望めなかっただろう。まさに信長あっての秀吉なのである。だが、顔では号泣しながら、心の底では次に何をすべきかを考え、直ちに行動に移したのは、秀吉の非凡なところである。

秀吉は密書の内容を堅く秘密にし、高松城の開城を急いだ。それにしても、光秀が毛利方に送ったはずの密書が、毛利方に渡らず秀吉の手に落ちたという秀吉の強運には驚かされる。

高松城の開城が済んだ6月6日、秀吉は全軍の移動を開始した。最初は毛利方に怪しまれないよう普通に行軍し、序々に速度を上げて全軍が駆け足で東に向かった。高松城から播磨国・姫路城まで約90キロメートルを、ほぼ一昼夜で踏破した。兵1万6千の行軍としては、驚異的な速度である。のちに「中国大返し」と呼ばれる快挙であった。快挙実現の影には、街道沿いの至るところに兵のための大量の食事を用意させたり、駆け足の連続で疲れきった兵士たちに舟で先回りした秀吉自ら声をかけて褒美を与える約束をして士気を鼓舞したり、という周到な用意を急ぎ行っていた、という事実がある。信長の死を悲しみながら、秀吉の打つ手に抜かりはなかったのだ。

足場が固まらない光秀

信長を討ち取った明智光秀は、周辺の諸大名に自分への協力を要請する手紙を出していた。信長は天下統一にあたって、比叡山の焼討ちに代表される旧来の勢力を否定する行動を取ってきた。それを恐れた旧勢力や、信長に脅かされていた諸大名の協力が得られることを光秀は計算していただろう。

また信長配下の有力武将は、すぐに動くことができないはずだった。柴田勝家は謙信亡き後とはいえ強敵の上杉氏と交戦中、滝川一益は関東一円を勢力下に置く北条氏と対峙して苦戦、丹羽長秀は海を渡っての四国侵攻準備で兵を整えるのに時間がかかり、羽柴秀吉は中国の雄・毛利氏と対峙し城攻めの最中、という状況で、光秀が京を中心に自らの勢力を整える時間はあるはずだった。

しかし、中国大返しにより自らの軍団とともに戻った秀吉が、早くも姫路城を出陣。秀吉は、信長は生きている、裏切り者の光秀を倒すため自分に協力してほしい、という内容の手紙を周辺の武将たちに出していた。

信長を討ち取った自分に信長の反対勢力が次々に協力を申し出る、という光秀の目論見は大きく外れた。信長も非道な仕打ちの多い人間だったが、光秀は主君殺しの大反逆者であり、積極的な協力はやはりはばかられ、

誰もが様子見に入ったのである。また、光秀とはとくに親しい武将、細川藤孝や筒井順慶までもが、味方につくことはなかった。

天王山の戦い

6月13日、秀吉軍と光秀軍は摂津と山城の国境、淀川沿いの交通の要衝である山崎で決戦に臨んだ。秀吉が高松城を出発してから、わずか1週間後のことである。

山崎の地には、天王山という山があったため天王山の戦いとも言われ、この後、決定的な戦いを天王山と呼ぶようになる。ちなみに天王山は標高270メートルの小山である。

秀吉のもとに集まった諸大名の軍勢は約2万6千、主君信長を討った逆賊光秀を討ち果たそうと意気が上がっていた。一方、光秀の軍勢は、ほぼ旧足利幕府衆と家臣のみの約1万6千で、戦力的に大差がついていた。

秀吉方の先鋒は、近辺の小大名である高山右近と中川清秀である。その中川清秀が天王山を占領。山崎付近で最も高い地形を制されては、戦いは不利になる。光秀方は天王山の奪回を試みて攻めかかるが、逆襲されて大損害を受けてしまう。光秀方は総崩れとなり、戦いは2時間程で決着がついた。

戦いに敗れた光秀は、わずかな手勢とともに逃げる途中、落ち武者狩りの土民の群れに襲われて命を落としたと言われる。本能寺の信長を討ち取って以来、わずか2週間足らずの天下であった。

覇王の後継者

信長の敵討ちに成功したことで、織田家中における秀吉の立場は、これ以上なく強まった。事実上、信長の後継者となったのである。秀吉も充分意識していたようで、戦いの終了直後、兵を休めていた先鋒の中川清秀に向かって「瀬兵衛、骨折り！」（瀬兵衛、ご苦労であった）と声をかけた。本来なら同輩である中川瀬兵衛清秀に対しまるで主君であるかのように見下した態度に、清秀は大いに腹を立てたという。

その後、信長の後継者問題を話し合った清洲会議でも、秀吉の発言力は最も強かった。

信長の後継者は、織田家臣筆頭の柴田勝家が推す信長の三男・信孝ではなく、秀吉が主張する信長の長男・信忠の息子、三法師に決まる。三法師（のちの織田秀信）はわずか3歳の幼児だったため、信長次男の信雄を後見人とするという、これまた秀吉の主張が通った。

いずれにせよ、秀吉の傀儡に過ぎず、秀吉が天下統一への道を進むことになるのだった。

戦国コラム⑤

神君・伊賀越え

**本能寺の変で、危機に陥ったのは信長だけではない。
ちょうど上洛していた信長の同盟者の徳川家康も生命の危機にさらされたのである。**

「本能寺の変」が起こった時、徳川家康は10名ほどの供の者と堺の町に遊びに来ていた。武田氏との厳しい戦いを終えた直後で、元武田家家臣、穴山信君とともに織田信長の饗応を受けるためである。武田信玄とも縁続きであった信君の内応は、武田氏滅亡に大きく貢献した。

織田信長の死を聞いた家康は、大いに取り乱し、本能寺に行って信長の後を追って切腹すると口走った、とも言われる。家康をしてそう言わせたのは、三河の小大名として独立して以来同盟を結んできた関係か、10名ほどの供の者と明智光秀の勢力下を通って三河に帰ることは不可能と思っての絶望からか。それでも気を取り直し、光秀の勢力が及ぶ土地を避けて三河に帰るため、伊賀の山中を越えることになった。しかし、伊賀は小国ながら忍びの者を多く出して各大名に召抱えられるなど独立の気風が高く、天下人の信長にも逆らった土地である。信長との関係が親しかった家康が、無事に通過できるとは思えなかった。家康の伊賀越えに大きな役割を果たしたのが、伊賀の出身である服部半蔵である。山中の道案内、家康の身辺警護、何より自らの地縁人脈をフルに活用して、家康の無事な通過を根回しした。

また、堺の大商人・茶屋四郎次郎もいち早く協力に参じた。大金を持参して家康に同行、行く先々で、家康殿の心遣いである、と地元の郷士・百姓に金を渡して、通行の無事を図った。

家康一行は苦労の末、伊賀の山中を抜けて伊勢国に出て、船に乗って無事三河への帰還を果たした。

信長亡き後の後継者争いは、光秀討伐を果たした羽柴秀吉が勝利を収めたが、信長の有力な同盟者であった徳川家康にも、その資格は充分にあった。しかし、運悪くわずかな供の者と堺にいたため、光秀との戦いに臨むどころか、生命の危険にさらされてしまった。天下を手にするのは、秀吉に先を越されて20年ほど遅くなってしまうのだが、危険な伊賀越えを果たして無事に三河に帰ることができたのは、やはり幸運だと言えよう。

家康に同行していた穴山信君は、途中で家康一行とはぐれ、土民に討ち取られて命を落としてしまった。猜疑心の強い信君は家康たちとは別行動をとったとも、家康と間違われて討ち取られたとも言われている。

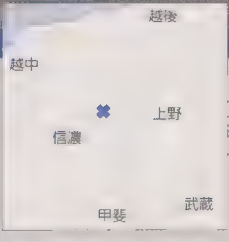
伊賀越えに大きな功労があった服部半蔵は、この後家康に重く用いられることになる。江戸幕府成立後は、公儀お庭番として幕府の諜報活動を一手に引き受けた。江戸城下に屋敷を与えられ、屋敷傍の城門は半蔵門と名付けられた。現在では、地下鉄の駅名にその名を残している。

真田昌幸の鬼謀、徳川軍を追い返す

上田城攻防戦

BATTLE AT UEDA CASTLE

日時		1585、1600年
戦場		信濃（長野県）上田
参戦武将	【真田軍】	真田昌幸、真田信之、真田幸村、矢沢頼綱、矢沢頼貞、唐沢玄蕃、鈴木重則、鎌原重春、横谷幸重、大熊五郎左衛門
	【徳川軍】	大久保忠世、井伊直政、大久保忠佐、鳥居元忠、小笠原長忠、三枝虎吉、屋代勝永、諏訪頼忠、徳川秀忠、榊原康政、本多正信



第一次上田合戦（神川合戦）

1582（天正10）年、真田昌幸は長年仕えてきた武田氏の滅亡により、主君を失ってしまった。真田家と領地を守るため、必死に動かなければならなかった。

武田を滅ぼした織田信長も「本能寺の変」で命を落とすと、織田が押さえた旧武田領の甲斐・信濃は、徳川家康、上杉景勝、北条氏直の三者による争奪戦の舞台となった。北信濃と上野の沼田にまたがる真田領は、徳川、上杉、北条の三者の領地に接する位置にあったため、生き残りのための判断と行動は複雑になった。昌幸はこの年だけで、織田、北条、徳川と主君を変えたのである。

翌1583（天正11）年、昌幸は千曲川沿いに上田城を造り、領地の守りを固めた。

家康は羽柴秀吉と天下の覇権をめぐり争っていたが、背後を安全にするため北条とは講和を結んだ。その条件として、争奪戦を繰り広げた旧武田領の分割を取り決めたが、沼田は北条領とされ、昌幸は沼田の地を北条方へ引き渡すよう家康から命じられた。

だが昌幸は、沼田は自力で勝ち取った領地であり引き渡すことはできない、と家康の命令を突っぱね、上杉景勝の配下へと付いたのである。命令を拒絶し上杉方へくらがえした昌幸に激怒した家康は、鳥居元忠、平岩親吉、大久保忠世らに7千の兵を与え、上田城攻略を命じた。

真田方の兵は、1千2百。他に農民3千を招集して、城の四方に伏兵として置いた。兵力で劣るため、城下町の至るところに柵を設けるなど様々な備えを施し、城の東南の神川の前に息子・真田信之、幸村が率いる兵2百を置いて、徳川方を待ち構えた。

徳川方が、神川を渡って攻めかかると、真田方の兵2百はたちまち押しまくられて城内へと退却した。勢いに乗った徳川方は城下へと突入した。

しかし、信之、幸村は父昌幸の命令通り動いただけ、つまり徳川方を誘き寄せる囮の役割を果たしたのだ。徳川方を城下深く誘いこんだ昌幸は、城内の兵を率い打って出て、城下の町家に火を放った。同時に逃げたふりをしていた信之、幸村の部隊も反撃、さらに伏兵の農民3千も四方からうちかかった。徳川方は大混乱に陥り、総崩れとなった。

退却した徳川方は、追撃を受けて神川まで追い立てられた。運悪く増水中だった神川に突き落とされて、多くの兵が溺死したという。

真田方の死傷者が40程度に対し、徳川方の死傷者は1千を超えるという、大惨敗であった　強豪の徳川軍に小勢で痛烈な一撃を

与えた真田昌幸は、この戦いで天下にその名を轟かせたのである。

第二次上田合戦

1598(慶長3)年、天下人・豊臣秀吉が死んだ。秀吉死後の覇権は、これを我が物しようとする徳川家康と、豊臣家を守ろうとする石田三成の間で争われた。

1600(慶長5)年、三成の挙兵を誘うため、家康は上杉景勝討伐の兵を起こし、諸大名を率いて会津へと向かった。

家康に従って真田昌幸、信之、幸村父子も討伐軍に加わっていたが、家康の狙い通り三成は上方で兵を挙げた。家康の豊臣家をないがしろにする振る舞いを非難し、秀吉の恩に報い後継者・秀頼のために家康と戦え、と諸大名に呼びかけたのである。

真田父子は、家康と三成どちらに付くべきかを話し合った。信之は天下人に最も近い家康に付くべきと主張し、昌幸はこの機に乗じてさらに家を大きくすべきと主張。信之は家康の重臣・本多忠勝の娘を妻とし、幸村は三成の盟友・大谷吉継の娘を妻としていた、という事情もあって、昌幸、幸村は三成方、信之は家康方に付くことに決まった。

昌幸は、両方に分かれればどちらが勝っても真田家は残る、と言って決断したとも伝えられている。

昌幸・幸村父子は、直ちに上田城に向かい籠城の準備を整えた。

石田三成率いる西軍討伐のため、家康は東軍主力を率い東海道を西に向かった。同時に、家康の嫡子・徳川秀忠は3万8千の大軍とともに東山道を西に向かった。秀忠に従うのは、本多正信、榊原康政、本多忠政ら徳川家の名だたる武将たちで信之も加わっていた

東山道を西に向かう秀忠は、小諸城に入ると、近隣の上田城を通過する際、城攻めにこだわった。

本多正信が、味方は大軍であり城兵が打って出ることはなく、放っておいても問題はない。小城一つにかかわるより、三成との決戦に臨むことが大事である。と諌めたにもかかわらず、秀忠は城を落とす決意を変えなかった。かつて徳川軍が惨敗した汚名を、自らの手で晴らそうとしたのか。

まず、信之と本多忠政を使者として降伏を勧告した。だが昌幸は返事を引き延ばして、降伏しようとはしなかった。

秀忠は上田城攻撃を決意し、小諸城を出撃。信之には支城の戸石城攻撃を命じた。戸石城は幸村が守っていたが、一族同士の戦いを避けて城から撤退した。

秀忠本隊が上田城下に近づくと、こちらでは真田方も必死の抵抗を見せた。接戦となったが多勢に無勢、やがて真田方は城内へ撤退。徳川方は勢いづいて追撃し、先鋒隊と後続の隊が離れた。そこへ城門を開いて、城内の兵が攻撃開始、徳川方の先鋒は崩れた。そこへ城内から幸村の隊が打って出て、秀忠の本陣を脅かした。さらに、上田城東方の虚空蔵山から伏兵が打ちかかると、徳川方は全面崩壊。大損害を受けた秀忠は、小諸城へと撤退した。

上田城攻めに1週間余りを費やし、何ら得るところがなかった秀忠は、攻略をあきらめて西に向かった。

結局、秀忠の大軍は関ヶ原の戦いに間に合わず、西軍としての昌幸・幸村親子は、戦略的にも大勝利を収めたのである。

真田昌幸は、上田城において二度にわたり徳川家に苦汁をなめさせたのであった。

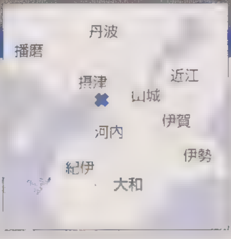
関ヶ原の戦いは、肝心の三成が敗れたため西軍側の武将には厳しい処罰が待っていた。秀忠の大軍を足止めし決戦に間に合わせなかった昌幸・幸村親子の死罪は免れぬはずだったが、信之が自分の戦功による恩賞と引き換えに助命を願い出た。信之の必死の働きにより、昌幸・幸村父子は高野山への流罪となったのである。

戦国の終焉

大坂夏の陣

BATTLE OF OSAKA CASTLE

日時		1615（慶長20）年5月
戦場		摂津（大阪府）大坂城
参戦武将	【徳川方】	井伊直孝、伊達政宗、上杉景勝、片桐且元、加藤嘉明、坂崎直盛、藤堂高虎、徳川家康、徳川秀忠、細川忠興、本多忠政、前田利常、松平忠輝、松平忠直
	【豊臣方】	豊臣秀頼、大野治長、木村重成、後藤又兵衛、真田幸村、薄田兼相、長宗我部盛親、塙団右衛門、毛利勝永、明石全登



避けられない対立

戦国時代の総決算といわれる大坂夏の陣が起きたのは、徳川家康が幕府を開いてから12年後となる1615（慶長20）年5月6日から7日にかけてのことである。

家康が覇権を確立した関ヶ原の戦いは、豊臣秀吉の遺児秀頼をうしろ盾にして政権を自分のものにしようとした石田三成を倒す、という名目の戦いであったため、家康は秀頼をないがしろにすることができなかった。そこで家康は江戸幕府を開き、すぐに将軍職を息子の秀忠に譲り、徳川家の世襲である事を諸国の大名に示した。これにより、秀頼は摂津河内和泉65万石の一大名の地位に転落したのである。

その一方で、家康は娘の千姫を秀頼に嫁がせるなどして、豊臣家の気を紛らわせようを図った。しかし、秀頼はあくまでも家康に従おうとしなかった。実のところ、豊臣家のトップは秀頼ではなく、秀頼の生母淀殿だった。淀殿は、秀頼が幼いうちに豊臣家から天下を奪い、秀吉の恩義をないがしろにした家康を許すことができなかったのである。

一方、家康から見れば、すでに世は二代将軍秀忠の時代となっており、幕府の基盤も固まりつつあった中で、最後の懸念が秀頼の存在だった。これ以上豊臣家の存続を許しては幕府の安定に影響すると考えた家康は、ついにその討伐を決意した。

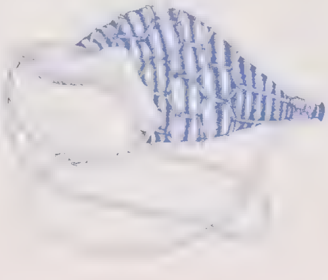
大坂冬の陣

1614（慶長19）年、家康は方広寺鐘銘事件（豊臣家が徳川家を滅ぼし自家の繁栄を願う文章が刻んでいるとした責めた事件）を口実として全国の大名を動員し、大坂城を包囲した。

大坂城の豊臣家も秀吉恩顧の大名たちを中心に与力を求めたが、誰も大坂城に入ろうとはしなかった。家康は関ヶ原の戦いののち、福島正則や黒田長政などの豊臣恩顧の大名たちに天下普請や城の修築などで大きな負担を課し、その力を弱めて、徳川家に従わざるを得ないようにしていたのである。

しかし、秀吉の遺産である大坂城は、関東方20万の大兵力をもって包囲しても、難攻不落の城塞だった。

大坂城は1583（天正11）年に、秀吉によっ



て石山本願寺跡に着工された安土城を凌駕する大城郭築である。それから一年半ほどかけ、城の中心である本丸の工事が進められた。三段の石垣の上には、五重の壮麗な天守閣が築かれた。その後、本丸を囲むようにして二の丸、惣構、三の丸と、秀吉が死去するまで拡張工事が続けられ、ついに難攻不落の巨城となったのである。

大坂方、冬の陣で奮闘

さて、籠城する大坂方の主将格は、大野治長、真田幸村、毛利勝永、長宗我部盛親、後藤又兵衛、明石全登などであった。開戦前、大坂方きっての智将真田幸村は、瀬田まで進撃して関東方を迎え撃つべきであると主張したが、受け入れられなかった。それどころか、関東方に内応しているのではないかと疑われたのである。

このため、大坂城外の一角に真田丸を築いて移り、関東方を相手に大いに奮戦した。12月4日、関東方の前田利常や井伊直孝、松平忠直など数万の軍勢が幸村の挑発に乗り、真田丸へ一斉に攻撃をかけた。だが、幸村の計略の前に関東方は甚大な損害を出し、大坂方が勝利を収めた。

さらに12月17日、大坂方の猛将塙団右衛

大坂夏の陣　参戦兵数

徳川方

<大和口>		<河内口>		<本軍>	
第一番手		右先鋒		第一右備	
[illegible]	[illegible]	藤堂高虎	5000	脇坂安元	[illegible]
[illegible]	[illegible]	左先鋒		新庄直定	[illegible]
[illegible]	500	井伊直孝	3200	杉原長房	[illegible]
[illegible]	[illegible]	第一番手右備		鳥居成次	[illegible]
[illegible]	[illegible]	小笠原秀政	1600	酒井忠世	[illegible]
[illegible]	[illegible]	仙石忠政	1000	土方雄氏	[illegible]
[illegible]	[illegible]	諏訪忠澄	540	細川興元	[illegible]
[illegible]	60	[illegible]	2100	[illegible]	200
[illegible]	290	[illegible]	600	合計	3566
合計	3290	[illegible]	300	第一左備	
第二番手		[illegible]	200	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	合計	6340	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	第一番左備		高力忠房	400
菅沼定芳	400	[illegible]	800	[illegible]	280
[illegible]	2000	[illegible]	800	土井利勝	870
[illegible]	[illegible]	[illegible]	1000	[illegible]	200
[illegible]	200	[illegible]	[illegible]	[illegible]	200
合計	[illegible]	[illegible]	[illegible]	合計	2590
第[illegible]番手		合計	3200	第[illegible]備	
[illegible]	1200	第二番手右備		[illegible]	600
[illegible]	1000	[illegible]	2300	[illegible]	300
西尾嘉教	600	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
松平忠明	1000	[illegible]	1000	[illegible]	200
[illegible]	[illegible]	[illegible]	1000	[illegible]	660
合計	4010	[illegible]	200	合計	1960
第四番手		合計	5500	本陣	
伊達政宗	10000	第二番左備		[illegible]	20000
合計	10000	相馬利胤	[illegible]	[illegible]	15500
第五番手		[illegible]	500	合計	35500
[illegible]	1800	[illegible]	200		
[illegible]	9000	松平康長	600	<殿軍>	
[illegible]	[illegible]	[illegible]	200	[illegible]	680
合計	11800	[illegible]	600	[illegible]	10790
		合計	3300	[illegible]	386
		第三番手右備		[illegible]	10000
		松平忠直	13400	[illegible]	500
		第三番手左備		合計	22756
		前田利常	15000		

豊臣方

五月六日の戦闘		五月七日の戦闘			
<道明寺口>		<天王寺口>		<遊軍>	
後藤又兵衛	2800	真田幸村		[illegible]	[illegible]
薄田兼相	400	真田幸綱		[illegible]	[illegible]
赤石守重	2000	真田信倍		[illegible]	[illegible]
毛利勝永	3000	3名小計	3500	[illegible]	3000
真田幸村	3000	大谷吉久		[illegible]	[illegible]
福島正守		渡辺糺		[illegible]	[illegible]
福島正鎮		伊木遠雄		[illegible]	[illegible]
渡辺糺		3名小計	2000	合計	14200
大谷吉久		毛利勝永		<船場>	
伊木遠雄		毛利勝家		明石全登	300
小倉行春		山本公雄		<北城>	
長岡興秋		樫井言孝		長曽我部盛親	
宮田時定		4名小計	4000	仙石宗也	
8人小計	6000	福島正守		津田主水	
合計	17200	福島正鎮		大場土佐	
<若江>		吉田好是		浅香長門	
木村重成	4700	篠原忠照		武光式部	
[illegible]		[illegible]		[illegible]	
内藤長秋		結城勝朝		合計	3000
2名小計	1000	浅井長房		<城内>	
[illegible]	300	竹田永翁		豊臣秀頼	
合計	6000	8名小計	2500	郡良列	
<八尾>		合計	12000	津川親行	
長曽我部盛親	5000	<岡山口>		大野治長	
増田盛次	300	大野治房		合計	3000
合計	5300	布施伝右衛門			
		新宮行朝			
		岡部則綱			
		岡田正繁			
		中瀬定純			
		二宮長範			
		正徳院			
		御宿政友			
		合計	4000		

門が関東方の蜂須賀至鎮の陣地に夜襲をかけ、大きな損害を与えた。このとき「夜討ちの大将塙団右衛門」という木札を敵の陣中に撒き、おおいに武名を上げた。

士気旺盛な大坂方に対し、極寒の中で大坂城を囲んでいるだけの関東方は意気が上がらなかった。これではとても攻略することはできないと見た家康は、大坂城に向けて大砲を撃ちこんだ。砲撃は昼夜を問わず続けられ、そのうちの1発が淀殿の居間に命中し、多数の侍女が死傷した。これにショックを受けた淀殿は、ついに和議を結ぶことに決めた。

家康も和議を結ぶことに合意し、12月22日に成立した。関東方と大坂方との戦いはこれで終結したかと思われた。だが、なんとしても秀頼を滅ぼそうとしていた家康は大坂方を謀り、大坂城の周囲の堀をすべて埋めてしまった。このため、難攻不落だった大坂城は何の防御機能も持たない裸城となってしまったのである。

さらに、大坂方が召抱えている浪人の放逐か、あるいは大和への国替えか、という難題を豊臣家に迫った。淀殿は度重なる家康の挑発に激怒し、要求をことごとく拒否。両者の再戦は決定的となったのである。

東西、再戦へ

1615(慶長20)年4月、徳川家康は大坂方が要求に応じないことを口実に、全国の大名に再び挙兵を命じた。

4月18日、家康は京都二条城に到着した。20日に伊達政宗、黒田長政、加藤嘉明、前田利常、上杉景勝、京極高知など、東西諸国の大名が続々と京都へ集結した。将軍秀忠は、21日に伏見城へ入城した。京都に集まった関東方の総兵力は、15万余となった。

家康は藤堂高虎の献策を容れて、大和から迂回して大坂へ迫る軍勢と、そのまま河内へ向かう軍勢の二つに分けた。

大和口の先鋒は、譜代の水野勝成が率いることになった。このあとを、本多忠政、松

平忠明、伊達政宗、松平忠輝らの諸隊が続いた。兵力は約3万4千である。水野勝成は小身を理由に先鋒の大将を辞退しようとしたが、家康は直々に勝成を激励し、先鋒の大将を任せたのである。

河内口の先鋒は、藤堂高虎と井伊直孝であった。この他、榊原康勝、酒井家次、本多忠朝、松平康長、松平忠直、前田利常などが続いた。こちらの兵力は約5万5千である。

本軍は徳川家康の1万5千、徳川秀忠の2万を中心に、酒井忠世、土井利勝、本多正純、徳川義直、徳川頼宣などの旗本譜代勢が前後に並んだ。兵力は約6万6千である。

関東方は29日より、次々と京都を出発していった。家康と秀忠は、それぞれ5月5日に京都を発った。

樫井の戦い

一方、大坂方でも再び浪人をかき集め、大坂城へ迫る関東方に対抗しようとしていた。続々と集まった浪人衆は15万ともいわれていたが、実際に使い物になるのは5万4千ほどでしかなかった。

大野治長は、大坂方に応じなかった紀伊の浅野長晟を討伐すべく、弟の大野治房や、大坂冬の陣で武名を上げた塙団右衛門に出陣を命じた。しかし4月29日、塙団右衛門は功名をはやって突出してしまい、浅野長晟の軍勢に和泉の樫井で邀撃され、団右衛門はあっけなく討ち死にしてしまった。この樫井の戦いは、大坂方にとってまことに幸先の悪いスタートとなったのである。

道明寺の戦い

大坂城に集結した大坂方は、軍議の結果、大和口にて徳川家康の関東方を迎え撃つことに決まった。前年の大坂冬の陣で講和のあと、大坂城の堀が家康の策謀によって埋め立てられ、籠城戦ができなくなったためである。

まず、後藤又兵衛、薄田兼相、明石全登

道明寺戦布陣図
1615年5月6日

らが率いる兵力6千4百が5月1日に大坂を出陣、大和路をおさえる要衝、河内の道明寺に向かった。途中、平野にて陣を布き、関東方の出陣を待ちうけた。

6日深夜、関東方の接近を知った後藤又兵衛は、麾下の兵2千8百を率いて平野を出発した。松明を連ねて大和街道を進撃し、夜明けころには藤井寺に到着した。ここで後続を待ったが、やってこないため、又兵衛は単独で兵を進めたのであった。

誉田を過ぎ、道明寺に出たところで物見を出すと、国分にはすでに関東方の兵が進出していた。そこで又兵衛は、大和口を押さえるべく石川を渡り、小松山に向かった。

関東方も、水野勝成麾下の3千8百を先鋒として、5月5日に奈良を出陣した。伊達政宗の兵1万、本多忠政5千、松平忠明3千8百などが水野隊に続いた。

午後4時、水野勝成は小松山の麓である国分に到着し、ここへ布陣した。後続の伊達政宗は、小松山の南東まで兵を進めて敵を警戒した。本多忠政と松平忠明は、小松山の東に布陣した。

6日午後2時ころ、勝成は藤井寺方面に松明の灯りを発見。物見を出しつつ、軍勢を西へと進めた。

午前4時ころ、両軍は小松山をめぐって激突した。小松山に登った後藤又兵衛の兵は東に下り、鬨の声を上げて関東方に討ち入った。小松山に登ろうとしていた関東方の奥田忠次は、この後藤隊ともろに衝突してしまったため鉄砲を撃つ暇もなく、槍を交えての激闘となった。

水野勝成は、大坂方が小松山に登ったのを見て、全軍に突撃を命じた。奥田隊の北方を進んでいた関東方の板倉重政は、後藤隊の銃火をかいくぐって進撃した。後藤隊の反撃も激しく、板倉隊は壊滅の危機に瀕した。そのとき、堀直寄、水野勝成らの隊が到着して板倉隊を救援し、攻め寄せた後藤隊を撃退した。各隊はさらに南へ進み、後藤隊の後方を断つことに成功した。

大坂方が山を下ってくるのを確認した伊達隊の先陣片倉重綱は、伏兵を起こして銃撃を加え、自らも兵を率いて進撃した。午前9時、小松山に攻撃を開始した。松平忠明は小松山の東より進み、後藤隊の銃撃を受けながらも槍を構えて突進し、山背を越した。

小松山に登った後藤又兵衛は緒戦、関東方を何度も撃退したが、単独では防ぎきれず、三方から関東方の攻撃を受けるに及んで、ついに小松山からの後退を決意した。

又兵衛は山を西へ駆け下りて平地に出ると、兵を二つに分けて関東方に反撃を加え、数隊を突き崩した。だが、関東方は多勢を頼みにして退かず、激闘を繰り広げていた。そこへ関東方の丹羽氏次が、側面から後藤隊に攻撃を加えてきた。さらに、伊達政宗の本隊が山麓に達し、数千の兵が一斉に後藤隊に向けて射撃したため、後藤隊は大きく崩れ、多数の兵が討ち死にした。

後藤又兵衛の戦死

正午近くになり、又兵衛は自ら兵を収めようと、単騎先頭に立った。そのとき、一弾が又兵衛の胸を貫いたのである。又兵衛は戦死、この報を聞いた後藤隊はたちまち壊滅

八尾・若江戦布陣図
1615年5月6日

した。道明寺へと敗走する者、敵中に突進して討ち死にする者が続出した。関東方の水野勝成は、退却する後藤隊の残兵を追い、石川を越えた。

このときになってようやく、薄田兼相、明石全登ら大坂方先鋒隊の後続が道明寺河原に到着した。彼らは後藤隊の残兵に加わり、追撃してきた関東方と大いに奮戦した。中でも薄田兼相の活躍はすさまじかったが、乱戦の中で討ち死にした。関東方に敗れたその他の諸将は道明寺を捨て、誉田の森に退却した。

夜明けに天王寺を発った真田幸村、毛利勝永らが率いる大坂方の後続1万2千が藤井寺に到着したとき、道明寺の戦いは大方決着がついていた。幸村は誉田で敗走してくる先鋒諸隊の後退を助け、関東方の追撃に備えた。

大坂方を追撃してきたのは、伊達隊の片倉重綱だった。重綱は自隊を前後二つに分け、騎馬鉄砲隊を左右に展開して、赤備えの真田隊に向かってきた。

幸村は兵を伏せて伊達隊が接近するのを待ち、槍をそろえて迎え撃った。伊達隊も突撃し、混戦となったが大坂方は後退せず、潮時と見た片倉重綱は、誉田の西に兵を引いた。

戦いも終わったころ、出発の遅れた松平忠輝の兵1万1千8百が誉田に到着した。戦機を逸した忠輝は大坂方を追撃しようとしたが、伊達政宗に諫められ、中止した。

このとき関東方は道明寺から誉田にかけて、大坂方は誉田の西から藤井寺前面にかけて布陣していた。両軍はしばらく対峙したまま銃撃戦を続けた。だが道明寺だけでなく、八尾、若江方面からも大坂方の敗報が伝わってきたのである。大坂方は軍議を開き、午後4時ころ、大坂城内へ退却と決まった。

大坂方の退却を知った関東方の一柳直盛や水野勝成は追撃を主張したが、伊達政宗らはこれを聞き入れず、道明寺方面での戦

いは終わった。真田幸村は、追撃してこない関東方に対し「関東勢には男は一人もなく候」との有名な捨て台詞を残し、大坂城へと引き揚げていったのである。

八尾、若江の戦い

道明寺の戦いと同じ5月6日、八尾、若江方面でも戦いがあった。この方面で戦った大坂方のおもな軍勢は、木村重成の4千7百と長宗我部盛親の8千、そして関東方は藤堂高虎の5千と井伊直孝の3千2百などである。

午前2時に大坂城を出発した木村重成は、大和路を進む家康、秀忠父子の徳川勢を側面から討とうと、若江方面に向かった。午前5時ころ、若江に到着した重成は部隊を3つに分けた。長宗我部盛親は、午前4時に増田盛次らとともに大坂城を出発し、久宝寺を経て八尾に進んだ。

夜明けころに大坂方の進撃を確認した藤堂高虎は、部隊を八尾方面に進めた。長宗我部盛親は長瀬川の堤に兵を伏せて藤堂隊を待ちかまえ、接近するとともに突撃を命じた。この伏兵に、藤堂隊は大損害を受けて敗走した。

また、若江方面の木村隊に対しても藤堂隊の右翼が攻めかかった。しかし、この方面においても藤堂隊は敗れ、大きな損害を受けて退却した。藤堂隊を打ち破った木村重成は「まだ家康、秀忠父子の首を取っていない」と、引き揚げを進言する家臣を退け、さらに兵を進めた。

午前7時ころ、木村隊は接近してくる赤備の関東方部隊を発見した。井伊直孝隊である。重成は井伊隊を田圃の畦道に誘いこんで討ち取ろうと、鉄砲360を伏せた。だが井伊隊はそれに引っかからず、玉串川を越えて木村隊に突入した。鉄砲を撃ち合い、槍を交わしての激闘となったが、やがて形勢不利となった木村隊が崩れ、敗走を始めた。だが重成は退くことなく、井伊隊の中に斬りこんで、ついに討ち死にした。

後から戦場に到着した関東方の榊原康政や丹羽長重らは、井伊隊の勝利を確認すると、大坂方の追撃に移った。また、木村隊の敗走を知った長宗我部盛親は関東方の追撃を避けながら大坂へ退き、この方面での戦いは終わった。大坂方は、いずれの戦いにおいても諸将がお互いに意思の疎通を欠き、各個に関東方とあたって敗北したのであった。

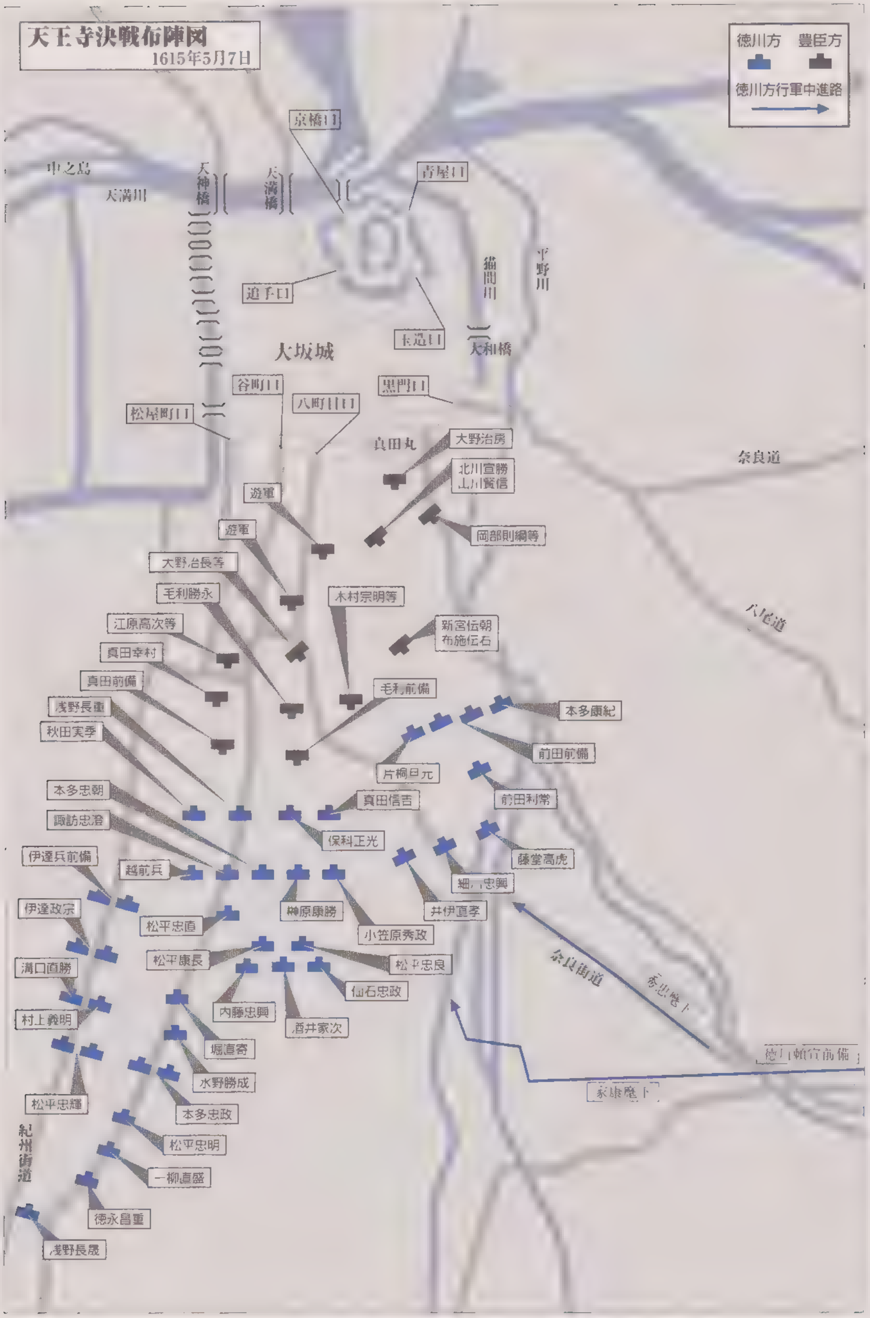
天王寺口の戦い

関東方の諸隊は、5月7日の夜明けとともに、それぞれの陣所から大坂に向けて出発した。この日が最後の決戦になると予想しての進撃である。そして最後の戦いだから、誰もが余計な損害を出したくなかった。味方は圧倒的兵力だから、適当に戦っても勝てるだろうと内心考えていたのである。

先鋒として天王寺方面に向かったのは、前夜徳川家康に叱責され、夜をついで前進した松平忠直である。これに本多忠政、松平忠明、伊達政宗、松平忠輝らが続いた。この他、真田信吉、本多忠朝、浅野長重、秋田実季、小笠原秀政、保科正光、榊原康勝、諏訪忠澄などの諸隊も天王寺に向かった。最後に、徳川家康の本隊が平野を出陣した。あわせて10万余の大軍勢である。

対する大坂方は、真田幸村が先鋒として茶臼山に、毛利勝永が天王寺に布陣した。この他に浅井長房、竹田永翁、木村宗明や大野治長など合計1万6千8百の兵が天王寺方面の守りを固めていた。その後方には、豊臣秀頼麾下の七手組を中心とした遊軍1万4千2百が控えていた。明石全登は関東方の翼側を攻撃しようと、精兵3百をもって船場に陣を構えた。また城北には長宗我部盛親など3千3百、城内には豊臣秀頼の兵3千があった。

「秀頼公の出陣があれば大坂方の意気が大いに上がる」と考えた幸村は、息子の大助


天王寺決戦布陣図
1615年5月7日
徳川方
豊臣方
徳川方行軍中進路
京橋口
青屋口
中之島
天満川
天神橋
天満橋
猫間川
平野川
追手口
大坂城
大和橋
谷町口
八町目口
黒門口
松屋町口
真田丸
大野治房
北川宣勝
山川賢信
奈良道
遊軍
遊軍
岡部則綱等
大野治長等
毛利勝永
木村宗明等
江原高次等
新宮伝朝
布施伝右
八尾道
真田幸村
真田前備
毛利前備
浅野長重
本多康紀
秋田実季
前田前備
片桐且元
本多忠朝
真田信吉
前田利常
諏訪忠澄
保科正光
伊達兵前備
藤堂高虎
越前兵
伊達政宗
松平忠直
榊原康勝
井伊直孝
小笠原秀政
溝口直勝
松平康長
松平忠良
奈良街道
仙石忠政
内藤忠興
酒井家次
村上義明
堀直寄
水野勝成
松平忠輝
本多忠政
紀州街道
松平忠明
一柳直盛
徳永昌重
浅野長晟

を大坂城に送り、秀頼に出馬を願った。それを聞き入れた秀頼は甲冑に身を固めて自ら出馬しようとしたが、城門まで来たところで七手組の速水守久が「まだ御出馬は早すぎます」と引きとめたため、秀頼は城に戻ってしまったのである。

ここで敗れれば文字通りの最後となるから、前日から関東方と戦っている武将たちは誰もが決死の覚悟だった。しかし、大坂城に残っていた者たちはこの期に及んでも、のんびりと構えていたようである。

真田、毛利隊の突撃

最後の決戦は、5月7日正午に開始された。関東方は、数に任せて大坂方を一気に押し潰すだけである。劣勢に立たされた大坂方はただ一つ、関東方の総大将である徳川家康の首を狙うことだけであった。

天王寺方面で決戦の口火を切ったのは、関東方の本多忠朝と大坂方の毛利勝永であった。両隊は接近すると銃撃戦を開始した。毛利隊は二手に分かれて本多隊を圧倒し、ついに忠朝を討ち取った。この余勢をかって、毛利隊は真田信吉隊をも撃退した。

関東方の小笠原秀政は、保科正光とともに大坂方の竹田永翁を撃破、さらに進撃し、大野治長の兵と戦っていた。そこへ、勝ちに乗じた毛利隊が乱入してきて、小笠原、保科の両隊も撃破された。このときの傷がもとで、小笠原秀政はその夜に死亡した。

毛利勝永はさらに進み、家康本陣の前で防戦しようとする秋田実季、立花宗茂、本多忠純らの軍勢をも撃退した。勝永は大混乱に陥っている関東方の間をぬって、家康の本陣に迫った。

茶臼山に本陣を置いた真田幸村は、周囲の諸将とともに、茶臼山へ殺到してくる松平忠直などの関東方と激戦を繰り広げていた。やがて幸村は毛利勝永に合わせ、家康に向かって突撃を開始した。

戦後「真田、日本一の兵」と賞賛された真田勢は怒涛の如く松平忠直の軍勢を突破し、勝永とともに家康の旗本に迫った。この幸村の猛攻に、家康の本陣は総崩れとなった。三方ヶ原の合戦以来の徳川本陣大敗走である。家康の側で奮戦しているのは小栗正忠ただ1人のみであった。目前に迫る六文銭の赤備えに、さすがの家康も最期を覚悟した。

そのとき、永井直勝が兵を取りまとめて軍勢を立て直し、数にものをいわせて反撃に転じたのである。こうなるとさしもの幸村にも勝機はなく、真田隊は茶臼山まで押し戻されてしまった。幸村は、安居天神で一息入れていたところを関東方に囲まれ、ついに討ち取られた。

圧倒的な兵力の関東方に、天王寺口の大坂方諸隊が次々に打ち破られた。奮闘していた毛利勝永はついに孤立し、大坂城へと退却を開始した。

岡山口の戦い

岡山方面に進撃した関東方は、先鋒が前田利常、本多康紀、片桐且元などである。前日の合戦で激闘を繰り広げた藤堂高虎と井伊直孝は、細川忠興とともに後方に下げ

られた。その後に、徳川秀忠の本隊が続く。総勢5万余の軍勢である。

対する大坂方は、山川賢信、北川宣勝、御宿政友、二宮長範、大野治房などの寄せ集めだった。兵力はわずかに4千6百である。これらの軍勢は篠山を中心に布陣した

しかしながら、岡山口でも大坂方は健闘した。数に優る関東方に対し、大野治房らは乱戦に持ちこんで前田利常隊を突破した。そして酒井忠世、土井利勝らの旗本勢を打ち破り、秀忠の本隊に迫った。

ふがいない先鋒の戦いぶりに、秀忠は自ら槍をとって戦おうとしたが、家臣に押し止められた。幕下にあった黒田長政、加藤嘉明らが本陣を固く警護した。土井利勝は敗兵を励まし、反撃に転じた。

天王寺口に向かった井伊直孝は、自軍の危機を見て引き返し、大坂方を撃退した。その間に本多康紀や片桐且元などが大坂方の一隊を側面から攻撃し、退却させた。危機に陥った大野治房は残る兵を集め、反撃に転じた。しかし、盛り返した前田隊に押し返され、ついに大坂城へ後退したのである。

大坂落城

大坂方は天王寺口と岡山口の両方で敗北し、大半の将兵が討ち死にした。大坂城外で最後まで奮戦していた毛利勝永は、遊軍だった七手組とともに最後の反撃を加え、藤堂高虎隊を打ち破った。しかし、衆寡敵せず、次々に攻め寄せてくる関東方に、大坂方の残兵はついに城内に逃げこんだ。関東方はこれを追い、三の丸に迫った。

明石全登は関東方の背後を衝くべく船場で待機していたが、その機会を得られないまま、迫ってきた松平忠直、水野勝成の両隊と戦い、乱戦の中に消えた。生死は不明である。

相次ぐ敗報に狼狽する城兵の中で、城内にいた豊臣秀頼は出陣して戦おうとした。しかし、七手組の速水守久が「本丸を守り、力尽きて後に自害すべきである」と諌めたのである。秀頼はその言葉に従い、ついに出陣することはなかった。

混乱する大坂方の中に関東方への内応者が出て、台所へ放火した。火焔はたちまち城内に広がり、天を焦がした。これを見た関東方は、我先にと本丸へ迫り、午後5時ころに二の丸が落ちた。生き残っていた諸将は次々に自害したが、長宗我部盛親や大野治房など、一部の武将は城を脱出した。

その夜、大野治長は千姫に豊臣秀頼の助命嘆願を託し、城から出した。坂崎直盛に保護された千姫は父である秀忠に秀頼の助命を願ったが、もはや助命は認められなかった。

翌5月8日、炎上する大坂城の中で、秀頼と淀殿はともに自害して果てた。大野治長、毛利勝永、そして真田幸村の子大助ら30余人が秀頼と運命をともにした。

大坂夏の陣の後、秀頼の遺児国松は捕らえられて処刑され、ここに豊臣家は滅亡した。ようやく徳川幕府の体制を磐石のものとしたことを確認した徳川家康は、大坂夏の陣の翌年の元和元年、75歳でこの世を去ったのであった。

ところが、太平の世となったのちも、真田幸村と豊臣秀頼の生存説が世間でささやかれていた。幸村は焼け落ちる大坂城から秀頼を連れ出して大坂を脱出し、島津家の船で薩摩へ落ち延びたというのだ。しかも薩摩には、秀頼の墓まであるという。

ほかにも、豊臣恩顧の大名加藤清正の領地である肥後に落ちたという説もある。徳川幕府の厳しい法度に締め付けられる生活となったことで、庶民はこのような生存伝説を信じ、華やぎのあった豊臣時代の復活を願っていたのかもしれない。

参考文献

『戦国人名事典』阿部猛・西村圭子編
『戦国大名家臣団事典　東国編・西国編』山本大・小和田哲男編
『紀州雑賀衆鈴木一族』鈴木真哉著
『真田幸村のすべて』小林計一郎編
『信長公記』太田牛一著　桑田忠親校注
『明智軍記』二木謙一校注
別冊歴史読本『織田信長その激越なる生涯』『徳川家康その重くて遠き道』
『疾風』織田信長軍団　一〇〇人の武将』『怒濤』豊臣秀吉軍団　一〇〇人の武将』
　以上、新人物往来社

歴史群像シリーズ『戦国合戦大全』『上杉謙信　真田戦記』『【戦国】セレクション・激闘　大坂の陣』
『【戦国】セレクション・奮迅　真田幸村』『忍者と忍術』特別編集『決定版　図説・戦国地図帳』
合戦ドキュメント『三方ヶ原の戦い』『桶狭間の戦い』
学研M文庫『史伝　伊達政宗』『史伝　武田信玄』小和田哲男著
　以上、学習研究社

『織田信長家臣人名辞典』高木昭作監修　谷口克広著　吉川弘文館
『織田信長総合事典』岡田正人編著　雄山閣出版
『戦国合戦事典』小和田哲男著／PHP文庫
『忍者の謎』戸部新十郎著　PHP文庫
『常山紀談 上・中・下巻』湯浅常山著　森銑三・校訂／岩波文庫
『甲陽軍鑑』腰原哲朗訳／教育社新書
『尼子盛衰人物記』妹尾豊三郎著　広瀬町観光協会
ビッグマンスペシャル『武田信玄　戦国最強武田軍団の全貌』世界文化社
『クロニック戦国全史』講談社
『朝日　日本歴史人物事典』朝日新聞社

以上の図書等を参考にいたしました

戦国無双（せんごくむそう）キャラクターズ真書（しんしょ）

2004年3月27日　初版発行

編者
コーエー 出版部（しゅっぱんぶ）

編集
MINOIX

装丁
株式会社キュービスト（Q-BIST）横井圭子、辛島竜彦

本文デザイン・DTP
有限会社SPURT

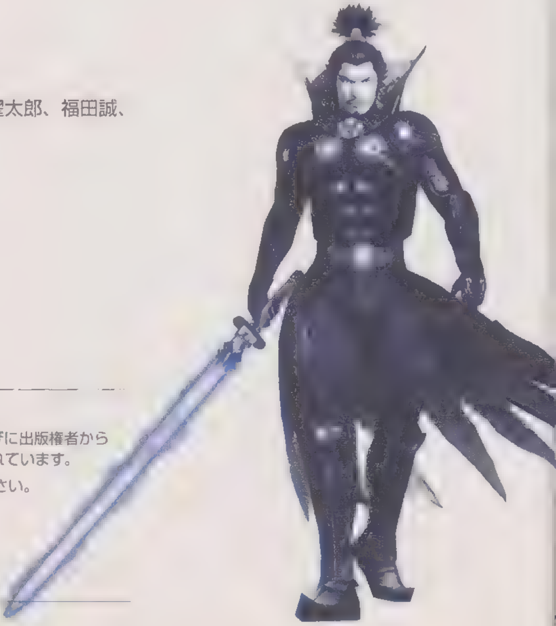
イラスト
神谷礼子

原稿執筆
伊藤龍太郎、岩上玲央、大山格、沖田峯子、武田櫂太郎、福田誠、
弾正ブラザーズ

発行者
襟川陽一

発行所
株式会社　光栄
〒223-8503　横浜市港北区箕輪町1-18-12
TEL045-561-8181

印刷・製本
東京書籍印刷株式会社



• 定価はカバーに表示してあります。
• 本書は、著作権法による保護を受けています。著作権者ならびに出版権者から文書による許諾を得ずに無断で複製、転載することは禁じられています。
• 本書の内容についての電話によるお問い合わせはご遠慮ください。
• 乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

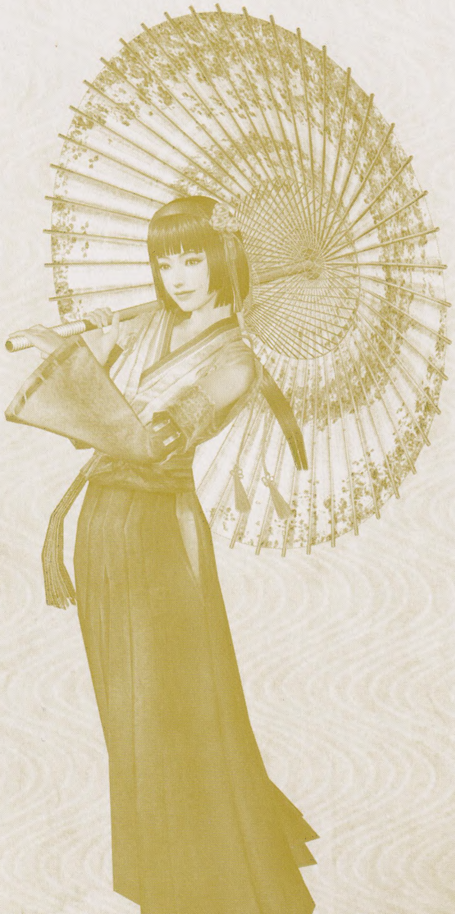
©2004 KOEI Co., Ltd. Printed in Japan

ISBN4-7758-0171-6

戦国無双
キャラクターズ真書

SAMURAI
WARRIORS
CHARACTERS
PROFILE

株式会社コーエー



戦国無双 キャラクターズ真書

SAMURAI WARRIORS CHARACTERS PROFILE

KOEI

絢爛たる安土桃山文化の舞姫。
歌舞伎の創始者と伝えられる、
芸能の神。

戦国無双
キャラクターズ真書
SAMURAI
WARRIORS
CHARACTERS
PROFILE

ISBN4-7758-0171-6

C0076 ¥1200E

9784775801710

1920076012006

定価：本体1,200円＋税

株式会社コーエー®

戦国無双 キャラクターズ真書

武に捧げた 漢たちのすべて！

英雄の章 Main Characters

真田幸村から上杉謙信、お市、くのいちなど。プレイヤーキャラの実際の歴史での活躍やエピソード満載。

群像の章 Sub - Characters

NPCとてただのやられ役、雑魚ではない！所属する大名や主要参加合戦などとともに、戦国時代を彩った彼ら約160名の活躍を50音順にて紹介する。

合戦の章 Battlefields

ゲーム中のイベントは、実際に戦国の合戦で起きたことがモデルになっている！　川中島、長篠、本能寺の変、大坂夏の陣など、ゲームのステージとなった合戦を紹介！

SAMURAI WARRIORS CHARACTERS PROFILE

koei